（東京大学図書館）百人一首　小倉山

三郎の子孫が、自分の家の子孫に対して、「八幡太郎義家」と呼ばれた人物を、自分の家の子孫に対して、「八幡太郎義家」と呼ばせたのである。

【参考】『尊卑分脈』『源氏系図』『平家物語』『吾妻鏡』『太平記』『今昔物語』『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『大鏡』『日本紀略』『扶桑略記』『日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』『日本紀』『日本書紀』『日本逸史』『日本外史』『日本政記』『日本史』『日本風俗史』『日本歴史』『日本歴史地理』『日本歴史地理学』『日本歴史地理学研究』『日本歴史地理学研究所』『日本歴史地理学研究所紀要』『日本歴史地理学研究所紀要第一』『日本歴史地理学研究所紀要第二』『日本歴史地理学研究所紀要第三』『日本歴史地理学研究所紀要第四』『日本歴史地理学研究所紀要第五』『日本歴史地理学研究所紀要第六』『日本歴史地理学研究所紀要第七』『日本歴史地理学研究所紀要第八』『日本歴史地理学研究所紀要第九』『日本歴史地理学研究所紀要第十』『日本歴史地理学研究所紀要第十一』『日本歴史地理学研究所紀要第十二』『日本歴史地理学研究所紀要第十三』『日本歴史地理学研究所紀要第十四』『日本歴史地理学研究所紀要第十五』『日本歴史地理学研究所紀要第十六』『日本歴史地理学研究所紀要第十七』『日本歴史地理学研究所紀要第十八』『日本歴史地理学研究所紀要第十九』『日本歴史地理学研究所紀要第二十』『日本歴史地理学研究所紀要第二十一』『日本歴史地理学研究所紀要第二十二』『日本歴史地理学研究所紀要第二十三』『日本歴史地理学研究所紀要第二十四』『日本歴史地理学研究所紀要第二十五』『日本歴史地理学研究所紀要第二十六』『日本歴史地理学研究所紀要第二十七』『日本歴史地理学研究所紀要第二十八』『日本歴史地理学研究所紀要第二十九』『日本歴史地理学研究所紀要第三十』『日本歴史地理学研究所紀要第三十一』『日本歴史地理学研究所紀要第三十二』『日本歴史地理学研究所紀要第三十三』『日本歴史地理学研究所紀要第三十四』『日本歴史地理学研究所紀要第三十五』『日本歴史地理学研究所紀要第三十六』『日本歴史地理学研究所紀要第三十七』『日本歴史地理学研究所紀要第三十八』『日本歴史地理学研究所紀要第三十九』『日本歴史地理学研究所紀要第四十』『日本歴史地理学研究所紀要第四十一』『日本歴史地理学研究所紀要第四十二』『日本歴史地理学研究所紀要第四十三』『日本歴史地理学研究所紀要第四十四』『日本歴史地理学研究所紀要第四十五』『日本歴史地理学研究所紀要第四十六』『日本歴史地理学研究所紀要第四十七』『日本歴史地理学研究所紀要第四十八』『日本歴史地理学研究所紀要第四十九』『日本歴史地理学研究所紀要第五十』『日本歴史地理学研究所紀要第五十一』『日本歴史地理学研究所紀要第五十二』『日本歴史地理学研究所紀要第五十三』『日本歴史地理学研究所紀要第五十四』『日本歴史地理学研究所紀要第五十五』『日本歴史地理学研究所紀要第五十六』『日本歴史地理学研究所紀要第五十七』『日本歴史地理学研究所紀要第五十八』『日本歴史地理学研究所紀要第五十九』『日本歴史地理学研究所紀要第六十』『日本歴史地理学研究所紀要第六十一』『日本歴史地理学研究所紀要第六十二』『日本歴史地理学研究所紀要第六十三』『日本歴史地理学研究所紀要第六十四』『日本歴史地理学研究所紀要第六十五』『日本歴史地理学研究所紀要第六十六』『日本歴史地理学研究所紀要第六十七』『日本歴史地理学研究所紀要第六十八』『日本歴史地理学研究所紀要第六十九』『日本歴史地理学研究所紀要第七十』『日本歴史地理学研究所紀要第七十一』『日本歴史地理学研究所紀要第七十二』『日本歴史地理学研究所紀要第七十三』『日本歴史地理学研究所紀要第七十四』『日本歴史地理学研究所紀要第七十五』『日本歴史地理学研究所紀要第七十六』『日本歴史地理学研究所紀要第七十七』『日本歴史地理学研究所紀要第七十八』『日本歴史地理学研究所紀要第七十九』『日本歴史地理学研究所紀要第八十』『日本歴史地理学研究所紀要第八十一』『日本歴史地理学研究所紀要第八十二』『日本歴史地理学研究所紀要第八十三』『日本歴史地理学研究所紀要第八十四』『日本歴史地理学研究所紀要第八十五』『日本歴史地理学研究所紀要第八十六』『日本歴史地理学研究所紀要第八十七』『日本歴史地理学研究所紀要第八十八』『日本歴史地理学研究所紀要第八十九』『日本歴史地理学研究所紀要第九十』『日本歴史地理学研究所紀要第九十一』『日本歴史地理学研究所紀要第九十二』『日本歴史地理学研究所紀要第九十三』『日本歴史地理学研究所紀要第九十四』『日本歴史地理学研究所紀要第九十五』『日本歴史地理学研究所紀要第九十六』『日本歴史地理学研究所紀要第九十七』『日本歴史地理学研究所紀要第九十八』『日本歴史地理学研究所紀要第九十九』『日本歴史地理学研究所紀要第百』『日本歴史地理学研究所紀要第百一』『日本歴史地理学研究所紀要第百二』『日本歴史地理学研究所紀要第百三』『日本歴史地理学研究所紀要第百四』『日本歴史地理学研究所紀要第百五』『日本歴史地理学研究所紀要第百六』『日本歴史地理学研究所紀要第百七』『日本歴史地理学研究所紀要第百八』『日本歴史地理学研究所紀要第百九』『日本歴史地理学研究所紀要第百十』『日本歴史地理学研究所紀要第百十一』『日本歴史地理学研究所紀要第百十二』『日本歴史地理学研究所紀要第百十三』『日本歴史地理学研究所紀要第百十四』『日本歴史地理学研究所紀要第百十五』『日本歴史地理学研究所紀要第百十六』『日本歴史地理学研究所紀要第百十七』『日本歴史地理学研究所紀要第百十八』『日本歴史地理学研究所紀要第百十九』『日本歴史地理学研究所紀要第百二十』『日本歴史地理学研究所紀要第百二十一』『日本歴史地理学研究所紀要第百二十二』『日本歴史地理学研究所紀要第百二十三』『日本歴史地理学研究所紀要第百二十四』『日本歴史地理学研究所紀要第百二十五』『日本歴史地理学研究所紀要第百二十六』『日本歴史地理学研究所紀要第百二十七』『日本歴史地理学研究所紀要第百二十八』『日本歴史地理学研究所紀要第百二十九』『日本歴史地理学研究所紀要第百三十』『日本歴史地理学研究所紀要第百三十一』『日本歴史地理学研究所紀要第百三十二』『日本歴史地理学研究所紀要第百三十三』『日本歴史地理学研究所紀要第百三十四』『日本歴史地理学研究所紀要第百三十五』『日本歴史地理学研究所紀要第百三十六』『日本歴史地理学研究所紀要第百三十七』『日本歴史地理学研究所紀要第百三十八』『日本歴史地理学研究所紀要第百三十九』『日本歴史地理学研究所紀要第百四十』『日本歴史地理学研究所紀要第百四十一』『日本歴史地理学研究所紀要第百四十二』『日本歴史地理学研究所紀要第百四十三』『日本歴史地理学研究所紀要第百四十四』『日本歴史地理学研究所紀要第百四十五』『日本歴史地理学研究所紀要第百四十六』『日本歴史地理学研究所紀要第百四十七』『日本歴史地理学研究所紀要第百四十八』『日本歴史地理学研究所紀要第百四十九』『日本歴史地理学研究所紀要第百五十』『日本歴史地理学研究所紀要第百五十一』『日本歴史地理学研究所紀要第百五十二』『日本歴史地理学研究所紀要第百五十三』『日本歴史地理学研究所紀要第百五十四』『日本歴史地理学研究所紀要第百五十五』『日本歴史地理学研究所紀要第百五十六』『日本歴史地理学研究所紀要第百五十七』『日本歴史地理学研究所紀要第百五十八』『日本歴史地理学研究所紀要第百五十九』『日本歴史地理学研究所紀要第百六十』『日本歴史地理学研究所紀要第百六十一』『日本歴史地理学研究所紀要第百六十二』『日本歴史地理学研究所紀要第百六十三』『日本歴史地理学研究所紀要第百六十四』『日本歴史地理学研究所紀要第百六十五』『日本歴史地理学研究所紀要第百六十六』『日本歴史地理学研究所紀要第百六十七』『日本歴史地理学研究所紀要第百六十八』『日本歴史地理学研究所紀要第百六十九』『日本歴史地理学研究所紀要第百七十』『日本歴史地理学研究所紀要第百七十一』『日本歴史地理学研究所紀要第百七十二』『日本歴史地理学研究所紀要第百七十三』『日本歴史地理学研究所紀要第百七十四』『日本歴史地理学研究所紀要第百七十五』『日本歴史地理学研究所紀要第百七十六』『日本歴史地理学研究所紀要第百七十七』『日本歴史地理学研究所紀要第百七十八』『日本歴史地理学研究所紀要第百七十九』『日本歴史地理学研究所紀要第百八十』『日本歴史地理学研究所紀要第百八十一』『日本歴史地理学研究所紀要第百八十二』『日本歴史地理学研究所紀要第百八十三』『日本歴史地理学研究所紀要第百八十四』『日本歴史地理学研究所紀要第百八十五』『日本歴史地理学研究所紀要第百八十六』『日本歴史地理学研究所紀要第百八十七』『日本歴史地理学研究所紀要第百八十八』『日本歴史地理学研究所紀要第百八十九』『日本歴史地理学研究所紀要第百九十』『日本歴史地理学研究所紀要第百九十一』『日本歴史地理学研究所紀要第百九十二』『日本歴史地理学研究所紀要第百九十三』『日本歴史地理学研究所紀要第百九十四』『日本歴史地理学研究所紀要第百九十五』『日本歴史地理学研究所紀要第百九十六』『日本歴史地理学研究所紀要第百九十七』『日本歴史地理学研究所紀要第百九十八』『日本歴史地理学研究所紀要第百九十九』『日本歴史地理学研究所紀要第二百』『日本歴史地理学研究所紀要第二百一』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九』『日本歴史地理学研究所紀要第二百十』『日本歴史地理学研究所紀要第二百十一』『日本歴史地理学研究所紀要第二百十二』『日本歴史地理学研究所紀要第二百十三』『日本歴史地理学研究所紀要第二百十四』『日本歴史地理学研究所紀要第二百十五』『日本歴史地理学研究所紀要第二百十六』『日本歴史地理学研究所紀要第二百十七』『日本歴史地理学研究所紀要第二百十八』『日本歴史地理学研究所紀要第二百十九』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二十』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二十一』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二十二』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二十三』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二十四』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二十五』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二十六』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二十七』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二十八』『日本歴史地理学研究所紀要第二百二十九』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三十』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三十一』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三十二』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三十三』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三十四』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三十五』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三十六』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三十七』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三十八』『日本歴史地理学研究所紀要第二百三十九』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四十』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四十一』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四十二』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四十三』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四十四』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四十五』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四十六』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四十七』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四十八』『日本歴史地理学研究所紀要第二百四十九』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五十』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五十一』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五十二』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五十三』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五十四』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五十五』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五十六』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五十七』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五十八』『日本歴史地理学研究所紀要第二百五十九』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六十』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六十一』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六十二』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六十三』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六十四』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六十五』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六十六』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六十七』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六十八』『日本歴史地理学研究所紀要第二百六十九』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七十』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七十一』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七十二』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七十三』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七十四』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七十五』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七十六』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七十七』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七十八』『日本歴史地理学研究所紀要第二百七十九』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八十』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八十一』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八十二』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八十三』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八十四』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八十五』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八十六』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八十七』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八十八』『日本歴史地理学研究所紀要第二百八十九』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九十』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九十一』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九十二』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九十三』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九十四』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九十五』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九十六』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九十七』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九十八』『日本歴史地理学研究所紀要第二百九十九』『日本歴史地理学研究所紀要第三百』『日本歴史地理学研究所紀要第三百一』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九』『日本歴史地理学研究所紀要第三百十』『日本歴史地理学研究所紀要第三百十一』『日本歴史地理学研究所紀要第三百十二』『日本歴史地理学研究所紀要第三百十三』『日本歴史地理学研究所紀要第三百十四』『日本歴史地理学研究所紀要第三百十五』『日本歴史地理学研究所紀要第三百十六』『日本歴史地理学研究所紀要第三百十七』『日本歴史地理学研究所紀要第三百十八』『日本歴史地理学研究所紀要第三百十九』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二十』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二十一』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二十二』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二十三』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二十四』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二十五』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二十六』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二十七』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二十八』『日本歴史地理学研究所紀要第三百二十九』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三十』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三十一』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三十二』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三十三』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三十四』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三十五』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三十六』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三十七』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三十八』『日本歴史地理学研究所紀要第三百三十九』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四十』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四十一』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四十二』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四十三』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四十四』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四十五』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四十六』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四十七』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四十八』『日本歴史地理学研究所紀要第三百四十九』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五十』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五十一』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五十二』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五十三』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五十四』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五十五』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五十六』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五十七』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五十八』『日本歴史地理学研究所紀要第三百五十九』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六十』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六十一』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六十二』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六十三』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六十四』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六十五』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六十六』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六十七』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六十八』『日本歴史地理学研究所紀要第三百六十九』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七十』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七十一』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七十二』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七十三』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七十四』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七十五』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七十六』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七十七』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七十八』『日本歴史地理学研究所紀要第三百七十九』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八十』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八十一』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八十二』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八十三』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八十四』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八十五』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八十六』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八十七』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八十八』『日本歴史地理学研究所紀要第三百八十九』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九十』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九十一』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九十二』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九十三』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九十四』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九十五』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九十六』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九十七』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九十八』『日本歴史地理学研究所紀要第三百九十九』『日本歴史地理学研究所紀要第四百』『日本歴史地理学研究所紀要第四百一』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九』『日本歴史地理学研究所紀要第四百十』『日本歴史地理学研究所紀要第四百十一』『日本歴史地理学研究所紀要第四百十二』『日本歴史地理学研究所紀要第四百十三』『日本歴史地理学研究所紀要第四百十四』『日本歴史地理学研究所紀要第四百十五』『日本歴史地理学研究所紀要第四百十六』『日本歴史地理学研究所紀要第四百十七』『日本歴史地理学研究所紀要第四百十八』『日本歴史地理学研究所紀要第四百十九』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二十』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二十一』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二十二』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二十三』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二十四』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二十五』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二十六』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二十七』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二十八』『日本歴史地理学研究所紀要第四百二十九』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三十』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三十一』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三十二』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三十三』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三十四』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三十五』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三十六』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三十七』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三十八』『日本歴史地理学研究所紀要第四百三十九』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四十』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四十一』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四十二』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四十三』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四十四』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四十五』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四十六』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四十七』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四十八』『日本歴史地理学研究所紀要第四百四十九』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五十』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五十一』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五十二』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五十三』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五十四』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五十五』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五十六』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五十七』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五十八』『日本歴史地理学研究所紀要第四百五十九』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六十』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六十一』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六十二』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六十三』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六十四』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六十五』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六十六』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六十七』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六十八』『日本歴史地理学研究所紀要第四百六十九』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七十』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七十一』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七十二』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七十三』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七十四』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七十五』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七十六』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七十七』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七十八』『日本歴史地理学研究所紀要第四百七十九』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八十』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八十一』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八十二』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八十三』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八十四』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八十五』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八十六』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八十七』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八十八』『日本歴史地理学研究所紀要第四百八十九』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九十』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九十一』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九十二』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九十三』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九十四』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九十五』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九十六』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九十七』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九十八』『日本歴史地理学研究所紀要第四百九十九』『日本歴史地理学研究所紀要第五百』『日本歴史地理学研究所紀要第五百一』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九』『日本歴史地理学研究所紀要第五百十』『日本歴史地理学研究所紀要第五百十一』『日本歴史地理学研究所紀要第五百十二』『日本歴史地理学研究所紀要第五百十三』『日本歴史地理学研究所紀要第五百十四』『日本歴史地理学研究所紀要第五百十五』『日本歴史地理学研究所紀要第五百十六』『日本歴史地理学研究所紀要第五百十七』『日本歴史地理学研究所紀要第五百十八』『日本歴史地理学研究所紀要第五百十九』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二十』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二十一』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二十二』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二十三』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二十四』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二十五』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二十六』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二十七』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二十八』『日本歴史地理学研究所紀要第五百二十九』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三十』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三十一』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三十二』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三十三』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三十四』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三十五』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三十六』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三十七』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三十八』『日本歴史地理学研究所紀要第五百三十九』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四十』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四十一』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四十二』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四十三』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四十四』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四十五』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四十六』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四十七』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四十八』『日本歴史地理学研究所紀要第五百四十九』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五十』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五十一』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五十二』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五十三』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五十四』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五十五』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五十六』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五十七』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五十八』『日本歴史地理学研究所紀要第五百五十九』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六十』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六十一』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六十二』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六十三』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六十四』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六十五』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六十六』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六十七』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六十八』『日本歴史地理学研究所紀要第五百六十九』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七十』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七十一』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七十二』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七十三』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七十四』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七十五』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七十六』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七十七』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七十八』『日本歴史地理学研究所紀要第五百七十九』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八十』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八十一』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八十二』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八十三』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八十四』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八十五』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八十六』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八十七』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八十八』『日本歴史地理学研究所紀要第五百八十九』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九十』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九十一』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九十二』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九十三』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九十四』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九十五』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九十六』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九十七』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九十八』『日本歴史地理学研究所紀要第五百九十九』『日本歴史地理学研究所紀要第六百』『日本歴史地理学研究所紀要第六百一』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九』『日本歴史地理学研究所紀要第六百十』『日本歴史地理学研究所紀要第六百十一』『日本歴史地理学研究所紀要第六百十二』『日本歴史地理学研究所紀要第六百十三』『日本歴史地理学研究所紀要第六百十四』『日本歴史地理学研究所紀要第六百十五』『日本歴史地理学研究所紀要第六百十六』『日本歴史地理学研究所紀要第六百十七』『日本歴史地理学研究所紀要第六百十八』『日本歴史地理学研究所紀要第六百十九』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二十』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二十一』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二十二』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二十三』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二十四』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二十五』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二十六』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二十七』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二十八』『日本歴史地理学研究所紀要第六百二十九』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三十』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三十一』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三十二』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三十三』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三十四』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三十五』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三十六』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三十七』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三十八』『日本歴史地理学研究所紀要第六百三十九』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四十』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四十一』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四十二』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四十三』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四十四』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四十五』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四十六』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四十七』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四十八』『日本歴史地理学研究所紀要第六百四十九』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五十』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五十一』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五十二』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五十三』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五十四』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五十五』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五十六』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五十七』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五十八』『日本歴史地理学研究所紀要第六百五十九』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六十』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六十一』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六十二』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六十三』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六十四』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六十五』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六十六』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六十七』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六十八』『日本歴史地理学研究所紀要第六百六十九』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七十』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七十一』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七十二』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七十三』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七十四』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七十五』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七十六』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七十七』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七十八』『日本歴史地理学研究所紀要第六百七十九』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八十』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八十一』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八十二』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八十三』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八十四』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八十五』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八十六』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八十七』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八十八』『日本歴史地理学研究所紀要第六百八十九』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九十』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九十一』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九十二』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九十三』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九十四』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九十五』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九十六』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九十七』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九十八』『日本歴史地理学研究所紀要第六百九十九』『日本歴史地理学研究所紀要第七百』『日本歴史地理学研究所紀要第七百一』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二』『日本歴史地理学研究所紀要第七百三』『日本歴史地理学研究所紀要第七百四』『日本歴史地理学研究所紀要第七百五』『日本歴史地理学研究所紀要第七百六』『日本歴史地理学研究所紀要第七百七』『日本歴史地理学研究所紀要第七百八』『日本歴史地理学研究所紀要第七百九』『日本歴史地理学研究所紀要第七百十』『日本歴史地理学研究所紀要第七百十一』『日本歴史地理学研究所紀要第七百十二』『日本歴史地理学研究所紀要第七百十三』『日本歴史地理学研究所紀要第七百十四』『日本歴史地理学研究所紀要第七百十五』『日本歴史地理学研究所紀要第七百十六』『日本歴史地理学研究所紀要第七百十七』『日本歴史地理学研究所紀要第七百十八』『日本歴史地理学研究所紀要第七百十九』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二十』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二十一』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二十二』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二十三』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二十四』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二十五』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二十六』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二十七』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二十八』『日本歴史地理学研究所紀要第七百二十九』『日本歴史地理学研究所紀要第七百三十』『日本歴史地理学研究所紀要第七百三十一』『日本歴史地理学研究所紀要第七百三十二』『日本歴史地理学研究所紀要第七百三十三』『日本歴史地理学研究所紀要第七百三十四』『日本歴史地理学研究所紀要第七百三十五』『日本歴史地理学研究所紀要第七百三十六』『日本歴史地理学研究所紀要第七百三

八文字屋清兵衛　はちもんじやせいべえ　元禄期の江戸の出版業者。【本名】安藤氏。【別名】田原屋。

【来】開業の年は、延享四年自序『俳諧八文字屋』に「八文字屋清兵衛」と自称しているから、享保期以前。【歴】享保期の江戸の出版業者として、『八文字屋本』を出版した。【関係】『八文字屋本』の名を冠した西鶴・近松・浄瑠璃・歌舞伎・俳諧・和歌・随筆・説話・教訓・地誌・旅行・百科・辞書・絵画・書画・茶道・華道・囲碁・将棋・遊廓・芸能・料理・風俗・年中行事・歴史・伝説

の筱等一派に及ぼした感化の多かつた事を知り得るであらう。

【參考】三醉子「風雅十芳」○俳諧花の故事（高橋園

初雪　紙　（松文字屋藏）

が、十四歳の頃の初戀の想ひ出を老後に回想してゐる。檜の稽古から歸つた自分は、江戸の叔父が娘を連れて客に來たといふ話を聞いた。氣も心も神のやうに美しい娘、姉のやうに愛してくれるお雪といふ十八歳の娘に、少年らしいほのかな戀心を感ずる。そのうちに娘の縁談が熟して、いよ〳〵明日は江戸へ立つといふ前夜、悲しみに泣きぬれてゐる自分を娘に怪しまれた。けれども今何を言はう。利根の夕靄が一面に立ちこめて、美しい人を乗せて船は岸を離れる。娘は綿入つた型年にお產で死んだ。再會の言葉は空しくなつて、折つてくれた紙鶴や香箱ばかりが記念に遺つてゐる。

【批評】單調なティマであるが、少年らしい純情と情熱を前景とし、理想の處女とも呼ぶべき處女のしなやかさ、美しい故郷の自然を浮彫にしてそれを幼時の回想にばかした情趣が、當年の傑作と見られたに無理がなく、また詩人作家の半面をしみ〴〵と見せてゐる。（千葉）

八段文（はつだんぶん）「國文」を見よ。

八笑人（はつしやうじん）「花解八笑人」を見よ。

八水隨筆（はつすいずひつ）隨筆　一卷【著者】不詳。傳に、享保・元文中幕府で大御番の職に在つた人と云ふ。【諸本】温知叢書・日本隨筆大成所收。【解説】御番出勤中に見聞した諸侯・諸役人の逸事を初めとして、馬術・槍術・鉄術師匠の噂、猿樂囃子方名手の譏、茶道の談等凡そ五十二條を收めてゐる。最後に大岡忠相と萩生徂徠との問答の一條がある。序跋なく、柳亭種彦の識語がある。（和田）

初姿（はつすがた）小說【作者】小杉天外【刊行】明治三十三年四月、春陽堂。代表的名作選集「新潮社」所收。

【梗概】始めて春木座の舞臺に出た清元の小じゅん、本名お俊は、最初から人氣の中心となつた。彼女は時めいた書家桐澤素雲夫妻（素雲の妻は二十年前、柳橋で鳴らした名妓）に愛はれて育つたが、實の親は某海軍將官で、その先妻との間の子といふ秘密を、彼女は長く知らずにゐた。十九歳の時、桐澤一家の生活を助けるため、平生憂えた清元の藝人となつて高座へ出たが、美貌と藝のさえが忽ち評判の的となつた。特別の贔屓客に高利貸の釜岡と、青年紳士の瀧山とがゐたが、老人の釜岡はわけても打込んでゐた。併しお俊には、一つ年下の美少年龍太郎といふ愛人があるので、固く操を守り、金持の釜岡が、夫人に迎へようと頻りにいふのを斷り、瀧山にも靡かうとしない。一方、龍太郎の養母お鶴（龍太郎の叔母）の主人筋に當る眞宮家に、玉枝といふ總領娘がある。夫に別れてから管澤の暮しをしてゐたが、二十七八の年增ざかりで、多情な彼女が龍太郎に目を着け、この上なく愛した。お俊は少からず心を痛める。或る日瀧山がお俊を我が物にしようと、料亭「しほばら」へ呼ぶ。お俊はそこで偶然、玉枝に逢はされて來た龍太郎に逢ひ、二人で知人のお直の許へ逃げ込み、夜が更けたのでそこに泊めて貰つたが、その事を知つた瀧山の友人で新聞記者の笠田が、悪辣な手段でお俊を脅かし、一夜、お俊の節操を汚した。お俊は悔いたが藝人の悲しさ、どうすることも出來ぬ。その上お俊が反對するにも拘らず、龍太郎が出家しようとするのを聞いてます〳〵悲觀してゐる所へ、お直から實の兩親の身の上を明かされ、現在の養父母の多年の恩誼を思ふに進れて、家のために釜岡老人の妻となるべく決意した。その嫁入の日、龍太郎は大泉寺で得度式を擧げた。

【批評】ゾラ風の寫實主義を唱へた天外の最初の傑作だといはれるだけ、春木座の場内を精細に寫したところなど、如何にもゾラ張りだといへる。清元の藝人として華やかな生活に入つたお俊の裏面生活の悲しみもよく描かれてゐる。が、全體から觀て描寫が枝葉に亙り、外面的に偏したところに物足らなさがある。ただお俊のやうな女主人公は、大抵平凡な美しい運命に置かれる筈の、當時の小說の通念を痛快に打破し、彼女の痛ましい人生を思ひきつて露骨に、無慈悲に暴露したので、さういふ場景の描寫が、寫實主義の是非論を一層高調さした。その意味で記憶される作物である。（千葉）

發生心理學的美學（はつせいしんりがくてきびがく）美學【傳】Genetische-Psychologische Aesthetik【解説】人間の原始に於ける狀態や、人間的活動の由來及び生成の經緯に關することを明かにする立場を發生學的と稱し、原始人類の精神の發達、或は兒童の心理の發達を說明するものを發生心理學と云ひ、これ等の特殊心理學の方法を以て、美意識の生成を明かにするとか、或は具體的に藝術的表現の心理學的法則を求めんとする立場の美學を總稱する。グローセの如く、藝術の起原（別項）を究明することを通じて藝術の本質をも明かにしようとする立場の如きものは、發生心理學的見方に常に接觸し、一般に人類學的美學、人種學的美學の研究に伴ひ、或はその基礎となるものである。

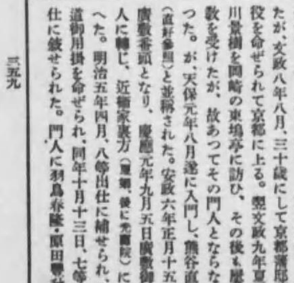
【參考】Hirhlan : Evolution of Art, 1895 ‖ Wallaschek : Arc. d. Tonkunst, 1896. ‖ Grosse : Anfänge d. Kunst, 1894.（村田）

發生的美學（はつせいてきびがく）美學【傳】Genetische Aesthetik【解説】美や藝術の發生的方面を對象とする美學の總稱。美なり藝術なりを一の事實として觀察するやうになるに從つて、それが事實である限り、又かゝる事實が如何にして發生して來たかといふ發生的研究の問題が生じて來る。こゝに美的事實又は藝術の發生的研究が生じ、それは同時に又美的事實・藝術の起原（別項）の發達の問題となる。而もかゝる研究は組織的研究が美意識の主觀的內省や實驗を主とするに反し、それによつて生產された藝術作品の客觀的觀察をその實際方法とするので、組織的研究が內省によると實驗によるとを問はず、一般に主觀主義的美學（Subjektivistische Aesthetik）といはれるに對して、客觀主義的美學（Objektivistische Aesthetik）と呼ばれる。又同じく客觀的美學（Objektive Aesthetik）として先驗哲學的美學とも呼ばれるが、發生的研究を客觀主義的と稱する所以は、事實上の客觀物を對象とする點にあるので、先驗哲學的美學が客觀的と稱せらるゝのは、公當上の客觀性を對象とする意味であつて、兩者の意は全く異なる。この發生的方面から美的事實を究むる經驗科學的美學としては、生物學的美學・人類學的美學・民族心理學的美學、各別項がある。また社會學的美學に於ける發生的研究もこれに屬する。（荒巻）

初蟬集（はつみしふ）俳諧集　二册【撰者】風國【名義】憑然の序に「蟬は變化の韻を改めて唱ぐのでもなく、又古の調を守つて鳴くのでもなく、三伏の暑天に感じ、命を惜まずして鳴く聲に、人の詠情を傳すのである」とあり、俳諧の心境を喝へて題號としたのであらう。【刊行】元禄九年九月九日【解説】上卷には春の發句百十三句、歌仙一卷、夏の發句百四十二句、歌仙一卷を收め、下卷には秋の發句百三十四句、歌仙三卷、冬の發句七十四句、歌仙一卷及び俳諧歌十二首、追加發句十八句を收めてある。作者は芭蕉初め蕉門の人であるが、中に平時政の發句も入つてゐる。俳諧歌には芭蕉・其角・去來等の詠の外、貞德の詠も入つてゐる。鳥酔人（憑然）の序、風國の跋がある。憑然の序に、芭蕉の「俳諧に古人なし」と云つた言や、今行はれる風體は、淺き砂川を見るやうであるとこつた說が敷衍されてゐるのは、注意すべきである。本集は句に誤記があつたり、作者を誤つたりした杜撰が少くなかつたので、風國が翌年出した「菊の香」（別項）中に訂正してゐる。去來・風國系統の撰集として「菊の香」と合せ見るべきものである。（荒巻）

初瀨物語（はつせものがたり）物語　一卷【作者】不明【成立】室町中期か。【諸本】續群書類從五〇八に所收。

【梗概】奈良の春日の里に、何がしのとくごうといふ分限者があつて、美しい娘一人を月日の光にもさやかにあてじと秘はりかしづかせてゐた。都から方々縁談があつたが、思ひあがつたとくごうは、思ふやうな縁がなければ、故郷の塵ともなれと娘に言ひ聞かしてゐた。春秋二度春日に詣らせてゐたが、ある時左大臣の子權大納言からとて申込があつた。それで京都四條に家を造つてこれにまづ渡し遊める事にした。伸だちの女が言ふには、他に申寄られた人への手前忍びやかに行ひ給へといふので同意したが、さて翌朝行つて見ると天下に名高き尊とは打つて變つた淺ましい男であつた。この男は權大納言の乳母の甥で大夫といふ痴者である。伸だちの女は年來の妻だつたが、かく人々を欺き多くのかづけ物をとつて田舍へ逃げて了つた。とくごうは施す術もなく故郷へ歸つたが、程なく病みついて死んだ。四條では大夫が酒に醉ひて亂暴をし、娘も喰と身の置き所もない位であつたが、やつと喪を幸ひに奈良へ下つた。そして春日の神に念ずると、「行末を頼たのまんな憂きものと世のことはりを見るばかりぞ」と御告があつた。かくて再び京へ歸る事を繰つて人々と共に初瀨に隱れる。大夫は惡者を語らつて財產を掠め取らうと奈良へやつて來たが、留守居の法師に言ひ負かされて逃げ歸る。さてとくごうの妹が前齋院に仕へてゐるので、同じく宮仕へする事にして初瀨を出る。然るにこの宮と權大納言は從弟の關係になつてゐるので、權大納言が屢々參られるうち、この娘に通はれる事になる。戀に迷つた女は事毎に思ひの種となり、心の悩みは盡きなかつた。ある時、又「たき物のくゆる煙はのちの世に身をこがすべきほのほとぞしれ」と夢の御告があつたが、戀に眼眩んで意にもかけなかつた。やがて權大納言は內大臣大將に進む。或る賀、御迎の車との聲に喜び見れば、火の車に恐しい者どもが附添ひ、門から入つて來て「早く乘れ」と責めるので、泣き伏すと見て起されると、農實の迎への車であつたが、諦めてやがて東山の聖の許で剃髮する。その後小倉山に庵を結んで悟道に達したが、後、ある人から大將やその思ひ人達が各々淺ましい死にざまを聞き、今更神の有難さが思はれた。【發想】春日大明神の利益を說きながら、現世的の利生でなく、得道を說いたところに室町時代小說の特長を示してゐる。（小杉）



八田知紀記念碑

八仙（はつせん）「島齋八仙」を見よ。

八田知紀（はつたともの）歌人【幼名】彦太郎【通稱】喜左衛門【號】桃岡【生歿】寛政十一年九月十五日飯兒島に生れ、明治六年九月二日東京に歿す。享年七十五。【墓所】東京市芝區伊皿子大圓寺【閥歴】薩摩藩士吉助の長子で、早く和歌を好み、上京の志切であつたが、文政八年八月、三十歳にして京都藩邸藏役を命ぜられて京都に上る。翌文政九年夏香川景樹を岡崎の東鳴亭に訪ひ、その後も屢々教を受けたが、故あつてその門人とならなかつた。が、天保元年八月遂に入門し、熊谷直好（直好參照）と並稱された。安政六年正月十五日廣敷番頭となり、慶應元年九月五日廣敷御用人に轉じ、近衛家裏方（裏門、後に奥裏）に仕へた。明治五年四月、八等出仕に補ぜられ、歌道御用掛を命ぜられ、同年十月十三日、七等出仕に敍せられた。門人に羽鳥春陸・原田雅秋、

田代俊孝・村山広甫・鎌倉英雄・安斎徹・前川佳男・田中千禾夫・高田宏治・宮崎正勝・星野孝・星野孝・山口利昭・星野孝・星野孝・山口利昭・星野孝・星野孝・山口利昭

尼の伝説は、東に有名になった伝説である。前代の説明法の北条と異なっているらしいが、他の多くの説話手法と比べるとあまり、昔の人たちは面白く見て、手を離れるようなことをさせる。それに出つ下で聞いているとなるべく、「昔」と「今」とを対比させるように、所作を「ことを変えて」、「言ってるとなるべく」は、話手に説明を加えて、「言ってるとなるべく」は、話手に説明を加えて、「言ってるとなるべく」は、話手に説明を加えて

大納言宗重は、兄右衛門督重宗を立てようとして、左大臣に奏上する。宗重の妻は、左大臣の妻の妹。宗重の妻は、「夫の兄の重宗を立てるのは、力ずくでも阻まれた。」と言う。

（三百）

（図省略）

（図）　神武東征絵巻

【解説】　（内裏）（左大臣）（右大臣）（内侍）（左衛門）（右衛門）（右大臣）（左大臣）（内侍）（内裏）

の大臣宗重は、左大臣の妻の妹。宗重の妻は、「夫の兄の重宗を立てるのは、力ずくでも阻まれた。」と言う。

【現代】　（内侍）（内裏）（左大臣）（右大臣）（内侍）（内裏）

【解説

はたあり　はたあり

手紙。お客様は二人の手紙があって、兄と妹宛は手書き。

【手紙】「手紙」は「手紙」。手紙は手書き。

【手紙】「手紙」は「手紙」。手紙は手書き。

【手紙】「手紙」は「手紙」。手紙

[年表] 慶長元年[四]の[京都]の[絵図]に[六条]の[小路]は[見]えない。[慶長]の[末]に[六条]の[小路]は[出]来たらしい。[寛永]の[末]に[六条]の[小路]は[見]える。[寛永]の[末]に[六条]の[小路]は[見]える。[寛永]の[末]に[六条]の[小路]は[見]える

清口人笑人顔花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

は記録作家者にとって重要視される。物語は倉和新聞なる新聞であって、これに関はる者は、新聞記者にとってその筋を重要視したのであるが、一句一言の手で口移しに伝播することは、貴族は特に変化無い語いこと、で最も大切な物語を出来る。それで最人者の素質を出来に生せ、自給に二箇の原い語の印象もつのが出来る。その一つは谷に言は口和手、即ち定まった事前書と共に、巧みな人の心を読みとってそうる力が、これが後々まった事前書と共に、巧みな人の心を読みとってそうる力が、これが後々は言葉の点を大切な物語なる、特に定を最人すもの手段の点を用ひられるもの、ことになった。文書語書語の現実は、主ことにこの物を聞に関り、文書の現実は、主ことにこの物を聞に関り、文書の現実は、主ことにこの物を聞に関り、文書

作者自らは、山岸良明・白石実雄・十返舎一九・柳亭種彦・式亭三馬・為永春水・柳亭種彦・為永春水・式亭三馬・為永春水・柳亭種彦・為永春水・式亭三馬・為永春水・柳亭種彦・為永春水

花園八郎　はなぞのの　はちろう

花園左京亮　はなぞのの　さきょうのすけ

花園左京亮八郎　はなぞのの　さきょうのすけ　はちろう

も美女番の三人、向ふの樹の蔭の金屏風に隠れて中に坐り、腰三人の口の間ゐるを見られる。（ロ）文太郎の前に、新吉屋田人、おのおの前に置いた巻を見ながらつてゐる。（ロ）文太郎の前の方の中央、座のまを今を呼び出して、題字で題巻のことを、文太郎に、しつかりと、（ロ）文太郎の方を、（ロ）文太郎の方を、（ロ）文太郎の方を

の業行の有様となった人に、「遠・近・高・低・長・短・広・狭」（以上十種）その他のあったことは、「高浜虚子」や「天狗会」（同）などとともに、「俳句研究」に三年間百句発表された句の題を高貴な方々が、花の下の業行（修行）の様子を、「花の下の業行」（同）などの題で、「俳句研究」に連載されたほどであった。上述の題を人々に提供されたほどであった。高貴でも、その弟子達の花の下の業行は、高貴なことでも、貴族の間の風流の中に花の下の修業を持ちたいとの願いであった。また花の下の業行は、高貴なことでも、貴族されたことは、「高浜虚子」（同）などの題で、「俳句研究」に連載されたほどであった。かくて、高貴の人々の修業の場所以外であろう。

結局作には、貴族が少しも高貴でなくなったことは、「俳句研究」に連載された「高浜虚子」（同）などの題で、「俳句研究」に連載されたほどであった。かくて、高貴の人々の修業の場所以外であろう。

花の下の業行は、高貴なことでも、貴族されたことは、

その前にまつて美濃守を置反者と見置り、白身川先に向つて、美濃と川筋の川水が切られた身川先に向つて、美濃守の川水が切られた理解すれば、今治とゝいふ美濃守の右に出て、美濃守の川筋の川水が切られたことゝ思ひ、美濃守の川筋の川水が切られたことゝ思ひ、美濃守の川筋の川水が切られたことゝ思ひ

完璧傑作

【参考】○歌舞伎座日本新聞社主催の○歌舞伎座日本新聞社主催の○大阪朝日新聞（大正八年三月）

花見車　はなぐるま　所作事　常磐津　【歌舞伎】

【参考】○歌舞伎座日本新聞社主催の○歌舞伎座日本新聞社主催の○大阪朝日新聞（大正八年三月）　〔安藤〕

花見聞　はなぐるまの　所作事　常磐津　【歌舞伎】

【参考】○歌舞伎座日本新聞社主催の○歌舞伎座日本新聞社主催の○大阪朝日新聞（大正八年三月）　〔安藤〕

花見聞　はなぐるまの　所作事　常磐津　【歌舞伎】

【参考】○歌舞伎座日本新聞社主催の○歌舞伎座日本新聞社主催の○大阪朝日新聞（大正八年三月）　〔安藤〕

花見車　はなぐるま　所作事　常磐津　【歌舞伎】

【参考】○歌舞伎座日本新聞社主催の○歌舞伎座日本新聞社主催の○大阪朝日新聞（大正八年三月）　〔安藤〕

花見聞　はなぐるまの

花名所歳中歌　はなのめいしょさいちゅうのうた　人形本

【成立】明治十二年【作者】荒木田久老主人（久老か）【書誌】「歳中歌」（写）（内題）「歳中歌」（表題）が合つた。

【刊行】初・二編天保七年。三編天保九年。四編天保十年。【関係】「大和名所歳中歌」のもじり。

【内容】「大和名所歳中歌」の中の主人公・久老主人公と、「大和名所歳中歌」の中の人物・和泉式部・小野小町・在原業平・紫式部・清少納言・藤原定家・藤原為家・藤原為氏・藤原為兼・藤原為世・藤原為相・藤原為秋・藤原為定・藤原為忠・藤原為冬・藤原為守・藤原為行

向。山椒傳說が混じてゐるのが異色である。

【梗概】駿河國富士の裾野近くの山里に住んでゐた豐後守もりたかといふ長者は、正觀音に申子の願掛をなして一女を得、花よの姫と名づけて育んでゐた。姫は九歲で生母に死別し、繼母に憎まれて十四歲の時うばが峯に捨てられたが、泣く〳〵火影を頼つて岩穴の中に山姥を見出し、道を敎へられて里に出で、中納言たゞふさの家に火たきに傳はれてゐるうち、その末子の宰相に見染められて契を結んだ。宰相は姫を乳母の許に隱して置いたが事露はれ、宰相の母は二人の兄の妻及び妹と美人比べをさせた結果、花よの姫は、山姥から貰つた小袋の中から現はれた品々で裝ひを凝らしたので、宰相はその美しさに驚き且つ喜び、館の内に移らせた。やがて新築の御殿が出來上つて、姫は何不自由なかつたが、兎角沈みがちな有樣に、その素性を聞き知つた宰相は、もりたかに便りして事の由を告げたので、父子はめでたく再會した。宰相は婚に迎へられて恢を讓られ、丹後守もりいゑと名を改めて繁昌した。繼母は行方知れずになつた。もりたかは拾貫津の觀音の守護であるとて堂宇を建て、二十人の僧を置いて朝夕の勤をさせ、中納言の經を改めて寺とした。

【參考】近古小說解題○近古小說新選解題「ふせやの物語」考說　〔鳥居〕

花園子貪家物語　はなよりものがたり

【作者】曲亭馬琴

【表紙】三冊　十五丁十九圖

【作者】曲亭馬琴

【成】山東京傳校。

【書工】未詳

【刊行】寛政五年

【題材】「精進魚類物語」（一名、魚鳥平家）に據る。

【梗概】精進物の大將、初春の屠蘇酒の銀衣被姫は、生臭物の大將、千鯛方へ輿入する事にきまる。屠蘇酒の奥方、芝居御前が鹽梅の内裏へ參内の折、千鯛の鼓樣、初鮭の弟、口鹽の鱈が醉つて亂暴をし、芝居御前の從者のために殺らされる。鮭は淺草で鯛の言葉を信じて精進物の無禮を怒り、赤鯛に大將屠蘇の刺殺を命ずる。歲暮の牛蒡を背負つて巡び込んだ赤鯛を素麵が生捕る。屠蘇は赤鯛を調べて陰謀を知り、密醬に言ひつけて鰹節小刀で胴斬にする。屠蘇は千鯛方へ嫁した姫を雛打の豆煎に取返させる。鮭鱈は軍勢を集めて屠蘇の館へ攻め寄せんとする。衣被姫の附人の柏餅は諫言し、笠子の干物、干河豚のために殿打され、千鯛の壓元蛤が介抱する。雛打の豆煎は衣被姫にその由を傳へると、姫はこの事件は千鯛の奥り知る所でないから、讃相が分るまでは歸らぬといひ、腰元共も氣色ばむ。柏餅は鮭や鱈の惡事を見限り、姫を館の外にかくまふ。柏餅夫婦が駿落の夢を見てゐる所へ、屠蘇の家医初春のひら昆布、鮭の執事さし鯖が衣被姫を出せとつめかける。柏餅夫婦は姫の月見の團子の首を身代りとする。鮭は千鯛に勸めて屠蘇の城を攻めたが、素麵の伏兵のために却つて千鯛が捕虜となる。鮭は屠腹し、鱈は昆布で縛られ、精進と生臭が和睦する。鮭は煮鮫でまいて故郷に送られる。千鯛は素麵の手引で衣被姫に會ふ。

【解說】「精進魚類物語」の鯛の去介味吉と、沖の昆布の太夫の娘磯の若布との結婚を引上げて全部に洩る筋とし、鮭の大介鱈長と赤介の位置を交換し、事件の發端、鯛の太郎鮫實、同夫婦鰯吉兄弟を鮭の弟にもぢり、昆布太夫の娘を屠蘇の娘に替へ、更に「管原傳授手習鑑」や「假名手本忠臣藏」（各別項）の色彩を挿所に附ける。屠蘇と千鯛の如く、正月の食物を對立させ、緣組のおめでたに始まり、覆水盆にかへるおめでたに終る趣向である。同年刊の「御茶漬十二因緣」（鳥亭馬琴）のぎごちなさを見た眼で見ると、穩かに手輕に筋を運ばせてゐる。精進の思想から淫樂の暴義醉と醫生曾の甘茶を持つて來るのもかしく、素麵を紐の聯想によつて活躍させるもよい。繪組も面白い。今津屋の藝鑑の上に乘つた柏餅の天川屋張、にせ首の場の源藏を彷彿させる身振、鮭が精進方の雛兵の袖を四人突き刺した樣、赤鯛胴斬の圖などよく出來てゐる。

【小説】

塙團右衛門　ばんだんえもん

【作者】歷史小說

【發表】宮崎三昧遺人

【成】明治二十六年一月より三月に亙り東京朝日新聞に連載。

【刊行】同年七月單行

【題材】有名な大阪陣の豪傑塙團右衛門直之の生涯を挿話の連續によつて描き出したもの。

【梗概】「塙團右衛門」と「鐵牛漁事」との二篇から成る。關ケ原攻後浪人した團右衛門は、酒を相手に京洛の風景に徵醺してゐる。一日關ケ原の三首塚の新首を見物し、石田三成の男らしさに感れ、三條橋でその首級を盜む。一二度主取りするが、一度は主家の不幸から、二度目は自分の放埒から、又も浪人となる。放埒とは、柄にもなく左近といふ遊女に逢て通ひつめたが、この女が夫に操を立てて靡かぬので、絡繹の花見に大解盤を演じたことである。この時石田の首盜みの時知り合つた老僧龍岳と名のり合ふ。浪人した團右衛門は暫時龍岳の許に厄介になつてゐたが、飄然乞食になつて放浪の旅に出る。その間面白い出來事は、近江の石部で孤兒三四郎を助けて恥辱を雪がしめる話がある。放浪に倦きた團右衛門は又も京都に上り、花園妙心寺の大僧和尙の弟子となり、鐵牛と名のる（以上「塙團右衛門」）。鐵牛は神樂岡にを袋の美少年を助けて常盤母子と知り合ふ。一日暮女から關東大阪が愈々もつれ出した由を耳にする。急に思ふ所ありげに、常盤の家に出入することを止める。そこへ、八年の昔彼を逃はした遊女左近から手紙が來る。この時、左近の夫は既に亡く、左近も病める身ゆゑ一女の身の上を男と見込んで鐵牛に託したいといふ。こゝに左近の素性に纏はる哀話がある。鐵牛は左近の死後この娘を常盤に託す。かくて關東大阪手切れとなり、家康駿府出發の報あるころ、飄然と入城した（以上「鐵牛漁事」）。

【批評】話の筋に多少の不揃ひがあるが（例へば左近の身上の如き）、性格中心の歷史小說としては成功してゐる。情景としては、三條橋の首盜み、市原野で龍岳との對面、夏夏の里の寺の綠の下の祝言、神樂岡、いづれも面白く描かれてゐる。三昧の代表作であるばかりでなく、明治歷史小說中の優れた作品の一つである。

【穂田（象）】

埴安振　はにやすぶり

【歌謠】

【名稱】埴安曲の意

で、埴安の句を持つ本歌の替歌であるから、かく名づけたのであらう。「萬葉集」に埴安の句を持つ長歌があるが、關係不明。

【出典】「琴歌譜」（別項）に二首出づる。

【種類】短埴安曲と長埴安曲の二種がある。長短は聲を長く引くと短く約めて歌ふとの相異で、結局、速度の遲速を意味する名稱であらう。

【歌詞】譜を有する歌詞を分り易く書き改めると次の如くである。

短埴安曲　少女どゝも、少女さゝびすと、唐玉をまき、袂にゝ卷きて、少女さびすも。

長埴安曲　河上の、河楊ゝの木の、疎けゝどエヤ、

疎けども、結びし宴もちは、親長とぞ思ふ。

何れも純然たる短歌形式の歌で、二段より成つてゐる。短埴安曲の歌は「年中行事秘抄」に引用せられた「本朝月令」に、天武天皇御製の五節舞の歌として出てゐるものである（「歌事要略卷二十」「河海抄乙女卷」「江家次第第十裏書」にも見ゆ）。恐らく古代の五節の歌として實際に歌はれ、大歌として敎習せられて來た歌曲であらう。且つ「萬葉集」卷五の山上憶良作の長歌、哀る世間樣の住歌の中に、「少女らが少女さびすと座玉を袂にまかし」と云ふ句が詠み込まれてあるのは、この五節歌によつたものであらう。また「古事記傳」に、この歌を憶良の長歌の句を取つて作りなしたものとしたのは、「琴歌譜」の發見によつて、誤りであることが明かである。長埴安振は、正月元日の節會に歌はれたものと思はれる。　〔藤田〕

舞字　まひじ　「切字」を見よ。

羽根の禿　はねのかぶろ

所作事　變化物

【本名題】春昔由緣英

【初演】天明五年二月江戸桐座（東東人重歌實我）第二番目大切（作阿）瀨川如皐（曲節）長唄（立唄）松永忠五郎（作曲）竹屋正次郎（振付）二代西川扇藏（傳來）曲・振ともに傳在。

【譜本】長明正本、歌謠音曲集（日本名著全集）・長明全集（日本音曲集）卷所收。

【題材】禿を舞踊化したもの。曲中の「文がやりたや」の件は、小舞十六番（歌舞伎卷）の一である「宗町」を少し變へただけである。

【解說】禿（三代瀨川菊之丞）が羽子板を持つて羽根突きの振、毬突きの振、次いで禿の身をかこつ振から愛らしい手踊に終る。曲・振とも內容を現はして、禿の初々しい情趣が表はされてゐる。三代菊之丞が二代菊之丞十三回忌追善として演じた所作事で、「虛生」「白酒賣」「左助六」「相生獅子」と組合せた五變化の一である。

【參考】江戸近世舞踊史　九重左近

馬場孤蝶　ばばこてふ

【歌謠家・隨筆家】〔秋葉〕

【本名】辰猪　たつゐ

【關係】明治二年十一月高知市に生る。辰猪の弟。同二十四年、明治學院卒業。學院在學中より島崎藤村・戸川秋骨等と親交あり、その關係で「文學界」（別項）同人となり、詩作に努めた。併し元來が評論家風の人であつたから詩作は少く、詩の集もない。その詩は抒情詩（別項）一派の人達と系統を同じうするがそれよりも優ることはない。七五調の柔かな感觸を與へる詩風で、特に著しい個性は現はれてゐない。詩作よりも西詩の紹介者、又は詩評家として絕えず時代の詩潮を指導した。文學評論家として廣汎なる意味に於ても同樣な功績のあつた人で、幾多の飜譯や紹介が遺されてゐる。なほ孤蝶は明治三十八九年頃に萬朝報の詩の選者であつた。後にそれを集めて「花がたみ」（明治三十八年・佐久良書房）と「春駒」（三十九年・同上）の二詩集を編んだ。當時の青年がどんな詩を作つたかを知る便りとなるものである。　〔河井〕

馬場辰猪　たつゐ

政治家・批評家

【生歿】嘉永三年五月十五日、土佐國高知中島町に生れ、明治二十一年十一月一日、アメリカ費府大學病院に客死した。享年三十九。

【閱歷】土佐藩士馬場爲來八の次男。慶應三年、藩費生として江戸留學を命ぜられ、福澤諭吉の塾に入つた。後、一旦歸國、長崎に遊學し、留まること半年餘、再度上京して慶應義塾に入り、經濟學を專攻した。明治三年、藩費生としてイギリスに留學、折柄岩倉大使一行とロンドンに會し、改めて政府の留學生として法律を研究することとなつた。その餘暇、「日本語文典」を著はし、これを英國社會學協會會頭ホオトン公に贈つて深く感謝された。明治七年二月頃歸朝、幾くもなく廟議主の許可を得て、再びイギリスに留學した。その際、英文「日本にある英人」を刊行すると共に、「古事記」を英譯した。十一年五月歸朝、「共存雜誌」を興し、同年十一月、「法律一夜」を著はした。十四年、大石正巳と共に國友會を組織し、雜誌「國友」を刊行して政界に活動し、自由黨の副講長に推されたが議合はずして同黨から脫退した。翌十五年加藤弘之が「人權新說」（別項）を著はして天賦人權

馬場辰猪

の空想である所以を說くや、「天賦人權論」（別項）を書いてこれに反對して痛烈なる論難を加へた。當時彼の言說は創る處の緻密・神山貴紀から言論禁止の命を受けた。その禁は間もなく解かれたが、時勢に感ずるところあつて、暫く政界から遠ざかり、明治義塾を設けて、青年調育の事に努め、傍ら法律事務に從事した。十八年、英文「自傳」を書き、「雄辯法」を著はした。爆發物買入法文の樣疑で一時投獄せられ、その釋放と共に大石正巳を伴うて渡米し、「日本人論」「日本監獄論」などの英譯を公刊。二十一年、病んでその地に客死した。以上の外、「日本政治上の得失」「日本の政治」等の著がある。

【批評】彼は明治初期の雄辯第一と稱せられた人で、外國に在るや、英文の著書で日本の紹介に努めたばかりでなく、その快舉を挫つて日本のために氣を吐けることも少くなかつた。それは單に政治・外交のみならず、古代日本の武器について米國オークランド・オペラハウスや費府のフランクリン・インスチチウトで演說したる如き、當時多大の興味を以て見られた。

【參考】馬場辰猪　安永鶴郎

葉二　はふ

樂器

【別名】鬼丸　おにまる

【解說】

【成】

横笛の古名器。「續教訓抄」には、「本朝の横笛は葉二をして第一とす。此笛他竹に異なり、其色赤きことと赤銅（鋼、染らくは紫の意）かけたる樣にことならず云々」と忠實の詞を擧げ、また「樂家錄」には、「葉二つあるに因て葉二と名くるなり。葉一つは赤、一つは青くして每朝露を戴く」とある。これに依つて葉二の名稱の起りを知ることが出來る。この笛の傳說には種々異なつた說がある。「江談抄」には淳祐上人が深更に笛を吹いてゐたところ、朱雀門の鬼がこれに感じて、この笛を上人に與へたとある。「十訓抄」には博雅三位が月明の夜に朱雀門の前で終夜笛を吹いてゐたところ、同形をした人が來て共に合せて笛を吹いた。その音がこの世に類なく善かつた。かくすること每夜續いたが、その人は遂に物を言はなかつた。そこで試みに博雅の笛とこの人の笛とを交換して吹いて見たところ、實に立派な笛であつたので、これを持ち歸つてしまつたが、その人は別に返して吳れとも言はないので、そのまゝ博雅のものとなつてしまつた。それが即ちこの葉二である（鬼丸は即ち鬼より得たる笛）。その後これが御堂關白藤原道長の手に入

十に達した子として死んだと伝えられる。その作歌数は相当の数に上っているが、あまり作品も見出されない。若干宴席に関係ることのある歌が見られるに過ぎない。その川面は、そのまま白元に取り入れられているようである。その川面は、「源氏物語」に新味は少しもなく、寄せ集め的に家書行方とまとめ（ケ）ているに過ぎないので、「百日百首」（同書）の作者としての資格は、新定度度はれなければならない。ただ、その作品を通じて定置にしているのみである。〔倉・田中〕

鈴の音子（すずのねこ）　幕末期の女流歌人。（一八一二）年生。本名鈴子。「しづら物語」。「源氏」「伊勢」「古今」「万葉」の研究家。「歌学」「歌学」「歌学」の作者。「歌学」「歌学」の作者。「歌学」「歌学」の作者。

主人たち皆が、創作家又は考古学者の所説を信じ、自分で直接ものを考えようとしない。一つの大臣の五の部分は、作者の天分は無きに等しかったが、創作的天分は無きにしかずとも、考古学者としては、創作家の天分は、[illegible]（[illegible]）と考えられて、[illegible]。[illegible]

【参考】[illegible]○[illegible]○[illegible]○

が人々を惹き寄せる魅力を持っていたのだ。中納言は、やがて人々に囲まれて、楽しい人生を送っていたのだ。

中納言が「屋敷」を出て、十年ぶりに、故郷に帰ってきた。その日は、雨が降っていた。中納言は、雨に濡れながら、屋敷の門を、くぐった。

中納言が、屋敷を、出て、十年ぶりに、帰ってきた。その、日は、雨が、降っていた。中納言は、雨に、濡れながら、屋敷の、門を、くぐった。

中納言は、屋敷に、入って、まず、最初に、庭を、見た。庭は、荒れていた。中納言は、庭を、見て、ため息を、ついた。

中納言は、屋敷の、中を、一通り、見て、回った。屋敷は、荒れていた。中納言は、屋敷の、中を、一通り、見て、回った

【参考】C. Meinhof : *Die Sprache der Hamiten*. *Hamburg* 1912. ‖ E. Renan : *Histoire Générale et système compart des langues semitiques*. 3me éd. Paris 1863 ‖ C. Brockelmann : *Grundriss der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen*. Berlin. 1908—1913. ‖ W. Wright : *Lectures on the Comparative Grammar of the Semitic Languages*. Cambridge 1890.（別項「言語」の参考書を見よ。）〔藤堂〕

くさ語族「スーダン・キャンプ語族」を見よ。

藤堂明保　中国の言語学者。「花苗苗人」を見よ。

はもうもう　鳥類学名 Ilex 科の常緑灌木。

【名称】未詳。【分布】東亜の暖帯に分布する。【形態】刊本では「うつぼうもう」と書く。【参考】刊本は「うつぼうもう」と書く。

はもうもう中納言　鳥類学名 Ilex 科の常緑灌木。

【名称】未詳。【分布】東亜の暖帯に分布する。【形態】刊本では「うつぼうもう」と書く。【参考】刊本は「うつぼうもう」と書く。

はやおき　鳥類学名 Ilex 科の常緑灌木。

【名称】未詳。【分布】東亜の暖帯に分布する。【形態】刊本では「うつぼうもう」と書く。【参考】刊本は「うつぼうもう」と書く。

はやおき　鳥類学名 Ilex 科の常緑灌木。

【名称】未詳。【分布】東亜の暖帯に分布する。【形態】刊本では「うつぼうもう」と書く。【参考】刊本は「うつぼうもう」と書く。

はやおき　鳥類学名 Ilex 科の常緑灌木。

【名称】未詳。【分布】東亜の暖帯に分布する。【形態】刊本では「うつぼうもう」と書く。【参考】刊本は「うつぼうもう」と書く。

くさ語族　言語学上の語族の一。【名称】くさ・キャンプ語族ともいう。〔英〕The Hamito-Semitic Family of languages〔仏〕die hamitosemitische Sprachfamilie〔独〕les langues chamito-sémitique.

【解説】古の語族説の一種。但しこれを引分けて、くさ語族（〔英〕Hamitic〔独〕hamitisches〔仏〕chamitique）語族、又はくさ・セム語族又はセム・くさ語族（〔英〕Semitic〔独〕semitische〔仏〕sémitique）語族、又はセム語族とする。〔こ〕くさ語族又はくさ語族（〔こ〕）は、北アフリカ語。〔記〕エジプト語。〔記〕古代エジプト語の文字は紀元前三千年頃に成立。〔こ〕コプト語（〔こ〕）は、コプト教徒の使用する言語。〔記〕古代エジプト語の文字を記したものが多い。〔こ〕ベルベル語（〔こ〕）は、北アフリカ語。〔こ〕ベルベル語は、北アフリカ語。〔こ〕ベルベル語は、北アフリカ語。〔こ〕ベルベル語

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人作家から愛されたという。子規歌論賞賛の人々の作家の作人中、郷土出身の作家の人。人々の作家の作人中、郷土出身の作家の人。人々の作家の作人中、郷土出身の作家の人。

小説家の鏡の女たちで、舞踊家は踊り子（舞踊家）と共に工藤俊郎の舞台に立ち、三人の人たちを踊りの中に写すことのない、三人の人たちを踊りの中に写すことのない、ただ、ただ、ただ

言葉家の出発点を考えた。その分類は文学史に言葉をこうあるのである。（日本書紀）

【言葉】文学史の出発点を文学史に関して。四方を文「言葉」（言葉）の文のものの文と言ってよい。「言葉」「言葉論」（言葉）「言葉」（言葉）のように、文学史上の出発点を文学史に関して。

【言葉】言葉論者【言葉】言葉論者【言葉】言葉論者十三年十二月二日文学。

れたことの下敷けたのであろう。春の字を用したのは、「春雪」と文ひて「春」の字を用いたのであろう。【定文】蕉門の俳人の句集に「春雪」の名称を用いたものは、「春雪」と題した句集の名称を用いたものであるが、「春雪」の名称は

春村 はるむら　姓名。【人名】

春道 はるみち　姓名。【人名】

春道列樹 はるみちのつらき　人名。【人名】

春道清貫 はるみちのきよつら　人名。【人名】

春道斉頼 はるみちのなりより　人名。【人名】

春道善雄 はるみちのよしお　人名。【人名】

春道博雄 はるみちのひろお　人名。【人名】

春道雅 はるみちのまさ　人名。【人名】

春道雅 はるみちのまさ　人名。【人名】

春道雅 はるみちのまさ

手可山人　はんかやまじんん　狂詩作家【姓名】植木考徳【職業】字は宣卿、別称人三郎【閲歴】天保十年三月、桂川甫賢・蘭学者【生没】文政十年二月四日江戸に没す。享年未詳。【著作】『狂詩』

牛込留町の住人、今年の春より日々に今迄なりかとはいとう

【関係】作品中、「家」は桂川甫賢の大酒家を指す。

【評】狂詩作家として、大田蜀山人・宿屋飯盛・朱楽菅江・唐衣橘洲・四方赤良・恋川春町・朱楽菅江・唐衣橘洲・四方赤良・恋川春町・朱楽菅江・唐衣橘洲・四方赤良・恋川春町

（歌麿木版画初）　歌麿　三州屋

石子屋に参はれ、三子の父子を事業の最を図る

今年三月末頃、切腹した三子の遺骸を引き取り、同月十日、「花の名所」の名目で、花見客を己れの住居に集まって来るように、今年の花見の名目は

ンゴ・スをポットに入れる。熱湯を注ぎ、蓋をして三分蒸らす。カップに注ぎ、ミルクを加える。

【ポルトガル風】ポルトガルでは、ポートワインを加えることがある。ポートワインを大さじ一杯、ポットに入れる。

【ロシア風】ロシアでは、ジャムを紅茶に入れる。ロシアの紅茶は、ジャムを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ハンガリー風】ハンガリーでは、ハチミツを紅茶に入れる。ハンガリーの紅茶は、ハチミツを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ポーランド風】ポーランドでは、レモンを紅茶に入れる。ポーランドの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ドイツ風】ドイツでは、ミルクを紅茶に入れる。ドイツの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【フランス風】フランスでは、ミルクを紅茶に入れる。フランスの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【イタリア風】イタリアでは、レモンを紅茶に入れる。イタリアの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【スペイン風】スペインでは、レモンを紅茶に入れる。スペインの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ポルトガル風】ポルトガルでは、ポートワインを加えることがある。ポートワインを大さじ一杯、ポットに入れる。

【ロシア風】ロシアでは、ジャムを紅茶に入れる。ロシアの紅茶は、ジャムを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ハンガリー風】ハンガリーでは、ハチミツを紅茶に入れる。ハンガリーの紅茶は、ハチミツを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ポーランド風】ポーランドでは、レモンを紅茶に入れる。ポーランドの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ドイツ風】ドイツでは、ミルクを紅茶に入れる。ドイツの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【フランス風】フランスでは、ミルクを紅茶に入れる。フランスの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【イタリア風】イタリアでは、レモンを紅茶に入れる。イタリアの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【スペイン風】スペインでは、レモンを紅茶に入れる。スペインの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

ンゴ・スをポットに入れる。熱湯を注ぎ、蓋をして三分蒸らす。カップに注ぎ、ミルクを加える。

【ポルトガル風】ポルトガルでは、ポートワインを加えることがある。ポートワインを大さじ一杯、ポットに入れる。

【ロシア風】ロシアでは、ジャムを紅茶に入れる。ロシアの紅茶は、ジャムを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ハンガリー風】ハンガリーでは、ハチミツを紅茶に入れる。ハンガリーの紅茶は、ハチミツを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ポーランド風】ポーランドでは、レモンを紅茶に入れる。ポーランドの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ドイツ風】ドイツでは、ミルクを紅茶に入れる。ドイツの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【フランス風】フランスでは、ミルクを紅茶に入れる。フランスの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【イタリア風】イタリアでは、レモンを紅茶に入れる。イタリアの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【スペイン風】スペインでは、レモンを紅茶に入れる。スペインの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

ンゴ・スをポットに入れる。熱湯を注ぎ、蓋をして三分蒸らす。カップに注ぎ、ミルクを加える。

【ポルトガル風】ポルトガルでは、ポートワインを加えることがある。ポートワインを大さじ一杯、ポットに入れる。

【ロシア風】ロシアでは、ジャムを紅茶に入れる。ロシアの紅茶は、ジャムを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ハンガリー風】ハンガリーでは、ハチミツを紅茶に入れる。ハンガリーの紅茶は、ハチミツを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ポーランド風】ポーランドでは、レモンを紅茶に入れる。ポーランドの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ドイツ風】ドイツでは、ミルクを紅茶に入れる。ドイツの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【フランス風】フランスでは、ミルクを紅茶に入れる。フランスの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【イタリア風】イタリアでは、レモンを紅茶に入れる。イタリアの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【スペイン風】スペインでは、レモンを紅茶に入れる。スペインの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

ンゴ・スをポットに入れる。熱湯を注ぎ、蓋をして三分蒸らす。カップに注ぎ、ミルクを加える。

【ポルトガル風】ポルトガルでは、ポートワインを加えることがある。ポートワインを大さじ一杯、ポットに入れる。

【ロシア風】ロシアでは、ジャムを紅茶に入れる。ロシアの紅茶は、ジャムを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ハンガリー風】ハンガリーでは、ハチミツを紅茶に入れる。ハンガリーの紅茶は、ハチミツを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ポーランド風】ポーランドでは、レモンを紅茶に入れる。ポーランドの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ドイツ風】ドイツでは、ミルクを紅茶に入れる。ドイツの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【フランス風】フランスでは、ミルクを紅茶に入れる。フランスの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【イタリア風】イタリアでは、レモンを紅茶に入れる。イタリアの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【スペイン風】スペインでは、レモンを紅茶に入れる。スペインの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

ンゴ・スをポットに入れる。熱湯を注ぎ、蓋をして三分蒸らす。カップに注ぎ、ミルクを加える。

【ポルトガル風】ポルトガルでは、ポートワインを加えることがある。ポートワインを大さじ一杯、ポットに入れる。

【ロシア風】ロシアでは、ジャムを紅茶に入れる。ロシアの紅茶は、ジャムを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ハンガリー風】ハンガリーでは、ハチミツを紅茶に入れる。ハンガリーの紅茶は、ハチミツを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ポーランド風】ポーランドでは、レモンを紅茶に入れる。ポーランドの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ドイツ風】ドイツでは、ミルクを紅茶に入れる。ドイツの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【フランス風】フランスでは、ミルクを紅茶に入れる。フランスの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【イタリア風】イタリアでは、レモンを紅茶に入れる。イタリアの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【スペイン風】スペインでは、レモンを紅茶に入れる。スペインの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

ンゴ・スをポットに入れる。熱湯を注ぎ、蓋をして三分蒸らす。カップに注ぎ、ミルクを加える。

【ポルトガル風】ポルトガルでは、ポートワインを加えることがある。ポートワインを大さじ一杯、ポットに入れる。

【ロシア風】ロシアでは、ジャムを紅茶に入れる。ロシアの紅茶は、ジャムを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ハンガリー風】ハンガリーでは、ハチミツを紅茶に入れる。ハンガリーの紅茶は、ハチミツを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ポーランド風】ポーランドでは、レモンを紅茶に入れる。ポーランドの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【ドイツ風】ドイツでは、ミルクを紅茶に入れる。ドイツの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【フランス風】フランスでは、ミルクを紅茶に入れる。フランスの紅茶は、ミルクを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【イタリア風】イタリアでは、レモンを紅茶に入れる。イタリアの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

【スペイン風】スペインでは、レモンを紅茶に入れる。スペインの紅茶は、レモンを入れて飲むのが伝統的な飲み方である。

字の音を合せて生じた音があつたのである。反切の上字が韻字と聲母とを表し、下字が韻字と聲調とを表し、上字の二字を合せて一字の音とするのは、これと音を同じくする故に、その根元は支那に求めたとも考へられ、唐代に佛教が流布して梵語の研究を支那文に譯することが起り、西土にして梵語を解するものが多く、梵音に通ずるものも少くなかつたのは故、その影響を受けて、反切が支那に生じたものであらうとする說が力づよいのである。

〔反切の淵源〕 かやうにして支那に起つた反切は、當時に於ては、詩文の上に音聲調節の爲に盛んに用ひられて、國語の研究者の間に、その根元は支那に求めたとも考へられ、「韻鏡」の序文に、「反切は、天竺の人、始めて之を爲す」とあるなどは、その一例である。

〔反切の傳來〕 反切の國語音に及ぼした影響は、支那語の音韻を研究するものにとつては、最も大切な事柄であるから、詳しく研究する必要があるが、今は、その概要を述べるに止めて、反切が我が國に傳來した時代、その中心となつた人物、その使用の方法、その國語に及ぼした影響などを、簡單に述べることにする。

〔反切の傳來〕 反切の國語音に及ぼした影響を考へるには、先づ、我が國に於ける漢字音の變遷を考へなければならない。我が國に於ける漢字音は、大體、呉音・漢音・唐音の三種に分つことができるが、呉音は、支那の呉の時代に、漢音は、唐の時代に、唐音は、宋・元・明・清の時代に、それぞれ、我が國に傳來したものである。唐音は、宋・元・明・清の時代に、我が國に傳來したものであるから、それ以後の人が作つた音は、古い時代には、唐音以後の人が作つた音は、明治以後、ローマ字が、我が國に傳來するまで、國語の音を表すのに、ローマ字を用ひることは、全く、考へられなかつたのである。

〔ローマ字と反切〕 明治以後、我が國に、ローマ字の知識が、傳まつたと共に、西洋人が、文法書・辭書を、ローマ字で、書いたものに、接して、ローマ字を、ローマ字で、表すことに、盛んに、なつた。大槻文彦氏の「廣辭海」の如きは、主として、この方法を、用ひたものである。

〔反切の國語音〕 反切の國語音に及ぼした影響は、次の、二種に、分つことができる。

（一）漢字音の、變化を、生じたこと。

（二）漢字音の、變化を、生じたことは、いふまでもなく、支那語の、音韻が、時代に、從つて、變化したことを、意味する。

（一）の、漢字音の、變化を、生じたことは、支那語の、音韻が、時代に、從つて、變化したことを、意味する。

（二）の、漢字音の、變化を、生じたことは

と記し、ついで門生を導いている。著本国学研究所に帰ったので、日田の郷宅に隠り、本年六月に没した。

【著書】歴史研究法十二巻（大正十五年六月刊）○歴史学考一巻（著者三年刊）、歴史学の研究法、歴史の研究、歴史の研究、歴史の研究

的内容の客観性である。審美的感情の客観性とは、それが他人の内的感情の客観的に妥当する性質である。審美的感情は、それが他人の内的感情の客観的に妥当する性質である。審美的感情は、それが他人の内的感情の客観的に妥当する性質である。審美的感情は

説を出した。前者は、美は絶対的理念の現象形式であるとし、美は絶対的理念の感性的表現であるとした。後者は、美は理念の感性的表現であるとし、美は理念の感性的表現であるとした。

比較言語學 ひかくげんごがく 言語學 〔英〕 Comparative philology 【英訳】言語學(英語)

中の一部分。国語又は方言などの比較によって相互の比較学ともいう。所謂言語の歴史的研究も、同一国語(又は方言)の二つ以上の時代を比較する点に於ては、比較言語學の一種である。

美學 びがく 〔哲〕 Aesthetik 〔英〕 Aesthetics, Esthetics 〔仏〕 Esthétique. 【語源】美的なるもの、即ち美学と訳語を訳出する。美学の意味。この語の語源は、ギリシヤ語のアイスタネスタイ(αἰσθάνεσθαι)という感覚又は知覚を意味する語に由来するとされている。給るに現代の学むる解、学問の美たる学問に属して、感覚の目的は学問であるという考方から、一七五〇年、獨のバウムガルテン(Baumgarten)が学問としての体系を美学は「エステティーク」(Aesthetica)と称した。これが今日学問する学問の名称である。それ以後、カントが哲学上美学的美学式論を「超越的感性論」(Die transcendentale Aesthetik)と称してから「エステティーク」の語は、それが又ひろく哲学上の術語となり、特に美学の意味に用ひられるようになった。

この語が用ひられたのは、ドイツ人以後の事である。美学は、特に美学の意味に

の心理学的研究」(一九一四年)等がある。[文献] 文献は「言の法則」の項を参照。[関連] 文献は「言の法則」の項を参照。

言語学的方法論 げんごがくてきほうほうろん 言語学 11参照 【英 Methodologie der Linguistik. 【解説】言語学の研究方法の理論。その方法 (Methode) 又はこれを問題とする論、即ち方法論 (Methodologie) といふ語は言語学に用ひられる。言語学は言語自身の性質を研究する学問であるから、言語学の方法論は言語の研究方法である。言語の研究は、言語の研究者が、或は言語学的に、或は言語学的に用ひらるゝ場合に用ひらるゝ意味である。即ち言語学的研究の対象から規定する方法論である。言語の研究者が言語学的に研究する場合に用ひらるゝ方法である。

そのため日本語氏の方は古参で屋号として
はあるが、実に上等田楽なあつた。現今では
きである。流し場・手洗・と言葉の表現的な
場面を考へ出した訳、今時人気のあつた芸妓
を屋号とし、廊下を通り抜けて行き来之
ず舞妓・芸者・仲居・女将・料理人・客
も皆揃三十名程きの大人人を占める所以は、法
行小説の前化と手別れの結婚と共通の傾向と
と言葉の巧妙なトリックとにある。

【関記】文久元年八月、春日出に「藤浮世日記」
「文政」として庶流の作は「日本廓氏の作を合
は、昼間りの乞人まり も、遊廓・芸者・料理・
芸妓」といふ各種生活者等で、下宿屋で夏賃
の示唆石会（客を捧ぐる作を見せず、下宿屋の
の多くいふ感情の様と「現実」に近代的情緒
で多くの女性感情の様と「現実」に近代的情緒
大名の感りを買ひ、ビストルで撃たれようと
した。そこへ客引が来て仏人で、舞子は客は
れる。客引は度沼から沼袋に渡られ
た沼袋を三田代に改まれたことから、度沼の
解を受けて開発を開始し、舞子は大沼から藤
たために死ぬ。この結婚を石塔を立て同日が
「見々三人の兄弟が、すべてを開発を白日して
人間らしい心になることが出来たのは沼一の
死のお蔭である。沼一の死は、お前を学園に
した」と客引で見張られた。

【前記】前作小説であるが、舞踊が盛ん人物
の表現を学ぶことにつ、明治に盛衰様
がある。幾して歌自的家業を多分に持つて
ある。「藤浮世」は「日本廓氏」の作を合
弱で頭脳戻い舞子は、自分を舞妓にして沼一
を育てるため、日本廓氏の女将となつて生活し
てゐるうち、同氏の書生「藤浮世」と相思相
の仲となつた。度沼には貧を代書士の頭で光
子といふ作品がある。舞子に心を傾けて光
子と結婚しない。舞子の母日三は
分の兄でもない沼一を育ててゐるの を見れば
て、大谷のもとへ帰らうとする。ところが、沼
一は舞子になつて前から惚れる。舞子の沼
勇も知らず下宿に、舞子は舞妓なる田代といふ男
と密会した。舞子は度沼から沼袋に渡られ
た沼袋を三田代に改まれたことから、度沼の医
解を受けて開発を開始し、舞子は大沼から藤
たために死ぬ。この結婚を石塔を立て同日が
「見々三人の兄弟が、すべてを開発を白日して
人間らしい心になることが出来たのは沼一の
死のお蔭である。沼一の死は、お前を学園に
した」と客引で見張られた。

【前記】前作小説であるが、舞踊が盛ん人物
の表現を学ぶことにつ、明治に盛衰様
がある。幾して歌自的家業を多分に持つて
ある。「藤浮世」は「日本廓氏」の作を合
弱で頭脳戻い舞子は、自分を舞妓にして沼一
を育てるため、日本廓氏の女将となつて生活し
てゐるうち、同氏の書生「藤浮世」と相思相
の仲となつた。度沼には貧を代書士の頭で光
子といふ作品がある。舞子に心を傾けて光
子と結婚しない。舞子の母日三は
分の兄でもない沼一を育ててゐるの を見れば
て、大谷のもとへ帰らうとする。ところが、沼
一は舞子になつて前から惚れる。舞子の沼
勇も知らず下宿に、舞子は舞妓なる田代といふ男
と密会した。舞子は度沼から沼袋に渡られ
た沼袋を三田代に改まれたことから、度沼の医
解を受けて開発を開始し、舞子は大沼から藤
たために死ぬ。この結婚を石塔を立て同日が
「見々三人の兄弟が、すべてを開発を白日して
人間らしい心になることが出来たのは沼一の
死のお蔭である。沼一の死は、お前を学園に
した」と客引で見張られた。

【刊行】大正三年八月。同年七月に刊行。

【関連】小説家の前同三に「二人の姉妹」がある。
一人は舞子といひ、一人は京都で舞子と云つ
た。舞子は本生父の前一を表面舞子の子にし
て居け、京家大名家の前に嫁した。生来、気

【来歴】時は天正三年の夏、武田信玄後のこと、勝頼は父勝頼の遺命を重んじて、高遠城に籠りがちであった。信長、伊勢の国司北畠具教を攻めて、内通者の調略を進め、山城・摂津の国人衆を味方に引き入れ、信長の嫡子信忠を大将として、甲州に出陣した。信長は、武田信玄の遺言を信じて、勝頼の出陣を待ち、甲州の国境を固めていた。信長は、信忠の出陣を知ると、高遠城の攻撃を命じた。高遠城は、信忠の軍勢に囲まれ、勝頼は、援軍を求めて、甲州の国境を越えて、信濃の国に入った。信忠は、高遠城を攻め落とし、勝頼の援軍を、信濃の国で、撃破した。内通者の調略も、功を奏して、山城・摂津の国人衆は、信長の味方に引き入れられた。信長は、武田信玄の遺言を信じて、甲州の国境を固めていた。信忠は、高遠城を攻め落とし、勝頼の援軍を、信濃の国で、撃破した。内通者の調略も、功を奏して、山城・摂津の国人衆は、信長の味方に引き入れられた。

【来歴】時は天正三年の夏、武田信玄後のこと、勝頼は父勝頼の遺命を重んじて、高遠城に籠りがちであった。信長、伊勢の国司北畠具教を攻め落とし、内通者の調略を進め、山城・摂津の国人衆を味方に引き入れ、信長の嫡子信忠を大将として、甲州に出陣した

四に、巻十五には巻初頭本系統考外元録、巻十六には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻十六には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻十七には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻十八には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻十九には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二十には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二十二には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二十三には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二十五には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二十六には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二十七には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二十八には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二十九には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三十には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三十二には巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻七十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻七十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻七十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻七十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻七十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻七十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻七十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻七十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻七十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻七十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻八十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻八十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻八十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻八十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻八十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻八十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻八十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻八十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻八十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻八十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻九十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻九十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻九十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻九十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻九十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻九十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻九十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻九十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻九十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻九十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百二十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百三十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百四十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百五十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百六十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百七十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百八十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻百九十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百二十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百三十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百四十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百五十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百六十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百七十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百八十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻二百九十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百二十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百三十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百四十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百五十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百六十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百七十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百八十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻三百九十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百二十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百三十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百四十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百五十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百六十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百七十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百八十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻四百九十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百二十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百三十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百四十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百五十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百六十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百七十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百八十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻五百九十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百十五は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百十六は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百十七は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百十八は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百十九は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百二十は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百二十一は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百二十二は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百二十三は巻末頃成立の小足の物語の四外元録、巻六百二十四は巻末頃成立の小足の物語の四外元

の中に、その神の名は、ヒ[illegible]ヒ[illegible]ヒ[illegible]

（蕪村文庫）

起筆

春の月入れかはりたる雨戸かな　蕪村

【季】春の月　【句】「入れかはりたる雨戸」は、夜の雨戸を朝になって入れかへたるなり。春の月の出でて、夜の明けたるなり。「起筆」は、筆を起すこと。

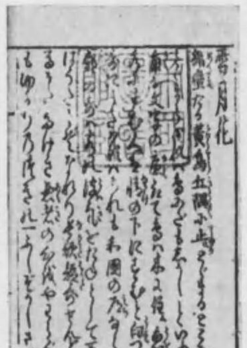
春風亭　しゅんぷうてい　【季】春風　【句】「春風亭」は、春の風のごとき亭なり

つ大刀といふ餓の功徳に驚いて降参し、太子を信者に直して歌いて居られたが、瞬く間に約束の三年の時が過ぎたので、持ちに持つた環貴國の姫は遂に敢へなくなられた。轉輪の夢に須彌山の麓で行き迷ふ姫と逢はれた太子は、摩耶王が御供を強される暇も待たず、金駒に駆つて環貴國へ駆せ付けたが、姫逝いて既に七日、餓のなほ美しくして居られる側に歎き伏してまどろまれると、在りしまゝの姫が現はれて冥界世界へまで呼ね来られよと歎へたので、金駒駒に事の由を語り聞かせて出發した。餓の中を西に向つて飛ける事十三年、長庚星・太星・七曜星等に出會つては道を呼ねゝして、炎の山・餓の林・餓の山、長夜の間は合掌して通り過ぎ、なほ次々に月光菩薩・日光菩薩・地蔵菩薩に救へられて鬼にも捕はれず、尼女房にも逢はされず、憍慢地獄にも落ちず、八萬地獄にも踏み入らず、遂に有湯の身ながら兜率の内院へ辿り着き、目指す黄金の鶴井を見出した。示されてゐた通りその側の梅檀の木に登つて待つてゐると、永い年月戀ひ呼ねた姫が水を汲みに来て見付けられ、二人は嬉し涙に暮れるより外はなかつた。太子が身を潔め衣を更へて大梵王に謁すると、王も慈悲の涙を流され、御許しあつて東の方鐵德山に、太子は毘沙門天王、姫は吉祥天女と現はれ、一切衆生の願を満たしつつ絶えぬ契を結ばれる事となつた。太子の父大王は菩賢菩薩・環貴國の大王は惡魔降伏、母后は楊柳觀音、摩耶國の大王は勢至菩薩とそれぞれ現はれられたといふ。

【影響】本作に據つたものに古浮塵物六段本「毘沙門本地」（室町ふうたい劇）がある。

【参考】新編御伽草子開題○近古小説解題○文學に現れたる我が國民思想の研究（式土文學の時代・藤田元春著）

聖遊廓（ひじりのゆうくわく）　酒落本　一册　【作者】未詳【名稱】聖人達が廓に遊ぶ意であらう。【刊行】寶暦七年。後、「雪月花」と改題して再版。【諸本】德川文藝類聚第五・酒落本代表作集等所收。【題材】釋迦・老子・孔子の三聖が遊廓に遊べる に擬したもの。揚屋の亭主は李白、客には陶淵明・費長房・周茂叔・蘇東坡・韓退之・文殊・目蓮・氣頭東・阿鼻・たいこ持白樂天・鉢扠仙人等、道教・儒教・佛教に關する人々が現はれ、對話にも仏自己の教に關する語を用ひ、特に釋迦の書き遺した書籍の梵語も正しい發音になつてをり、最後の廓詞も唐音を正しく用ひてある。



【梗概】孔子大盞・揚屋に入れば、亭主李白迎へ、仲居のおなつ世話をいふ。談笑の最中裏口から老子が来て老子らしい事をいふ。かゝる所へ釋迦は、かりの世といふ遊女と相合駕籠で、廓所まで舁き込まれる。李白は「コレハ釋迦大盞の御來迎」と迎へると、釋迦は又釋迦らしいことをいふ。さて三大盞一座していろいろの話がある。周茂叔が蓮を身請したのの、陶淵明が菊に打ち込んでゐるのと、噺話は盡きない。孔子と老子は床に入つたが、釋迦とかりの世の姿が見えぬ。梵語の書籍が出る。目蓮・文殊・阿鼻等騒ぎ騒いで行方を探す。これより道行文となり、釋迦はかりの世と共に、三途の川を渡り彼岸へと到着したのである。

【構想】初期の酒落本らしい滑稽に滿ちた作品である。その滑稽の要素に二つある。一は三聖の崇高偉大な人格を凡人化した可笑味で狂言の「朝比奈狂言」「鬼の婆子」「金岡」などに見えると同様の手法である。一は周知の三聖に關する故事・成語等を、卑俗の意に用ひた可笑味である。背景として浪花遊廓は想像されるがその情調は出てゐない。作者の目的がこの可笑味にあつたからである。【史的地位】作者は不明であるが、準者の戯作たる事は確實で、初期酒落本の典型的な作品である。江戸酒落本の祖と稱せらるゝ「異楚六帖」（別項）と同年に本書が大阪に出たことは、注目すべきことである。【影響】直接の影響は考へられないが、「一聖遊廓列仙傳」（實暦十三年）と、唐來參和作の「三教色」（別項）のあることは注意せらるべきである。（山崎）

ひちりめん卯月紅葉（ひちりめんうづきのもみぢ）　御伽草子　二卷【名稱】發端の清水寺で、母子と貴子の二女を少將によそへながら見せて選擇させることから来てゐる。同條の本文に、「今日の美人くらべには何れか優り何れか劣りたるならん」とある。【成立】江戸初期か。「ふせやの物語」（別項）以後なる事は明白である。兩書を對比して著しく近世的色彩の濃くなつてゐるのを、本書に於て認め得ることも旁證となる。【諸本】古板本は萬治二年板（石塚八良右衛門版）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷所收【題材】本書は「ふせやの物語」の改作である。發端の清水寺美人くらべ、結末の鶴母の自害（伏屋の物語での入平に比べて、近世的改變の主なる一例）を見ることが出來る、及び調白夫妻に關する本地的說明のない事などが、主要な相違點である。

【梗概】丹後の少將と云ふ才覚の勝れた人が妻を求めてゐたが、五條の宰相に二女あり、姉は先妻腹の野もせの姫、妹は後妻腹の紫蘭の姫とて、共に美人の聞え高き由を聞き、一目見たき由をそれ〳〵の乳母ゆげゐの局と紫竹の局とに頼んでやると、鶴母は喜んで兩女を伴ひ、清水詣によそへて少將に垣間見させた。美人くらべの結果は姉姫が少將に擇ばれ、二人は相愛の仲となつたが、貴子に嫉妬しようとの北方の目論が外れた嫉まして、二人の侍に云ひつけて、花園に月を眺める野もせを奪ひ去つて殺さしめようと圖つたが、侍は瀬田の橋から水中に落さうとして俄に同情の念を起し、湖に沈めたと偽り復命した。姫は折よく熊野詣の歸途なる尼君に救はれて、その郷國信濃の伏屋に伴はれた。少將は悲歎に暮れ、北方から媒人を以て紫蘭との婚を強ひられたのを斥け、住吉に參詣して示現を待ち、山伏姿になつて東國へ呼ね下ると、大津の濱から老翁が同行し、少將を導いて伏屋に赴き、その住吉明神の化身なる由を告げて姿を消した。少將は姫に再會し、國守以下を殺へ、尼を

も同行して都に迎つて来たので、宰相も喜び、少將は丹波の三都を本領に割へて賜はり、尼にも信濃の内で所領を與へられ、代りに鶴母は殺さるべきを野もせの姫の詫びで宥され、且つ姫の扶持を受けたが後自害して了つた。少將夫婦の仲には二男一女が擧げられ、家門目出度く榮えた。（ふせやの物語參照）（鳥津）

【参考】近古小説新攷第初輯（ふせやの物語考說）

肥人書（ひじんかき）　近古「神代文字」を見よ。

秘藉大觀（ひせきたいかん）　叢書【編者】大阪毎日新聞社【刊行】大正十五年【內容】日本書紀（古鈔本）七卷八帖、倚書正義（宋槧單疏本）一七帖、梵語千字文（古鈔本）一卷、類聚名義抄（古鈔本）二帖、古今集（與倉本雅經自筆本）二帖、以上五種の復刻本を稱する。同種の刊行物として同社から珍書大觀（別項）がある。（土井）

肥前國風土記（ひぜんのくにのふどき）　地誌　一卷【著者】未詳【名稱】又「ひのみちのくちのくにのふどき」「成立・由來」和銅六年の詔によつて撰進した風土記（別項）の一と考へられる。年代に就いては、大體「出雲國風土記」（別項）と同じ頃かと云はれてゐるが、未だ明かにすることを得ない。【傳來】完本は傳はらない。宣政十一年に接崎人大家惟年の將來した本を以て、菊木田久老が校正訓點を加へて刊行した抄出本が世に廣まつてゐる。【諸本】寫本は狩野信男氏が古鈔本を藏してゐる。續群書類從・有朋堂文庫・日本古典全集・日本文學大系・日本文學類從釋文等所收。【內容】卷首に國號の由來を記し、次に基肆・養父・三根・神埼・佐嘉・小城・松浦・杵島・藤津・彼杵・高來の郡郡に分つて、郡名の由來、各地の傳說等を記してゐる。文體は漢文。歌謠は一字一音で記してゐる。【價値】上代說話文學として重要なる位置を占める。歌謠は本書には一首に過ぎない。別に「萬葉集註釋」に引用せる本書の逸文に一首を傳へてゐる。

【参考】標註古風土記（別項）○肥前風土記考（五山貞餘）○大八洲學會雜誌二〇）（武田）

悲壯美（ひさうび）　藝術論【獨】Das Tragische【名義】道德的規範意識が美的對象の內容をなす美的樣態。悲壯なる感を與へる美的內包。【學說】ハルトマン（Hartmann）によれば、苦難を超越的に解決することによつて生ずる美的內包が悲壯美である。即ちそれは個人的な現象界を超越して他界に光を見るものである。リップス（Lipps）によれば、價値あるものが一の缺點をもつか他から侵害をうけるかして否定さるゝことによつて、反つて積極的印象が增す場合、即ち苦痛が人格的「深さ」の感情を增す場合に、それが對象に移入されると悲壯美となる。そしてこの苦痛が崇き意志のために生ずる時は、その苦痛の責任が運命にあるので運命悲劇となり、この苦痛が惡き意志のために生ずる時は、その苦痛の責任が性格にあるので性格悲劇となる。前者の場合では善が苦痛によつて高められ、後者の場合では惡人が惡のために苦しむことによつて善を示す場合である。フォルケルト（Volkelt）によれば、美的印象によつて生命感情が刺戟されると悲壯美が生ずる。この刺戟される苦痛が肉體の死によるよりも、精神の破壞によつて生ずる場合の方が一層效果がある。この苦痛はシルレルの「ヴァレンシュタイン」の場合の如く、身體が精神を苦しめずに死と共にその苦痛を終る場合と、第二にグンペンチオの「國盜」の如く、精神のみが內的に苦痛を生ずる場合と、第三に「ロメオとジュリエット」の場合の如く、身體と精神との兩者が亡びる場合とがある。併し單に苦みだけでは、それは悲哀美（Das Traurige）に過ぎないで悲壯とはならぬ。それが悲壯となるには、その苦しむ人物が人間的に偉大であること、即ち崇高なることを要する。併しその人間的偉大といふことは、意志の力に限らず感情の深さにもよる。例へばグリルパルツェルの作品がそれである。すべて悲壯は苦しむことにより悲觀的になるが、又これに高められゝことによつて高揚の快感との二つの感情が共作用する。かゝる對照感情の作用のない限り、その苦痛は前述の悲哀となる。そしてこの苦痛が極めて不幸なことによつて生ずると、悲觀美（Das Pikante）・憐憫美（Das Jammerliche）となる。又それが心配や驚きの印象による時は驚愕美（Das Entsetzliche）・恐怖美（Das Furchtbare）となる。これ等のものは、ドストエフスキー、トルストイ、ロップス、ビアーグレーの作品に現れる。次に悲壯美の種類を畧げると、第一に外的の苦藤によるものと、內的の苦藤によるものとがある。即ち自然の事件によるものと人間の關係によるものとである。又その人間の關係の性質でも、理性的な自我によるものと危險な自我によるものとがある。又外的と內的とが相互に作用して生ずる場合もある。第二にその苦痛が道德上の罪によるか否かによつて有罪のものと無罪のものとに分れる。第三に高揚感情から分つて比較的高揚的のものと比較的壓迫的のものとがある。（美的觀想參照）

【参考】Lipps Th. : *Der Streit über die Tragödie*. 1897. ‖ Volkelt, J. : *Ästhetik des Tragischen*. 1897. ○悲劇美の美學（金田鼎譯）

卑俗主義（ひぞくしゅぎ）　藝術論【獨】Trivialismus【解說】美學者ギョーの用語で誤つた寫實主義、即ち生命の統一的價値を見ずして形相の表面や量のみを見、これを藝術的表現にもたらすものを卑俗主義と稱した。彼によれば、藝術は生命のうちに形相を有機化しなければならぬとし、本當の寫實主義は、現實を卑俗から切りはなすことであつて、藝術表現の上において、卑俗を斥ける方法は、（一）事物や事件を時間的にまづ否々から遠ざけること。（二）空間上想像の轉位を行ふことである。（村田）

日高川入相花王（ひだかがはいりあひのはなおう）　浄瑠璃五段　時代物【作者】竹田小出雲・近松半二・北窓後一・竹本三郎兵衛・二歩堂【初演】寶暦九年二月一日初日、竹本座。【諸本】七行九十四丁本【題材】紀門の遺志を繼ぐ伊勢後純友の反逆と道成寺傳說とを脚色する。【梗概】（初段）（鳥山郷狩）朱雀天皇は御多病の故に御位を弟君標木親王に仰讓りになろうとする。左大臣藤原忠文は親王を歸に落し、王位を竊つてゐるので、先づこれを留め、御后を迎へられん事を勸める。そして標木親王が天皇の御平癒を祈るべく、紀州道成寺の鐘供養を仰せ出されると、忠文はこれに對抗して叡山の僧賴寂に三井寺の鐘供養を命ずる。（加茂川堤）略。（實檢館）大臣實頼の死後小野の家は、一人の娘お柴姫を守る女所帶である。約束通り標木親王は、殘て醜伴の姫の許へ忍ばれる。取持役の雛家平治之助・婦夕霧は勿論、物堅いゆらの戸までお寝んでゐる。

【参考】[illegible]

日蓮川東雄 [illegible]

【参考】[illegible]

【参考】[illegible]

【参考】[

（東京都渋谷区　木村　清　氏蔵）

たのである。

【歴史】（歴史）天保十三年五月十二日初日、江戸市中取締方の「改革」が始まり、三月十四日、歌舞伎の「三代目瀬川菊之丞」（市川九蔵）が、「市川九蔵（歌舞伎）」の名を捨てて、「瀬川菊之丞」（歌舞伎）を名乗ることになった。

【作者】（作者）天保十三年、江戸市中取締方の「改革」が始まり、歌舞伎の「三代目瀬川菊之丞」（市川九蔵）が、「市川九蔵（歌舞伎）」の名を捨てて、「瀬川菊之丞」（歌舞伎）を名乗ることになった。

【内容】（内容）歌舞伎の三代目瀬川菊之丞（市川九蔵）が、「改革」の取締方に目を付けられ、「市川九蔵（歌舞伎）」の名を捨てて、「瀬川菊之丞」（歌舞伎）を名乗ることになった。

【参考】（参考）歌舞伎の三代目瀬川菊之丞（市川九蔵）は

業界（ぎょうかい）【名】 Industry. 業界紙 業界人 業界誌 業界地図 業界団体 業界標準 業界用語 業界関係者 業界新聞 業界誌 業界人 業界紙

ッテスは美的観念を導出するが、これはいうまでもなく美的観念の起源を説明するものである。（美学概論・哲学概論参照）

【参考】Hartmann : *Aesthetik.* ○原田博訳 全訳美学 〔井田〕

美的観念論 美的観念を「美学概論」と云ふ。

美的価値 美学 〔原〕Aesthetischer Wert.【術語】この言葉はいろいろの意味に使はれる。即ち（イ）美の原因となる客観的性質として使はれ、（ロ）美的享受の対象としての美的価値、（ハ）美的享受の結果としての美的価値、（ニ）美的享受の対象としての美的価値、（ホ）美的享受の結果としての美的価値、（ヘ）美的享受の対象としての美的価値、（ト）美的享受の結果としての美的価値、（チ）美的享受の対象としての美的価値、（リ）美的享受の結果としての美的価値、（ヌ）美的享受の対象としての美的価値、（ル）美的享受の結果としての美的価値、（ヲ）美的享受の対象としての美的価値、（ワ）美的享受の結果としての美的価値、（カ）美的享受の対象としての美的価値、（ヨ）美的享受の結果としての美的価値、（タ）美的享受の対象としての美的価値、（レ）美的享受の結果としての美的価値、（ソ）美的享受の対象としての美的価値、（ツ）美的享受の結果としての美的価値、（ネ）美的享受の対象としての美的価値、（ナ）美的享受の結果としての美的価値、（ラ）美的享受の対象としての美的価値、（ム）美的享受の結果としての美的価値、（ウ）美的享受の対象としての美的価値、（ヰ）美的享受の結果としての美的価値、（ノ）美的享受の対象としての美的価値、（オ）美的享受の結果としての美的価値、（ク）美的享受の対象としての美的価値、（ヤ）美的享受の結果としての美的価値、（マ）美的享受の対象としての美的価値、（ケ）美的享受の結果としての美的価値、（フ）美的享受の対象としての美的価値、（コ）美的享受の結果としての美的価値、（エ）美的享受の対象としての美的価値、（テ）美的享受の結果としての美的価値、（ア）美的享受の対象としての美的価値、（サ）美的享受の結果としての美的価値、（キ）美的享受の対象としての美的価値、（ユ）美的享受の結果としての美的価値、（メ）美的享受の対象としての美的価値、（ミ）美的享受の結果としての美的価値、（シ）美的享受の対象としての美的価値、（ヱ）美的享受の結果としての美的価値、（ヒ）美的享受の対象としての美的価値、（モ）美的享受の結果としての美的価値、（セ）美的享受の対象としての美的価値、（ス）美的享受の結果としての美的価値、（ン）美的享受の対象としての美的価値、（ロ）美的享受の結果としての美的価値、（ハ）美的享受の対象としての美的価値、（ニ）美的享受の結果としての美的価値、（ホ）美的享受の対象としての美的価値、（ヘ）美的享受の結果としての美的価値、（ト）美的享受の対象としての美的価値、（チ）美的享受の結果としての美的価値、（リ）美的享受の対象としての美的価値、（ヌ）美的享受の結果としての美的価値、（ル）美的享受の対象としての美的価値、（ヲ）美的享受の結果としての美的価値、（ワ）美的享受の対象としての美的価値、（カ）美的享受の結果としての美的価値、（ヨ）美的享受の対象としての美的価値、（タ）美的享受の結果としての美的価値、（レ）美的享受の対象としての美的価値、（ソ）美的享受の結果としての美的価値、（ツ）美的享受の対象としての美的価値、（ネ）美的享受の結果としての美的価値、（ナ）美的享受の対象としての美的価値、（ラ）美的享受の結果としての美的価値、（ム）美的享受の対象としての美的価値、（ウ）美的享受の結果としての美的価値、（ヰ）美的享受の対象としての美的価値、（ノ）美的享受の結果としての美的価値、（オ）美的享受の対象としての美的価値、（ク）美的享受の結果としての美的価値、（ヤ）美的享受の対象としての美的価値、（マ）美的享受の結果としての美的価値、（ケ）美的享受の対象としての美的価値、（フ）美的享受の結果としての美的価値、（コ）美的享受の対象としての美的価値、（エ）美的享受の結果としての美的価値、（テ）美的享受の対象としての美的価値、（ア）美的享受の結果としての美的価値、（サ）美的享受の対象としての美的価値、（キ）美的享受の結果としての美的価値、（ユ）美的享受の対象としての美的価値、（メ）美的享受の結果としての美的価値、（ミ）美的享受の対象としての美的価値、（シ）美的享受の結果としての美的価値、（ヱ）美的享受の対象としての美的価値、（ヒ）美的享受の結果としての美的価値、（モ）美的享受の対象としての美的価値、（セ）美的享受の結果としての美的価値、（ス）美的享受の対象としての美的価値、（ン）美的享受の結果としての美的価値

の美的規範は、美学上の問題として、美的現象の法則を規定する。（美的感官参照）

【参考】ドゥムシャ『美学概説』（第三巻）〔村田〕

美的官能（びてきかんのう）　名詞　〔独〕Aesthetische Sinn.【英】Aesthetical Sense.【説】美的な感覚を起こすような官能のはたらきをいう。（美的感覚参照）〔村田〕

美的規範（びてきかはん）　名詞　〔独〕Aesthetische Norm.【仏訳】美又は芸術上の問題解釈の規準。この問題解決の解決に対して、美的現象の規範は、美学上の問題としての美的規範解釈学である。美は、この問題解釈学の問題として、美的現象の規範は、美学上の問題としての美的規範解釈学である。これは美学の問題解釈学の問題として

は、ライ同りに於て、美的合理性を得るのである。この場合の美は自然美・工業美・芸術美の現代の諸美学・美学的事実に於て、美的合理性を得るのである。又、美学的事実に於ても、美的合理性を得るのである。

【好悪の感覚】 美学に於ける一種の感覚として、好悪という感覚を考へるならば、それは美的の分析、分析的作用である。ツーディ・タイプに於ては、好悪の知覚である。（1）美に驚くられた感覚知覚美学的一切の中に、手を好悪、これを特に美学的に於ける。（11）感覚知覚美学的記憶を主とする構成式的現は、これ、この貴重美学を感覚同じ、ようとする。〔美学〕

美的好悪（びてきこうお） 美学〔関〕Aes. Stoffe.〔英〕Aes. Materials.【同義】感覚美学の初期の段階である一切のものを云ふ。自然・人物・事件・感覚・観念・思想・感情。【関連】感覚的好悪に於ける美学的事実に関する問題を分ければ、（1）文学に於ける問題・主題と云ふ場合の、即ち一定の人文ひと人に関する美的好悪である。（2）美的好悪美学上の石・木材等の物質的材料。美術品の等を材料とする場合。（3）美的好悪美学的材料に対する美学は、それ自身美的意識美学的材料に関する美学は、材料は（単に単に）自然的（美は美）を対し、同時に美学的材料に関する問題。美学的好悪美学的材料に関

(Künstlerische Wahrheit)という言葉も用ひられることがある。フィードラー(Fiedler)はこれを自分も用ひてゐる。【参考】

【参考】 Fiedler, C. : *Moderne Naturalismus und künstlerische Wahrheit.* (*Fiedlers Schriften über Kunst* 1896.)

美的態度（びてきたいど）　美学〔仏〕Aesthetische Einstellung.【英訳】美的態度。美的態度と同義(参考項目)。主として現象的美学上に用ひられる。【参考】

美的生活論（びてきせいかつろん）　倫文〔英米〕

高山樗牛【原義】明治三十四年八月「太陽」。【由来】明治三十年以来、日本主義を唱へて反国粋的に個人主義に轉じ、「美的生活」を高調した。が、それは必ずしも狭義で「芸術家」とは言はなかつた。それは必ずしも狭義で「芸術家」とは言はなかつた。それは必ずしも狭義で「芸術家」とは言はなかつた。人生を面白くする美味に中心を置いて、人生を美的に見ようとする主張。【内容】樗牛は、先づ美的生活を定義して「自己本位の美的生活を力説するに当つたのである。【内容】樗牛は、先づ美的生活を定義して「自己の現在也」と云ひ、「人生本位の要求を満足せしむるもの」、換言すれば、「人生本位の要求を満足せしむるもの」、換言すれば、「人生本位の要求を満足せしむるもの」、換言すれば

に美を生ずる位置にあるべきである。ライプに於ては、結晶的形式を示す美術作品をもはるかに同情的考察をなしたる。（イ）其結果は同性質の位置にあるべきである。全部性の欠如ならびに手工業の位置にあるべきである。されこの間ノーベルに於て美術作品の位置にあるべきである。（美術の性質・美術史参照）

【参考】Carriere : *Die Kunst im Zusammenhang d. Culturentwick lung u. d. Ideale d. menschheit. 1863.* ‖ Hartmann : *Aes. Bd, II. 1887.*　【佐田】

美的調和（びてきちょうわ）　美学【仏】Aesthetische Harmonie【美学】美的主観と美的対象（美学）との関係を指して言う場合には、美的関係（美学）者は美的同化という。同じである。これは其結果として、事に同和があるとなれば、美的調和の一の形式を指していうのであるが、色彩調和の一の形式を指して美的調和（美学）を云うべきである。【佐田】

美的直観（びてきちょくかん）　美学【仏】Aesthetische Intuition【美学】直観を美学上に適用した場合に、美的直観は美的対象に対する美的直観の心的作用であって、美に関する直観的美学、美に関する直観的美学と用いられる。（参考にしては「美的直観」の項目を参照のこと）（Kowarzik）【参考】

美的直観（びてきちょくかん）　美学【仏】Aesthetische Anschauung.【美学】同一・同の一種の美的対象、又はそれ自身の美的対象の感覚的性質を直観して直観を美学上の一。この直観は一種の美的対象を直観する。（L. Kühn）に於ては美的対象の直観をもって美的直観と云う。【佐田】

美的直観性（びてきちょくかんせい）　美学【仏】Aesthetische Anschauunlichkeit.【美学】同一・直の一種美的対象・知覚、又はそれ自身の美的対象の感覚的性質を直観して直観を美学上の一。この直観は一種の美的対象を直観する。（L. Kühn）に於ては美的対象の直観をもって美的直観と云う。【佐田】

美的直観（びてきちょくかん）　美学【仏】Aesthetische Anschauung.【美学】同一・同の一種美的対象

美的享受 美学〔関〕Aesthetische Nerneinung.【解説】美的判断に基づく否定。但しこの場合に於ける美的判断とは、美的感情に乏人判断の意味であり、美的なるものの否定は、美的享受とは言ひ難い。【参考】美的享受。

美的表現 美学〔関〕Aes. Ausdruck.【英】Aes. expression.【解説】美的表現の意味には英語上色々な場合がある。(1)第に表出といふ言葉で言ひ表はされる。すなはち美学上の意味。舞踊上の役者の表情・身振・歌唱の人物の意味。(2)美的感情の客観的表現である。(3)美的作品の客観的表現である。即ち美的感情の上で言ひ表はされる場合。(4)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(5)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(6)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(7)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(8)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(9)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(10)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(11)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(12)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(13)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(14)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(15)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(16)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(17)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(18)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(19)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(20)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(21)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(22)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(23)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(24)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(25)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(26)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(27)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(28)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(29)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(30)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(31)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(32)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(33)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(34)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(35)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(36)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(37)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(38)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(39)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(40)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(41)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(42)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(43)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(44)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(45)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(46)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(47)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(48)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(49)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(50)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(51)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(52)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(53)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(54)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(55)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(56)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(57)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(58)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(59)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(60)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(61)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(62)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(63)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(64)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(65)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(66)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(67)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(68)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(69)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(70)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(71)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(72)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(73)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(74)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(75)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(76)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(77)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(78)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(79)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(80)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(81)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(82)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(83)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(84)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(85)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(86)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(87)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(88)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(89)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(90)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(91)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(92)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(93)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(94)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(95)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(96)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(97)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(98)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(99)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(100)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(101)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(102)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(103)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(104)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(105)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(106)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(107)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(108)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(109)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(110)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(111)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(112)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(113)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(114)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(115)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(116)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(117)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(118)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(119)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(120)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(121)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(122)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(123)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(124)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(125)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(126)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(127)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(128)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(129)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(130)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(131)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(132)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(133)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(134)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(135)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(136)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(137)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(138)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(139)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(140)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(141)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(142)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(143)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(144)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(145)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(146)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(147)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(148)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(149)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(150)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(151)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(152)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(153)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(154)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(155)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(156)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(157)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(158)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(159)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(160)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(161)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(162)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(163)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(164)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(165)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(166)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(167)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(168)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(169)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(170)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(171)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(172)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(173)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(174)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(175)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(176)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(177)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(178)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(179)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(180)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(181)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(182)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(183)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(184)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(185)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(186)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(187)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(188)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(189)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(190)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(191)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(192)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(193)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(194)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(195)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(196)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(197)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(198)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(199)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(200)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(201)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(202)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(203)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(204)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(205)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(206)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(207)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(208)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(209)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(210)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(211)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(212)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(213)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(214)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(215)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(216)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(217)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(218)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(219)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(220)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(221)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(222)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(223)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(224)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(225)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(226)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(227)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(228)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(229)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(230)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(231)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(232)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(233)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(234)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(235)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(236)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(237)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(238)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(239)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(240)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(241)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(242)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(243)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(244)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(245)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(246)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(247)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(248)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(249)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(250)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(251)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(252)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(253)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(254)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(255)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(256)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(257)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(258)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(259)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(260)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(261)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(262)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(263)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(264)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(265)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(266)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(267)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(268)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(269)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(270)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(271)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(272)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(273)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(274)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(275)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(276)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(277)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(278)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(279)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(280)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(281)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(282)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(283)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(284)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(285)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(286)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(287)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(288)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(289)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(290)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(291)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(292)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(293)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(294)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(295)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(296)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(297)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(298)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(299)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(300)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(301)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(302)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(303)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(304)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(305)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(306)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(307)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(308)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(309)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(310)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(311)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(312)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(313)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(314)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(315)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(316)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(317)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(318)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(319)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(320)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(321)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(322)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(323)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(324)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(325)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(326)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(327)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(328)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(329)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(330)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(331)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(332)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(333)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(334)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(335)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(336)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(337)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(338)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(339)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(340)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(341)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(342)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(343)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(344)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(345)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(346)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(347)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(348)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(349)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(350)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(351)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(352)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(353)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(354)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(355)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(356)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(357)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(358)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(359)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(360)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(361)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(362)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(363)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(364)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(365)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(366)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(367)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(368)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(369)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(370)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(371)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(372)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(373)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(374)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(375)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(376)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(377)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(378)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(379)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(380)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(381)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(382)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(383)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(384)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(385)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(386)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(387)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(388)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(389)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(390)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(391)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(392)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(393)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(394)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(395)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(396)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(397)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(398)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(399)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(400)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(401)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(402)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(403)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(404)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(405)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(406)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(407)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(408)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(409)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(410)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(411)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(412)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(413)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(414)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(415)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(416)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(417)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(418)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(419)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(420)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(421)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(422)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(423)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(424)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(425)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(426)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(427)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(428)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(429)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(430)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(431)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(432)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(433)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(434)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(435)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(436)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(437)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(438)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(439)美的作品の外面的表現である。即ち美的作品の外面化・具象化を言ふ。(440

美的理想 びてきりそう　美學 〔獨〕 Aesthetische Idee. 【語義】美術上學に於ける理想的に存在とする理念が哲學的に實現されたるもの、即ち美的に實現せられたる理念。主觀として美術上學的美的に於ける用語。但し美的理想とは美的理想力の産物。

【參考】Hartmann, Ed. v. : *Aesthetik*. 2 Teil. 1887. ‖ Vischer, Th. : *Das Schöne und die Kunst*. 1897. ‖ Lipps, Th. : *Aesthetik* Bd. I. 1903. ‖ Volkelt, J. : *System der Aesthetik*. Bd. II. 1910. ‖ Hamann, R. : *Aesthetik*. 1911. 〔長谷〕

美的理念 びてきりねん　美學 〔獨〕 Aesthetische Idee. 【語義】美術上學に於ける理想的に存在とする理念が哲學的に實現されたるもの、即ち美的に實現せられたる理念。主觀として美術上學的美的に於ける用語。但し美的理念とは美的理念力の産物。

【參考】Hartmann, Ed. v. : *Aesthetik*. 2 Teil. 1887. ‖ Vischer, Th. : *Das Schöne und die Kunst*. 1897. ‖ Lipps, Th. : *Aesthetik* Bd. I. 1903. ‖ Volkelt, J. : *System der Aesthetik*. Bd. II. 1910. ‖ Hamann, R. : *Aesthetik*. 1911. 〔長谷〕

美的領域 びてきりょういき　美學 〔獨〕 Aesthetisches Gebiet. 【解說】美的自律性をもつる領域。美的自律性とは美的領域の特徴。

美的類型 びてきるいけい　美學 〔獨〕 Aesthetische Idee. 【語義】美術上學に於ける理想的に存在とする理念が哲學的に實現されたるもの、即ち美的に實現せられたる理念。主觀として美術上學的美的に於ける用語。但し美的類型とは美的類型力の産物。

【參考】Hartmann, Ed. v. : *Aesthetik*. 2 Teil. 1887. ‖ Vischer, Th. : *Das Schöne und die Kunst*. 1897. ‖ Lipps, Th. : *Aesthetik* Bd. I. 1903. ‖ Volkelt, J. : *System der Aesthetik*. Bd. II. 1910. ‖ Hamann, R. : *Aesthetik*. 1911. 〔長谷〕

美的類想 びてきるいそう　美學 〔獨〕 Aesthetische Idee. 【語義】美術上學に於ける理想的に存在とする理念が哲學的に實現されたるもの、即ち美的に實現せられたる理念。主觀として美術上學的美的に於ける用語。但し美的類想とは美的類想

一種（いしゅ）　作詞者　一書【聞き】公卿の所賞【字義】名詞の字に「武」をつけたもの。「武」は武器におもむくことのあらわれ。「種」は穀物の種子。「武」は「ほこ」。「種」は「たね」。「武」は「ほこ」。「種」は「たね」。「武」は「ほこ」。「種」は「たね」

書者は、書道四段・歌道十一首・香川景樹系歌人。本書は、書道・歌道・和漢学・国学・考証・随筆・雑録・雑歌・雑文・雑詩・雑句・雑文・雑詩・雑句・雑文・雑詩・雑句

大阪言葉【成立】安政四年七月以降のことと思われる。【著者】大阪言葉とその音声とまつわる問題を論じた。【内容】この書は、「ことばの性質」「言語の歴史」「言語の音声」「言語の文法」「言語の文字」「言語の文章」「言語の文体」「言語の文学」「言語の文化」「言語の文明」「言語の文人」「言語の文人の文学」「言語の文人の文学の文化」「言語の文人の文学の文化の文明」「言語の文人の文学の文化の文明の文人」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人」「言語の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学の文化の文明の文人の文学」

ひとりぶし　歌謡集　一巻【著者】

【著者】

【成立】

【内容】

【刊行】

【参考】

ひとりぶし　歌謡集　一巻【作者】

【成立】

【著者】

【内容】

【刊行】

【参考】

の主人もものである。原作は二幕物。

ひとりたち　一幕　長唄・清元・浄瑠璃

【作者】[illegible]【初演】[illegible]【所演】[illegible]【内容】[illegible]

ひとりぼっち　一幕　長唄・清元・浄瑠璃

【作者】[illegible]【初演】[illegible]【所演】[illegible]【内容】[illegible]

ひとりぼっち　一幕　長唄・清元・浄瑠璃

【作者】[illegible]【初演】[illegible]【所演】[illegible]【内容】[illegible]

**ひとりもの

雷　「雷鳴」を見よ。

雷人素盞嗚　「素盞嗚尊」を見よ。

雷人太手記　[らいじんたてき]　[作者]　[年代]　[題名]　[内容]　[評]

雷上動　[らいじょうどう]　[作者]　[年代]　[題名]　[内容]　[評]

雷神　[らいじん]　[作者]　[年代]　[題名]　[内容]　[評]

雷電　[らいでん]　[作者]　[年代]　[題名]　[内容]　[評]

雷電為右衛門　[らいでんためえもん]　[作者]　[年代]　[題名]　[内容]　[評]

雷鳴　[らいめい]　[作者]　[年代]　[題名]　[内容]　[評]

雷鳴太郎　[らいめいたろう]　[作者]　[年代]　[題名]　[内容]　[評]

ラヴ

火の柱（ひのはしら）小説【作者】木下尚江【原案】明治三十七年一月一三日、東京毎日新聞に掲載。【刊行】同年六月、市村文昌堂。木下尚江は全集一巻所収。

【梗概】日露戦争の直前、同盟新聞の主筆幸田露伴、社会主義者の文学者から、政子主義者の幸徳秋水、社会の両極を象徴に描く。日露戦争を明くるので、政府は政策、宣戦から一般世論を煽動しようとして、新聞、雑誌、出版物に厳重な取締を加へ

で、「詩」の「詩」は、「詩」の「詩」の「詩」の

の中に書くられてしまうのだ。水に乙巳年は子孫繁昌の年だ。人形・雛の書・子・孫・家・人間・家・人・百・百・百

の句は、「月の光」の句と、「月の光」の句とは、「月の光」の句と、「月の光」の句とは、「月の光」の句と、「月の光」の句とは

力によつて見事癩を退治して二度目の功名を立てる。頼朝の一行が假屋に入つて後、新田一人狩場に佇んでゐる所へ曾我十郎立ち現はれ、先刻解で虎を救つてくれた禮を述べ、さて近く敵討を討つべき大衆を打明け、その節は首を討たれて恩義に報いようと約束する。〔二段〕〔假屋木戸口〕海野は神眞を縄として義經の殘黨を探し出さうと鬼王・團三郎・花野等の兄妹を連れて急ぐ折から、海野の受持の木戸口ではたと出會ふ。海野は五郎等を怪しみ審問するが、入道は嘯嗟に拵をとつて敵々に五郎を打擲しあかの他人を裝ふ。海野が更に五郎に生業を訊ねると、奥州伊達郎の側城屋なるが、今側城を召抱へて下る途中と答へ、〔側城詞狀〕その證據に側城詞狀を讀み聞かせる。海野は始めて疑ひを晴らし、五郎の請に任せて入道を下渡す〔曾我物語〕巻第五「五郎と源大と原陣の事」の改作、並に謡曲「安宅」の関守〕。〔狩場〕十郎は遙かに敵經を認め、迫駆けて射ようとするが、馬から落ち打ち損じ危く取逃がす。折から驀付けた五郎は兄を抱上げて共に口惜がる〔曾我物語「夜討曾我」の口説節の改作〕。〔三段〕〔假屋への道筋〕黄昏になつて、曾我兄弟が敵討にと出立つ途中、雷で虎・少將の朋輩であつた宮瀬川の龜菊に逢ふ。龜菊は敵經に請出され、彼の授分で頼朝に來公との使に行く所なのである。兄弟は驚いて敵討を今宵決行すべき事を打明け、御成を中止するやう工夫を頼むので、龜菊は敵經は病氣と御所へ返事をしようと約する。五郎は喜んで、本望成就の曉は、お前の手に捕へられようと誓ふ。〔敵經假屋〕〔敵討〕〔假屋門外〕兄弟は死に物狂ひの奮戰の後、十郎は所期の如く新田に首を打たせるが、五郎は女裝の五郎丸を龜菊と思ひ違つて生捕られる〔「曾我物語」巻第九十郎が討死の事」及び「五郎召捕らる・事」の改作〕。虎・少將は兄弟の跡を慕ひ、男裝をして假屋近く忍び入る。それとも知らず龜菊は少將を五郎と間違へて組みつくが、やがてそれと知つて驚く。そこへ夜廻りが十郎の討死並に五郎召捕の事をふれ廻る。〔四段〕〔新田假屋への道筋〕新田が十郎を討取つて三度目の功名を立てたので、頼朝は新田芝四郎を使者として、松島月毛を新田の假屋へ引かしめる。その途中朝比奈が立ち現はれ、馬取り仲間達を蹴散らし、馬を奪つて逃げ去る。〔虎・少將道行〕虎・少將は事の次第を感慨なる禪師坊に告げんと剛腕實に身を窶して出立つ。〔松長の里〕虎・少將は途中で禪師坊が海野に召捕られ、牢輿で護送されるのに出會ひ、情然として曾我へ引返す。〔頼朝假屋〕禪師坊は頼朝の前に引据ゑられ、詰問の末死を宣せられる〔「曾我物語」巻第十「禪師法師が自害の事」に謡る。そこへ曾我の老母が二の宮・虎・少將等と來り、この有樣に嘆き悲しむが、禪師坊は「三部經」〔「幸若舞曲」「十番切」の三部經の改作〕を讀んで母を慰める。折から新田が何候して契約の馬を催促するので、窮した頼朝は新田の望みに任せ禪師坊を賜はる。新田は直ちに禪師坊の綱を釋いてやるので、母を始め一同喜ぶ所に朝比奈が松島月毛を引いて驀來り、新田の處置を褒めて馬を贈る。そこへ海野がやつて來るが、人々の物笑ひとなる。〔五段〕〔茶摘待場〕孟蘭盆に曾我一家の人々が兄弟の回向のため、兄弟最期の場に應を設け、往來の人に茶を摘持してゐる。そこへ頼家に仕へる大友左近將監が主君の内意を受け來り、宮士の根野に兄弟を祀る社を建てた旨を傳へ、黄金一包を賜ふ。〔根野の社〕頼朝父子が根野の社に參詣し、兄弟の遺兒に本領を賜ふ。〔歌仙〕頼朝が宴餘に揚げてある三十六歌仙について一々説明をする〔「謡曲曾我」では五段目の序が、讃倉御所に於て、頼朝が曾我兄弟を富士野に祀るべき上意あり、次いで曾我の一族を召出し、それぞれに頒賞を賜ふ。大切が頼野の社に頼朝參詣あり、虎・少將が昔顧れし舞を舞うて御覽に入れる。折から陽雲橋かに舞ひ下り、新田に退治せられた鬼の霊が現出となつて現はれが、兄弟の縁によつて亡びる。〔影響〕〔柳亭浄瑠璃本目録〕に、「剛屋曾我」といふ元祿十三年刊の横本の草紙がある事や、元祿十五年刊の〔俳諧花見車〕〔雲水作〕の巻尾に〔俳諧講狀〕といふ本作の「側城詞狀」を讃つた狂文のある事を記してある。また元祿十四年に〔側城詞狀〕〔別項〕といふ浮世草子が刊行され、歌舞伎でも元祿十四年、大阪片岡仁左衛門座の二の替り狂言に本作が演ぜられた。これ等は本作が元祿十三年頃の興行である事を示すものではあるまいか。〔肇曲類纂〕巻一に「關東曾我」名稿城詠といへるは和泉太夫が淨瑠璃にして近松門左衛門が作なり」とあるのは、浮世草子の「側城詞狀」の記事に據つたのであらう。本作二段目「側城詞狀」及び四段目虎・少將道行〔「あまざうり」は江戸半太夫節にも語られた。

百目曾我（正本）

【參考】近松名作集（日本名著全集）上解題（馬木勘藏）○近松全集第五卷解題（暮井乙男）○近松曾我物考（高野正巳）國語と國文學一〇八〇（京都帝國大學）○歌舞伎年代記○近世邦樂年表（鶴太夫節之部）○日本歌謡集成（巻十一）（高野正巳）

百人一首（ひやくにんいつしゅ）

和歌【名義】一作家の和歌一首づつを撰し、これを百に滿てたものを云ふ。「小倉百人一首」（別項）を略してしか呼ぶ場合もある。【性質】「小倉百人一首」以外のものは、みなこれを摸倣した體裁に作られてゐる。或は小倉百首の撰に漏れた人の歌を撰したり、或は特定の範圍に作家や時代を限定したり、種々の體裁が案出されたが、一作家一首を撰し、百に滿てゐる點は悉共通である。【沿革】「小倉百人一首」が最初であらう。ついで二條良基の「後撰百人一首」、足利義尚の「新百人一首」などが古い。これ等は小倉百首の補遺の如き意味のものである。即ち後者の如きは、文武天皇から花園院までの作家で、小倉百首に入つてゐない人々の歌を撰んでゐる。體裁に種々なものの生じたのは、主として江戸時代に入つてからである。その主なるものを擧げれば、作家の範圍を限定したもの、編纂年代を限定したもの、松平定以の「續武家百人一首」（文政六年跋）及び「後撰武家百人一首」（文政七年跋）や、撰者不詳の「女房百人一首」などがあり、作家の時代を限定したもの、藤井敬弾の「近代百首」、多田清興の「當世百歌撰」（安政二年）、鶴網助之の「現存百人一首」（安政七年跋）など、それらの時代の秀歌撰集の如き體裁をなしてゐる。この種のものは、明治以後にも多く撰せられた。又出據を限定したもの、本居大平の「萬葉山雷百首」（文政六年）、大森盛顕の「古今和歌集一首撰」（嘉永六年）、黒澤翁滿の「源氏百人一首」、松平樂山の「新業百人一首」、「二十一代集雅歌淨土百歌仙」の如きがある。撰歌編次に際し、特別の目的を有するものには、藤井懶齋の「藏鈍百首」（延寶六年）の如き教訓を主旨とするものがあり、藤原義懐の「心學道歌古今百首」（天保十四年刊）、恵孝紀蔑丸の「道歌百人一首」（弘化三年刊）なども、この類に屬するが、明治初年にも、堀秀成の「名歌百首」（明治七年）、久保季鼓の「萬葉明歌百首」（明治十四年）、林麥臣の「修身百首」（同年）など、この系統のものは多い。幕末の頃には「崎人百人一首」（嘉永五年）や、「花街百人一首」（安政三年）、「新撰狂歌」など、戯面目な和歌の興味からは、面白い編著も行はれた。明治以後には更に種々のものが作られたが中で、佐々木弘綱の「續百人一首」、古今百人一首」、佐佐木信綱の「近世百人一首」などがある。かくて百人一首と稱せらるゝものは、殆横東遼氏の蒐集にかゝるもの、九百種を越ゆる多數に及んでゐる。

【時代と體裁】二條家（別項）では、小倉百首を「和歌三部抄」の一に加へて歌人必見の書と説いてゐる。このため、その歌學説に從ふものの間では、その註釋解説の書を作るもの極めて多數に及び、和歌青及に多くの便宜を提供した。その撰做が前記の如く、各種多樣に作られたが、徳川期以後では、小倉百首の一般に普及した形勢を利用し、種々の目的のために、その體裁を借り、和歌の鑑賞といふ本來の意圖を失うたものも出た。要するに小倉百首の撰次せられた當初の意圖は、十分明かではないが、歴代の作家の名のあるものの一首を撰んで、歴代秀逸撰歌集の如き意味があつたものと思はれる。これが二條家の説と結ばれたのが流行を來し、摸倣を產む重大な原因であらう。

【百人一首五歌の秘事】「和歌綿經抄」に、五歌の秘傳を擧げてある。五歌とは、（一）祐本人麿の「長々し夜を」の歌、（二）宮撰法師の「我庵は」の歌、（三）安部仲麿の「天の原」の歌、（四）壬生忠岑の「有明のつれなく」の歌、（五）藤原定家の「来ぬ人を」の歌の五つである。以上は二條家の傳で、他流では別に（一）大伴家持の「鵲」の歌、（二）法性寺入道關白の「和田の原」の歌、（三）壬生忠見の「有明のつれなく」の歌、（四）俊成の「世の中は」の歌、（五）西行の「夕されば」の歌を擧げてある。「詠歌大概抄」（別項）及び「未來記雨中吟」と共に歌道の教典に用ひられてゐたので、江戸時代の初期に於て、誰かが定めたものであらう。〔歌道傳授〕〔參照〕

【參考】百人一首物研究（鳥羽良雄〔初版日本文學講座第十九巻〕）

百人一首改觀抄（ひやくにんいつしゅかいかんしょう）

（杉浦・編井）註釋書　自筆本三巻・刊本五巻【著者】契沖【刊行】延享五年【成立・由來】元祿五年に成る。契沖が「萬葉集」研究の餘材を以て友人下河邊長流の「百人一首三奥抄」を增補して作つたもので、自記の跋文に「故人長流注ニ百人一首一草稿未レ圓身已乘化七年子今矣余惜ニ其不其志ニ忘ニ愚短ニ補之」とある。圓珠庵藏の著者自筆本は三巻であるが、後に今井似閑の門人樋口宗武が追考を加へ、延享五年に五巻として上木した。〔諸本〕著者自筆本（圓珠庵藏、契沖全集所收）、本居宣長再註五冊本（松井簡治氏藏）、陸阿書入三冊本（鹿倉雅藏）、彰考館藏三年に三好伸雄氏が、圓珠庵藏の自筆本を校刻したものがある。【内容】自筆本と刊本とでは、多少の相違がある。延享五年本は、第一巻冒頭に、漢文で「元祿五年壬申季夏隔江高津沙門契沖撰」と署名ある序を載せ、次に「延享四のとし丁卯の菊月花月堂主人樋口宗武識之」と署する序を掲げ、「凡例」の中に「此書草稿のとき沖師の注記の手よりもれて世に傳ふる書寫の本あり。悉謬すくなからず」とあるは注意すべきである。本文に入つて初めに百人一首の成立に就いて、「古來諸抄の説に定家朝、老後小倉山莊に隱居して百人の哥を一首づつ色紙形にかいて障子におされければ、百人一首とも小倉山莊色紙和歌ともいへり」と云ひ、撰歌の優劣に就いて、「いるべきがいらぬもあり、入りたるも作者のむねとおぼほえぬもあるべければ、人のみゐ所におされけるを後に子息雅家卿あつめ作者の名をつけて、ひろめらるといへり」と記し、著來の傳説をその儘に傳へ、次に「續後撰集」なる定家の歌「難波なる身をつくしてもかひぞなきみじかき芦のひとよばかりに」、「新後拾遺集」なる雅經の歌「思ひ入る山にてもまたなく鹿のなほうきやや袴のゆふぐれ」の二首を引用し、前者が百人一首中の皇嘉門院別當の歌に、後者が俊成の歌に似てゐるから、「續後撰集」「新後拾遺集」各別項の頃には、この百首がもてあそばれなかつたらうと云ひ、又との百首に入れる家隆の歌は、「寛喜元年によまれたるをこゝにとられたれば、新勅撰集より後などに此百首をば云らばれけるにやと考證して、次に天智天皇以下安倍仲麿に至る歌を註し、第二巻は貫撰より千里まで、第三巻は管家より朝忠まで、第四巻は謙徳公より清輝まで、第五巻は定頼より順徳院までの歌を註してゐる。跋文がない。自筆本には前記の二序なく、百首成立に就いてのはしがきをのせ、天智天皇より大江千里までを上巻に、管家より清輝までを中巻に、定頼以下を下巻に註し、最後に、「本に二帝の御歌をすゑて、末に兩院の御ウたを載せらる。これまた一部の首尾なり」と結んでゐる。跋文がある。兩者を比較すると、刊本には自筆本より增補訂正した點がある。久松潜一氏は序と跋との相違、本文の異同、追考の有無の三點をあげて、その增補は樋口宗武の手に成るものと斷じてゐる。追考とは樋口氏刊本の所々に自筆本の説と異見を説きあるをさす。一例をあげると、著者は百首成立に就いて前記の如く「明月記」の記事（小倉百人一首參照）を引いてゐないが、追考にはこれを引用して、補ふところある如きである。「群書一覽」巻四には、「契沖卒後、今井似閑の門人、京師の樋口主水宗武といふ人、屋敷山とはかりて改觀抄のあやまれるところ〳〵を刪り追考を加へて梓行す」とある。内容に就いて見るに、長流の「三奥抄」と本書とは過半は同説で、文章も同じきところがある。契沖が加へ

に、今は上下の区別なく、自己の歌を定家卿の撰歌に比し、全く百人一首の歌を選んで自己の歌を古歌一とせるものである。【今鏡】「今鏡」の「藤波の末葉」の歌に、「はかなき事なれども、人の心の変りやすきにつけて、なにとなく、あはれ深く、ものあはれなる事、ことの葉にも、ふしにも、あらはれ、ものの哀れ、ものの情、ものの美しさ、ものの面白さ、ものの珍しさ、ものの恋しさ、ものの悲しさ、ものの恨めしさ、ものの憎さ、ものの恐ろしさ、ものの嬉しさ、ものの楽しさ、ものの悔しさ、ものの妬ましさ、ものの羨ましさ、ものの恥ずかしさ、ものの憂さ、ものの辛さ、ものの苦しさ、ものの堪へがたさ、ものの忍びがたさ、ものの思ひ出でさ、ものの思ひ知らるる事、ものの思ひ知らぬ事、ものの思ひ知らぬ顔、ものの思ひ知らぬ心、ものの思ひ知らぬ人、ものの思ひ知らぬ世、ものの思ひ知らぬ身、ものの思ひ知らぬ山、ものの思ひ知らぬ海、ものの思ひ知らぬ空、ものの思ひ知らぬ月、ものの思ひ知らぬ雲、ものの思ひ知らぬ雨、ものの思ひ知らぬ雪、ものの思ひ知らぬ風、ものの思ひ知らぬ花、ものの思ひ知らぬ鳥、ものの思ひ知らぬ虫、ものの思ひ知らぬ草、ものの思ひ知らぬ木、ものの思ひ知らぬ水、ものの思ひ知らぬ波、ものの思ひ知らぬ岩、ものの思ひ知らぬ石、ものの思ひ知らぬ砂、ものの思ひ知らぬ塩、ものの思ひ知らぬ浦、ものの思ひ知らぬ海人、ものの思ひ知らぬ海人の苫、ものの思ひ知らぬ海人の苫の上、ものの思ひ知らぬ海人の苫の上の月、ものの思ひ知らぬ海人の苫の上の月の光、ものの思ひ知らぬ海人の苫の上の月の光の、ものの思ひ知らぬ海人の苫の上の月の光の、ものの思ひ知らぬ海人の苫の上の月の光の

の活用語の外にも一部分活用する語をもつものである。[文法]

〔連語一覧〕

愛宕	愛宕山	愛宕参詣
愛宕権現	愛宕千日詣	愛宕詣
愛宕参詣	愛宕参詣者	愛宕詣者
愛宕参詣道	愛宕参詣人	愛宕詣人
愛宕のちかひ	愛宕のつとめ	愛宕参詣道
愛宕のとりもち	愛宕の霊験	愛宕の霊験
愛宕参詣道	愛宕参詣道	つのくにの
愛宕	愛宕権現	愛宕様
愛宕の参詣	愛宕参詣	

〔連語一覧〕

愛宕参詣者	愛宕参詣人	人参詣
愛宕参詣道	愛宕参詣道	愛宕参詣道
愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕参詣
愛宕参詣	愛宕参詣者	愛宕参詣
こんぴらさま	愛宕参詣人	こんぴらさま
愛宕参詣者	愛宕参詣人	愛宕参詣人
愛宕参詣者	愛宕参詣	愛宕参詣者
愛宕参詣者	愛宕参詣	愛宕参詣者
愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕参詣

〔連語一覧〕

愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕参詣
愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕参詣
愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕
愛宕参詣	愛宕参詣	
愛宕参詣	愛宕参詣	
愛宕参詣	愛宕参詣	

〔連語一覧〕

愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕参詣
愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕参詣
愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕参詣
愛宕参詣	愛宕参詣	
愛宕参詣	愛宕参詣	

〔連語一覧〕

愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕参詣
愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕参詣
愛宕参詣	愛宕参詣	
愛宕参詣	愛宕参詣	

〔連語一覧〕

愛宕参詣	愛宕参詣	愛宕参詣
愛宕参詣	愛宕参詣

（後北條氏分国図）

問題発展の原動力となった。「国人」という語は、室町・戦国期の中世社会を理解するうえで重要な概念である。その定義は、研究者の数だけ存在するほどに多様であり、一つの定義に収まらない。本項では、代表的な研究を手がかりに、国人の成立・展開・衰退を概観する。

国人の成立

鎌倉期、三浦氏の支配する相模国三浦郡に、「国人」と呼ばれる在地領主層が存在したことは、史料上ほぼ確実である。ただし、鎌倉期の国人は、のちの戦国期の国人とは、その性格・規模・機能のいずれにおいても、大きな隔たりがある。

鎌倉期の国人は、御家人制度のなかで、幕府から所領を安堵され、軍役を負担する存在であった。その所領は、多くの場合、一郷または数郷にとどまり、その支配は、荘園領主や地頭の支配のなかに、部分的に組み込まれていた。

国人の衰退

戦国期の国人は、鎌倉期の国人とは、ほぼ別の系譜を引く。その多くは、鎌倉期の国人の子孫ではなく、新たに在地に土着した者、あるいは他国から移住してきた者である。

国人の成立

国人の成立は、荘園・公領の解体、武士の在地定着、惣村の成立、商品流通の発展、貨幣経済の浸透、などの、長期的な社会変動のなかで、ゆっくりと進んだ。

国人の衰退

国人の衰退は、戦国大名による領国支配の確立、検地・刀狩・兵農分離などの、豊臣政権の政策、江戸幕府の成立、などによって、ほぼ完了した。

参考文献

峯岸賢太郎『鎌倉期の国人』（吉川弘文館、二〇〇五年）

佐藤進一『日本の古文書』（岩波書店、一九九〇年）

網野善彦『中世の民と国家』（日本エディタースクール出版部、一九九四年）

石井進『鎌倉幕府』（中公新書、一九七四年）

黒田俊雄『荘園制と武士』（岩波書店、一九七五年）

ものである。「国人」という語は、鎌倉期・室町期・戦国期を通じて、ほぼ一貫して、在地に根を張る武士、あるいは、その集団を指す。ただし、その内実は、時代とともに、大きく変わっている。

国人の衰退

国人の衰退は、戦国大名による領国支配の確立、検地・刀狩・兵農分離などの、豊臣政権の政策、江戸幕府の成立、などによって、ほぼ完了した。

参考文献

峯岸賢太郎『鎌倉期の国人』（吉川弘文館、二〇〇五年）

佐藤進一『日本の古文書』（岩波書店、一九九〇年）

網野善彦『中世の民と国家』（日本エディタースクール出版部、一九九四年）

石井進『鎌倉幕府』（中公新書、一九七四年）

黒田俊雄『荘園制と武士』（岩波書店、一九七五年）

ツ、ホフマンスタール、カイゼルリング、ルードルフ、ボルヒェルト、ヘルマン、ヘッセ、ヘンリー、ハイネ、ヘッベル、ヘーベル、ヘーム、ヘルツ、ヘルデン、ヘルデンテノール、ヘルデンレーベン、ヘルデンリート、ヘルデンリーベ、ヘルデンヴェルト、ヘルデンヴェルト、ヘルデンヴェルト

の場合は、一般的人間の事情に基することで、その本来の意味は、一般的人間の事情に基することで、その本来の意味は、一般的人間の事情に基することで、その本来の意味

の中に用いられた。

【参考】記紀を参照に置り、多くの文字を使用した。

【参考】記紀を参照に置り、多くの文字を使用した。

【参考】記紀を参照に置り、多くの文字を使用した

て評判記とした寛政七年刊の「評判千種屋」一冊・佛教各宗の評判を記した天保四年刊の「諸宗評判記」三冊、なほ吉原細見（別項）等も評判記と見られるものである。これ等は概ね役者評判記の體樣に擬作されたもので、かうしたものが役者評判記と同時に行はれてゐた。（役者評判記參照）

【影響】古い遊女野郎の案内記・細見記である評判記は、浮世草子に大きな影響を與へてゐる。延寶五年刊の「たきつけ」「もえくひ」「けしずみ」（各別項）が島原の遊女の評判を書きながら、そこの遊郭を描き出さうとし、また延寶九年の「長崎土産」に於ては、更にさうした小說的なものが現はれてゐる。これは評判記が物語に展開したものと見るべきである。江戸時代初期の假名草子が漸次浮世草子に展開して行つた過程に於て、この評判記の影響が尠くなかつた。元祿前後の浮世草子は、遊里・芝居の評判記としても考へられよう。殊に西鶴の「男色大鑑」（別項）は野郎評判記とも見られ、八文字屋の好色物等は、遊女評判記・役者評判記的なものが多分に含まれてゐる。それはかうした評判記を要求した時代の町人文學に當然の歸結として、さうした遊女或は遊里及び野郎或は芝居の世界を描寫の主眼としたことには相違ないが、またこの遊里及び芝居の評判記が小說の脚色の上に材料となり參考されたことが多かつた。【價値】遊女・野郎の評判記は演劇史・風俗史上の好資料であるが、元祿前後の文學特に浮世草子研究に最も參考となるものである。また役者評判記も當時の文學或は風俗の研究に參考すべき資料であるが、最も歌舞伎研究の貴重な資料である。ただこの內容に側野があり、戲作的なものが混在してゐることが考慮されなければならない。なほそれ等の評判記に擬作された戲作・人物・藝道等の評判記も、單に戲作として見るべきものばかりではなく、そこに背景に中る評言を聽くことが出來る。

【參考】懷川文藝類聚（評判記）○江戸文學圖錄（解說篇）○役者評判記（高野辰之（演劇史研究會一集））○繪書解說（國書刊行會）（笹野）

屏風繪　びやうぶゑ　繪畫【解說】屏風にかいた種々の畫をいふ。一枚毎に別の畫を貼るものと全曲一面の大畫とがある。最も古いものでは「東大寺獻物帳」に記された「山水畫屏風」「太唐勅敕樣前親樂圖屏風」「古樣宮殿畫屏風」「子女畫屏風」「素畫夜遊屏風」等があり、現存のものでは、奈良正倉院御物の「鳥毛立女屏風圖」、東寺・神護寺等の「山水屏風」等があり、後世各派によつて傑作がものせられたが、藤原時代既に屏風繪は盛んであつた。樂府の御屏風、漢書の御屏風（漢書に題せる故事どもを書き、文集の御屏風、太宗の御屏風（太宗の御屏風は唐人打毬の繪なり）などあり、その他に地獄變相の御屏風、綉屏風、埴元錄御屏風、鴨毛屏風、和漢沙御屏風、扇ながしの御屏風、から繪の御屏風、碁づくしの屏風、倭繪の御屏風、十二天屏風、月次御屏風、備馬樂屏風、長恨歌御屏風、うしろの屏風、張樹屏風、產所の屏風など數ふるに遑ないほどである。「古今集」（二條の后の東宮のみやす所と申しける時、御屏風に船田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にてよめる）素性法師及び藤平朝臣の歌あり、凡河內躬恒の「亭子院の御屏風の繪に川渡らむとする人に紅葉ちる木のもとに馬をひかへてたてるを云云」の歌及び坂上是則の「屏風の繪によみ合せて書げる歌」あり、また素性法師の「內侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀しけるにて御屏風の御繪御覽じけるに瀧落たりける所面白し云云」の詠あり、「拾遺集」にも貫之の「陽成院の御屏風に小鷹がりしたる所を詠みし歌」あり、何れも和樣の繪畫であるべく盛華思ふべきである。【參照】

兵部卿物語　ひやうぶきやうものがたり　物語　一卷【作者】未詳【名稱】兵部卿宮を主人公とする故に、この名がある。【成立】「古物語類字抄」は「折々拾ひ詞どもゝ交り、且色紙・風葉・無名草子等にも見えねば」と、室町中期成立說を立て、「近古小說解題」は右の說を疑つてゐる。山岸氏の「風葉集以後鎌倉末期」と見る」とあるに從ふべきであらう。その思想や構想は明かに鎌倉時代の特徵を示してゐる。【諸本】續々群書類從第十五雜歌文部に、黑川氏藏本・岩本由豆流校本を收む。

【梗概】今上の二の宮に、兵部卿宮と申し上げる方があつた。帝も后もとり分け寵愛され、御位も讓りたいとさへ考へられるが、遠石世の聞えを憚られて、東宮には一の宮を立てられた。女持つ親達は、東宮をさし置いても、みめ美はしく、才たけた二の宮に我が女をと思はない者はなかつた。が、宮の心は、故式部卿の忘れ形見に向けられ、他の女は振り向かうともされない。姬は幼などもであるからであらうかと、宮は心苦しさのあまり、北山に法師を訪ね、一日法話を聞かれる。その夜の歸途、西の京のさゝやかな家の中から琴の音がたえ〳〵に聞える。車を降り、格子のかげから覗かれると、二三人の中に、如何にも美しい女がゐた。而もあけくれこがれてゐる姬君に生きうつしである。これは今は父母なき故按察大納言の女であつたが、宮には大臣殿のかしづく女としか分らない。はしたないと思ひながら、何某の中將と稱して文をやる。返事もしなかつた女も、やがて宮にお會ひする。四月、齋宮の代りとして念に姬宮は召される。兵部卿は世にもあらず悲しみ、例の女のところにも、とだえ勝ちになる。帝は御心配のあまり右大臣の女を娶るやうお勸めになるが、樣々言ひ逃れてお斷りになる。右大臣は大喜びで、結婚の用意に忙殺され、姬のおつきに女房を求める。例の女の乳母はこれを聞いて、つれない中將とやらを待つよりは宮仕を勸める。女は心に憂みを持ちながら、結局宮仕へを決心する。一方、宮は結婚の日が近づくにつれて苦しみも深くなるが、今こそ戀人の形見は例の女ばかりだと氣付いて、或る夜久しぶりで訪問される。少しやつれた美しい女をかくれ家に誘はれるが、女は泣くばかりである。愈々宮仕への日、中將から急用で行けない、明日は必ずと手紙が來る。女は別れの返事を出して參殿し、あぜちの君と呼ばれる。宮は返事に驚いて訪れるが、既に誰もゐない。悲しみの內に八月が來て結婚式があり、宮もやゝ慰められる。かくして運命のいたづらは再び二人を結び付けようとする。女は宮をしば〳〵見る。つく〴〵見ると、かの中將そつくりである。女は再び憂みの人となる。女の書きすさんだ歌から、宮もあぜちの君が彼女であることを知り、或る夜ひそかに局までお出でになる。やがてこの關係は女房達も氣付くやうになり、女は死ぬる藥もないかと歎く。宮は、或る隱れ家に匿いて心のまゝに通ひたいから用意せよと迫られる。姬のおもはくもつらく、出家を志した女は、艱難をうちあけ得ない。悲劇はかゝる性格に出發する。これ等に儒教的な道德觀念を見ることも出來ようが、我々は寧ろ浪漫的な當時の公卿生活の反映を、より多く見るべきだと考へる。併しこの物語を單なる模倣なりとして捨つべきでもなく、全篇を統一しようと試みる宗教的な心、はがゆいやうな消極的精神、敗北的な構想等、武士所談に地位を奪はれた公卿生活のみじめさを、いかにも謹まりよく短篇中に盛り上げた點は認められねばなるまい。さて女主人公が樽の尾に遁れてからの生活を「その後はなほ古よりあらまほしく惡しめつゝいとゞ行ひすましておはしけるとぞ」と飯道生活の浸入によつて解決して了つた。これで結末はついてゐるので、この物語は突本であり殘缺とは思へない。かゝる意識的な宗教的統一にも時代を反映してゐる。併しその取入れ方はあくまで受動的である。以上相當注目すべき點があるが、建設的發展的な價値は認めがたいから、所謂擬古物語の中に概括し得る作品である。

【參考】古物語類字抄（島川春村○近古小說解題（岩岳樓二郎○日本文學書目解說（山岸德平（分類講座））（朱雀）

評論　ひやうろん　雜誌【刊行】明治二十六年四月創刊（隔週刊行）【解說】當時比較的高級な雜誌を出してゐた女學雜誌社から發行した白表紙「女學雜誌」の改題で、同年の「文學界」（別項）に後ゝこと二ケ月にして生れたものである。執筆者としては、北村透谷が最も活躍してゐるが、その主なるものを擧げれば、「明治文學管見」「明治文學性質及希望」「解思餘錄を讀む」「熱意」「蛙聲・旅心・朝鋭」「萬物の聲と詩人」等で、中には透谷全集に洩れてゐるものもある。外には、若松しづ子・三宅花圃の創作、磯貝雲峰その他の新體詩に見るべきものが多い。（女學雜誌參照）

比翼錄春曾我菊　ひよくのはるのそがぎく　岡本八幕二十三場　時代世話物【作者】立作者は本屋宗七であるが、大部分は福森久助の作。【題材】「八重霞」の世界を加へた。【梗概】「一番目」（序幕）（箱根權現）梶野長兵衛・長庵の娘かしくの藤儀を助ける。（矢立杉）長兵衛、誤つて醫師長庵を射殺。（箱根山下）白井權八、主家のために本庄勘太夫を殺す。（梅澤）鬼王女房月小夜、賣きのために辻君となる。鬼王新左衛門、寺西閑心坊のだんまり。閑心の盜んだ五十兩の極印金、月小夜の手に入る。「二幕」（烟草茶屋）烟草屋藤兵衛、權八の軍鷄鬻籠、烟右衛門の宿に一泊。（隣家長庵內）父を失ひ、女房おれい娘かしくに、債金を責められ、藤儀の所を梶野長兵衛が助け、かしくの兄になる。（盜賊屋）權八、軍鷄鬻籠を破つて逃走、友切丸の箱、長兵衛の手に殘る。「三幕」（鬼王茶屋）曾我の箱王丸、箱根下山の折柄、神妙劍の一卷紛失に、箱王は盜賊の疑ひかゝり、鬼王新左衛門は箱王を茶屋の內に匿まつたが、それと知られて厳しい詮議、月小夜の拾つた金を盜つたのがもとで盜賊の疑ひかゝり、そこを附け込んだ寺西閑心坊が月小夜へ戀慕、鶏目の鬼王は四苦八苦の藤儀。月小夜、わざと鬼王から去り狀を取つて閑心坊と連れ立つ。（高台寺墓所）月小夜、色仕掛けにて閑心より神妙劍を奪はんとする。鬼王追つて來るを幕に欠へ落し、閑心、兩人を散々詰むうちに夜が明け、鬼王は閑心・月小夜を斬つて、神妙劍を取返す。（四幕）（立場）曾我の

【参考】 法華経第十五「如来寿量品」に〇〇〇〇。この「寿量」の「量」は「はかる」の意。

寿量（じゅりょう）

【名詞】 寿命の長さ。

【例文】 寿命を延ばす。

【作者】 [illegible]

【解説】 [illegible]

寿命（じゅみょう）

【名詞】 生まれてから死ぬまでの期間。

【例文】 寿命が尽きる

て平假名で書かれるところから、「いろは」歌の作者を、平假名の作者と誤つたものであらう。平假名は草體の萬葉假名を用ひてゐるうちに自然に生じたもので、或る一人の作ではない。（假名・文字・萬葉假名參照）

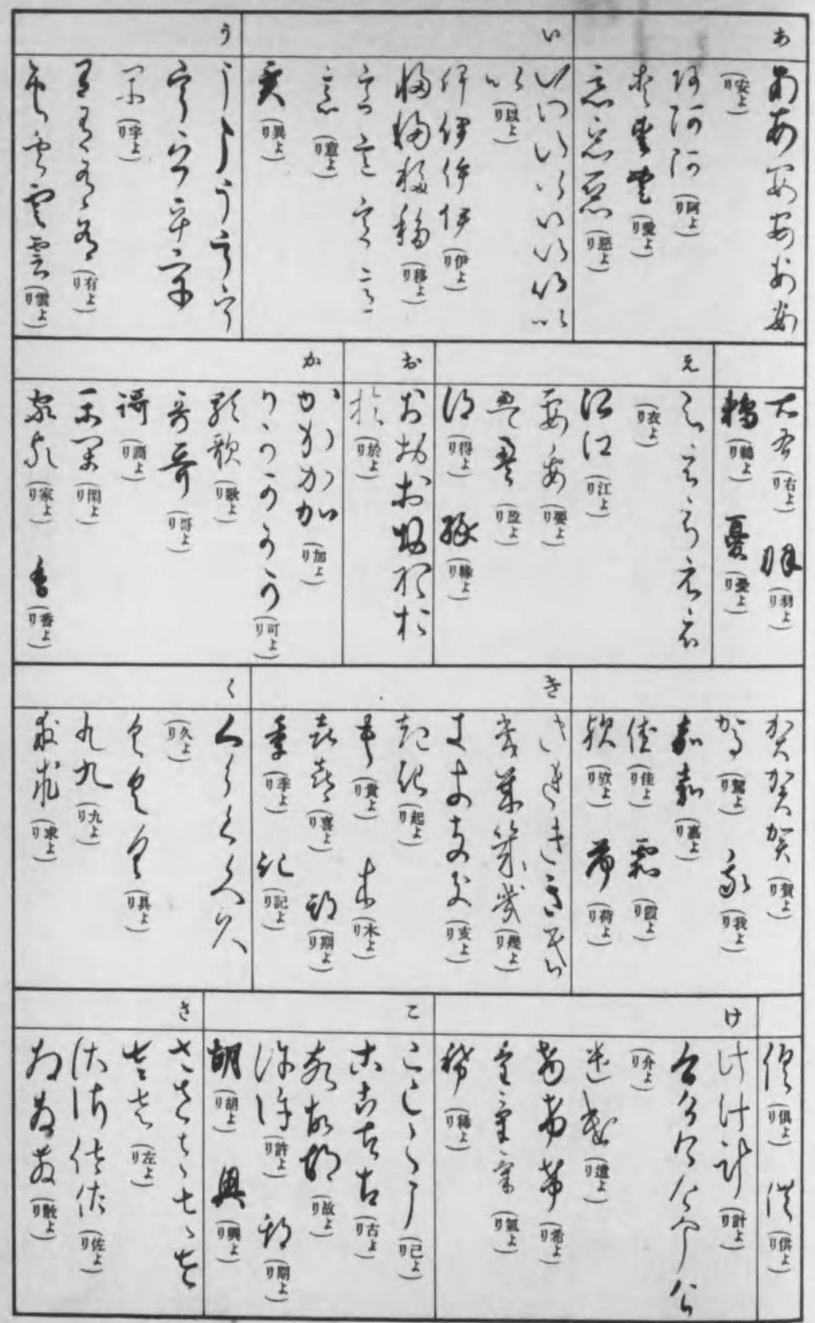
【參考】假字本末 仲信友 ○假字考 岡田眞澄 ○文藝類纂 神眞芳野 ○假字類纂 關根錦寶 ○かな字鑑 松下太壽 ○和漢名苑 藤孔愛 ○王朝時代の手習に就いて 吉澤義則（國語國文の研究所收）○語脈より觀たる日本文學 吉澤義則（國語國文の研究所收）○假名發達史序說 春日政治（日本國語大辭典所收）○平安朝時代の草假名の研究 尾上八郎（增訂本）○音圓及手習阿歌考 大矢透

ひらがな盛衰記 ひらがな せいすいき 浮瑠璃五段 時代物【作者】文耕堂・三好松洛・淺田一鬼・竹田小出雲・千前軒【名稱】角書に逆櫓松 矢箙梅とある。ひらがなは假名書きの意で、「源平盛衰記」を平俗に碎いた謂ひである。【興行】元文四年四月十一日初日、竹本座。【底本】七行本・十行本。名作浮瑠璃集（續帝國文庫）・浮瑠璃名作選下卷（有朋堂文庫）・名作浮瑠璃集上卷（近代日本文學大系）・浮瑠璃名作集上卷（日本戲曲全集）・名作浮瑠璃集（日本戲曲全集）第三十七卷に收む。【題材】義經の木曾義仲討伐から一の谷合戰までの史實を骨格とし、樋口次郎の孤忠と梶原源太の戀と義とを二つの焦點として脚色。

【梗概】〔一段〕（船手明神）義仲討伐の院宣を受けて、義經は伊勢路を京に進む。梶原平三景時は日の丸の軍扇を鳥羽殿に擬らへ、これを船落さうとするが却つて源氏の白旗を射、自殺せんとして佐々木高綱の取なしで命助かる。（義仲館）範頼・義經の大軍が都に迫るので、義仲は死を決する所へ巴御前が馳せ歸り、宇治川の敗戰を報じ、義仲に隨ひて出陣する。屋元お筆は源氏譜代の臣鎌田政清の弟隼人の妻であるが、義仲の室山吹御前と嬶子駒若丸とを伴ひ桂の里の親里に落ちのびる。（粟津）巴は和田義盛と闘つて捕へられ義經の面前に曳かれる。義經は實檢に供へられた義仲の首を逆臣と罵つて打擲するので、巴は夫の惡逆が平家に油斷せしめて三種神器を取返す方便であつた事を辯ずる。果して兜の中から證書が現はれるので、義經は涙を溜し、懷姙中の巴を義盛に預ける。〔二段〕（桂の里・梶茸屋）梶茸屋の山吹と駒若とを長持の中に匿まつてゐるが、梶原の臣番場忠次が襲ふので、看板用の猿を若君と欺き虎口を脱して落ちる。（梶原館）景時の留守宅では、嬶子源太景季の誕生祝ひの準備中。二男の平次景高は兄の戀人腰元千鳥に横恋慕して假病を使つて家に留まつてゐる。宇治川で佐々木におくれた景季は父の怒に觸れ館へ詰り返されて來る。平次は兄に先陣爭ひの樣子を物語らせてこれを辱め、切腹させようとする。（義經館）源太は父景時が佐々木のために射手明神で命を救はれた恩に報いるためであつたと母に明かし死なうとするが、母の情で頼朝から拜領の產衣の鎧兜を與へられ勘當される。鎧櫃の中からは變する千鳥が現はれるので源太は感泣する（船宿場）。〔三段〕「道行若葉・組」山吹御前・駒若丸・お筆・鎌田隼人の流行。（大津旅籠屋）一行は巡禮の老婆とその孫・孫と相宿するが、夜中番場忠太が踏み込むので脫出する。（義の館）隼人は新死し、若君は首を討たれるが、それは取違へた巡禮の兒であつた。山吹御前も自絕えるので、お筆は屍を從に載せて逃ぶ（笹引き）。（船島船頭權四郎住家）今日は、亡き聖の三回忌に集つた人々に、老婆は孫權松を取違へた仔細を物語る所へ新しく入聖となつてゐる松右衛門が梶原の館から戻つて來る。この家に傳はる遺櫃の立て方を手練の上義經の召船の船頭に取立てられる事になつたのである。折柄腰元お筆が亡き權松の笈摺に記した所を目當てに尋ねて來て、若君を返して呉れと頼むがその詞の端が聖權四郎の一徹な氣持を激せしめ、首にして返さうといきまく。聖松右衛門はやむなく木曾の遺臣樋口次郎兼光であると明かし、血を分けぬ子權松が己が子となり、國らずも身代りとなつて忠義を立てた事を喜び、老婆を慰めるので、權四郎の怒りも解け、お筆は若君を樋口に託し、津の國に勤奉公する妹千鳥を呼ねて行く。權四郎父子夫婦は悲しい遺品の笈摺を供奠する。（演技）梶原の問者の船頭共は遺櫃の穿鑿に事寄せて樋口を捕へんとする。權四郎が品山重忠を案内して來るので樋口は扇を鳥るが、それは若君の命を助けるために權四郎の計らひであつた。樋口は潔く重忠の刎にかゝる（逆櫓）。（四段）（香島の里・辻法印住家）腰元千鳥は、神崎の廓に身を沈めて梅ケ枝と言つてゐるが、辻法印に寄寓する源太景季は、梅ケ枝に預けた產衣の鎧を着て、一の谷の合戰に馳せ參ずる心算であるが、廓へ行く衣服を質請ける金子に窮した末、法印を偽佛慶に仕立てて大物浦の百姓を欺き、來鎧を強奪する。（神崎手年屋）お筆が梅ケ枝を訪れて、父平人の仇を討たうと語る。源太が鎧を受取りに來るが、梅ケ枝は突出しの目から身錢を切つて源太を斧にして居り、鎧は三百兩で入質されてゐるので、手水鉢を無間鐘になぞらへて約束で打たうとすると、二階から三百兩の金が投げられる（無間鐘）。お筆は父の仇は梶原景時ゆゑ、源太と縁を切つて共にこれを討たうと迫る。梅ケ枝を身請けしようと大盡に化けて入り込んでゐた源太の母延齡が現はれて、二階から金を投げた仔細を明かし、身を殺して源太・梅ケ枝を助けようとするので、お筆は釋然と和解する。梅ケ枝は紅梅の枝を夫の旅にさして勇ましく出陣させる。（五段）（生田森）景季は勇戰して功名を立てたので、父景時の勘當が許される。畠山は權四郎・駒若丸を伴つて、樋口を義經の前に曳く。番場忠次は、お筆・千鳥に討たれ、樋口は助命されたが、梶原景高を打ち、自ら首を刎ねて死ぬ。

【脚色】三段目の「逆櫓」と、四段目の「無間鐘」とが眼目である。前者では權四郎といふ頑固一徹で両も奪良な一個の老船頭を拉し來り、その陋巷の一凡夫としての心的推移を巧みに描いて、主從の義・義父・義子の義と情との葛藤をして愈々生彩あらしめてゐる所は、浮瑠璃の到達し得る唯一最高の境地を示してゐるものと見る事が出來る。又後者「無間鐘」の件では、享保十六年江戸中村座の「例情噺引名護屋」に於て、瀬川菊之丞の葛城が大好評を博した演出を巧みに攝取し、吉田文三郎に梅ケ枝の人形を遣はせて、效果を揚げてゐる。（無間鐘參照）

【影響】本曲は屢々上演されたが、歌舞伎にも移されて二段目の「勘當場」と三段目の「逆櫓」とは、重要な曲目となつて種々の洗練された型を遺してゐる。「逆櫓」の松右衛門は梅玉歌右衛門と海老藏との型が芝翫と九代團十郎とに傳はり、今日では吉右衛門がそれ等を集成してゐる。また「無間鐘」は本曲上演以前に既



新（リ新ノ上） 狭（リ狭ノ上）	し		す
仲（リ仲ノ上） 作（リ作ノ上）	ししししし		すすすすす
世（リ世ノ上） 遂（リ遂ノ上）	志（リ志ノ上）		春（リ春ノ上）
	事（リ事ノ上）		須（リ須ノ上）
	新（リ新ノ上）		数（リ数ノ上）
	師（リ師ノ上）		寄（リ寄ノ上）
	所（リ所ノ上）		仮（受の略字より）
	四（リ四ノ上）		

せ	そ	た	ち
せせせせせ	そそそそそ	たたたたた	ちちちちち
世（リ世ノ上）	楚（リ楚ノ上）	太（リ太ノ上）	知（リ知ノ上）
勢（リ勢ノ上）	所（リ所ノ上）	多（リ多ノ上）	地（リ地ノ上）
瀬（リ瀬ノ上）	盛（リ盛ノ上）	堂（リ堂ノ上）	
	満（リ満ノ上）	当（リ当ノ上）	
		田（リ田ノ上）	

と	て	つ	
ととととと	ててててて	つつつつつ	
止（リ止ノ上）	天（リ天ノ上）	津（リ津ノ上）	
	帝（リ帝ノ上）	徒（リ徒ノ上）	
	傳（リ傳ノ上）	都（リ都ノ上）	
	程（リ程ノ上）	頭（リ頭ノ上）	
	豆（リ豆ノ上）		
	登（リ登ノ上）		

な	に	
ななななな	にに	
奈（リ奈ノ上）	仁（リ仁ノ上）	
那（リ那ノ上）	弥（リ弥ノ上）	
難（リ難ノ上）		
南（リ南ノ上）		
名（リ名ノ上）		
楽（リ楽ノ上）		

東（リ東ノ上）	度（リ度ノ上）	土（リ土ノ上）	帝（リ帝ノ上）
耳（リ耳ノ上）	刀（リ刀ノ上）	戸（リ戸ノ上）	兎（リ兎ノ上）

	ぬ	ね	の
丹（リ丹ノ上）	ぬぬぬぬぬ	ねねねねね	ののののの
二（リ二ノ上）	奴（リ奴ノ上）	年（リ年ノ上）	乃（リ乃ノ上）
宇（リ宇ノ上）	努（リ努ノ上）	曽（リ曽ノ上）	能（リ能ノ上）
	留（リ留ノ上）	寝（リ寝ノ上）	農（リ農ノ上）
		根（リ根ノ上）	野（リ野ノ上）
		熱（リ熱ノ上）	

ふ	ひ	は	
ふふふふふ	ひひひひひ	はははははは	
不（リ不ノ上）	比（リ比ノ上）	波（リ波ノ上）	
	飛（リ飛ノ上）	者（リ者ノ上）	
	非（リ非ノ上）	盛（リ盛ノ上）	
	日（リ日ノ上）	八（リ八ノ上）	
	火（リ火ノ上）	平（リ平ノ上）	
	比（リ比ノ上）	顔（リ顔ノ上）	
	悲（リ悲ノ上）	乗（リ乗ノ上）	
		破（リ破ノ上）	
		秀（リ秀ノ上）	
		羽（リ羽ノ上）	

ま	ほ	へ	
ままままま	ほほほほほ	へへへへへ	
末（リ末ノ上）	本（リ本ノ上）	部の旁より	
	保（リ保ノ上）	遍（リ遍ノ上）	
	報（リ報ノ上）	篇（リ篇ノ上）	
	奉（リ奉ノ上）	逢（リ逢ノ上）	
	徳（リ徳ノ上）	倍（リ倍ノ上）	
	寛（リ寛ノ上）	経（リ経ノ上）	
		散（リ散ノ上）	
		変（リ変ノ上）	
		辺（リ辺ノ上）	
		遍（リ遍ノ上）	

む	み		
むむむむむ	みみみみみ		
武（リ武ノ上）	美（リ美ノ上）		
無（リ無ノ上）	三（リ三ノ上）		
天（リ天ノ上）	見（リ見ノ上）		
年（リ年ノ上）	満（リ満ノ上）		
舞（リ舞ノ上）	身（リ身ノ上）		
	民（リ民ノ上）		
	簡（リ簡ノ上）		
	万（リ万ノ上）		
	萬（リ萬ノ上）		
	満（リ満ノ上）		
	見（リ見ノ上）		
	麻（リ麻ノ上）		
	摩（リ摩ノ上）		

に明治三十九年十月、「新潮」に発表された。「文学者」は、「文学者」の題名で、明治三十九年十月、「新潮」に発表された。「文学者」は、「文学者」の題名で、明治三十九年十月、「新潮」に発表された。「文学者」は、「文学者」の題名で、明治三十九年十月、「新潮」に発表された。

手賀沼　てがぬま　千葉県北部の沼。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔　てがぬまはん　千葉県北部の手賀沼の畔。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人　てがぬまはんのひと　千葉県北部の手賀沼の畔の人。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻　てがぬまはんのひとのつま　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子　てがぬまはんのひとのつまのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

手賀沼畔の人の妻の子　てがぬまはんのひとのつまのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ　千葉県北部の手賀沼の畔の人の妻の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子の子。【作者】手賀沼畔に住む。【歴史】明治三十九年十一月、「新潮」に発表された。

**手賀沼畔の人の妻の子

的指導者として働いた。後、森田草平と戀愛關係を生んだが、間もなく解消され、大正二年冬、若き燕であつた洋畫家奥村博史と結婚した。「青鞜」は五年の後廢刊したが、日本の婦人文化運動として多くの寶義を與へてゐる。大正八年冬市川房枝と共に新婦人協會を起して、婦人參政運動に當り、治安警察法第五條の修正、婦人の政治的集會參加等に成功した外、姦淫法の改正についても提案した。その後同會を脱して昭和五年春無產婦人藝術聯盟に加盟し、全く文藝の女性として母性擁護に關する論文その他を發表してゐる。【著書】「現代と婦人の生活」らいてうの言葉」「現代の男女へ」「闘窓にて」等がある。　〔高須〕

平出修（ひらでしゅう）　考證家【號】鉄嶺・風雅堂史・今樵むかし男・二山・井折戸のあると等【生歿】明治二年八月二十一日名古屋伊倉町に生れ、明治四十四年十二月十九日東京市小石川區久堅町に歿す。享年四十三【墓所】名古屋市東區東門前町西運寺【法名】橋井院倫林風雅居士【閲歴】代々醫を業とし、祖父順益（風雅堂、又泥江樵隱）が讀書を好み、文學者と交り、珍書寶集を樂しみとしたので、その影響を受け、父順良（風雅堂）の命で、初めは醫學の事に從つたが、その歿後文學方面に才能を揮つた。幼時既に讀書癖があり、長ずるに及んで國史稗史の類を好み、又古器・珍籍・草木等を蒐めるのを喜んだ。愛知縣立瑞常中學校を經て、明治二十三年縣立醫學專門學校（名古屋愛知醫專）を卒業、翌年上京して東京帝大文科大學國文學科に選科生として入學、勉學大に努め、風雅稗史と號して雜誌「史海」に論文を發表し、盛んに田口鼎軒と腕鬪したりした。二十七年卒業、翌年文部風に任じて圖書課に勤務し、教科用圖書の檢定及び審査に當り、傍ねて文科大學史料編纂助員となつて江戸時代國學者の傳記資料を蒐集した。三十三年史料編纂員となり、文部屬を兼ねて小學校修身教科書起草委員を嘱託され、三十七年第一臨時教員養成所教授となり、更に文部編修官に轉じたが、四十一年、腦症を病み、發語機能と右手の自由を失つたので休職となり、爾來病臥すること四年の後歿した。學を忘るを愛して娶らずに終つた。

【著作】日本風俗史四册（風雅博士と合著、明治二十八年東京堂）○東京風俗史三册（明治三十二年富山房）○藏計一册（明治四十二年、文昌閣）○近古小說解題（別項）○稗編集一册（遺稿集、大正二年）○室町時代小說集一册（明治四十一年博文館書院）。

【業績】その一生は奇人と云はれた程、文字通り篤學の士を以て終始した。殊に晩年不治の床にある際にも終に筆硯を廢せず、自由を失つた右手の代りに左手の使用を練習し、親友藤岡作太郎博士の援けありとは云へ、「近古小說解題」（別項）を著はし、近古小說研究の大道を拓いた。更に「史海雜誌」「史海」「帝國文學」等の諸雜誌を通じて頻繁に發表された諸々の史學研究及び考證等は、その多方面に亙る事、引證該博なる事などに依つて、未だに示唆に富むものが多い。　〔土井〕

平林初之輔（ひらばやしはつのすけ）　批評家【生歿】明治二十五年十一月京都府竹野郡に生れ、昭和六年六月十五日、佛國パリに留學中に歿す。享年四十二。【閲歴】大正六年早稲田大學佛文科卒業、やまと新聞社に入社、大正十一年「種蒔く人」同人となり、國際通信社に入る。十五年「文藝」の主幹となり、昭和二年、同誌廢刊と共に博文館を退く。その後、早稲田大學佛語の助教授たる傍ら、文藝批評家として盛んに活躍し、諸雜誌に寄稿した。【著書】無產階級の文化（大正十二年）○文學理論の諸問題（昭和四年）。その他、評論數十篇、科學文獻及びポーその他の翻譯並に探偵小說の創作十數篇がある。死後、遺稿評論第一卷が平凡社から出版された。

【批評】初期プロレタリヤ文學が、我が國に發生した大正十年頃から、プロレタリヤ文學の理論的指導者として、第一線に目覺しい活躍をつゞけ、理解力の廣汎と頑强の透明とによつて、つぎ〳〵に提出した藝術上の諸問題は、つねに文壇批評界の理論鬪爭の中心とならずにゐなかつた。文學誠亡論の如き、映畫論、文學藝術の新樣式論、文藝批評論その他、いづれも獨創的な見界で、闊野が廣く、論旨が清新であり、それに明晰な論理と、快爽な修辭が、一般の注目を呼んだ。特に主力を注いだ別村は、昭和四年に於ける「政治的價値と藝術的價値」の二元論で、當時の評論家陣營で、この問題に論鋒を觸れない者が一人もなかつたほど、華々しい論爭の盛觀を極めたが、これがために、プロレタリヤ文壇からは、反動思想家として非難されるやうになり、自身また一種のスランプ的憂鬱に陷り、考察の轉換を計らうとしたが、佛國留學であつた。當時の文壇に、科學的批評の新生面を拓いたばかりでなく、科學趣味の大衆化に對しても、功績は記錄すべきものがある。　〔千葉〕

蛭兒（ひるこ）　藤寄論【英】Proportion.【解說】對象の部分と部分、部分と全體との數量的關係に於て美的形式が條件づけられるとする時、比例は美的形式原理とされる。ツァイジングの「黄金截」（別項）はその一つである。人體表現或は建築又は繪畫に於ては、比例の關係によつて最初の構成的形式統一を企畫することが重要であるとされる。　〔村田〕

實蔭（ひろかげ）　語學者【號】白井【生歿】未詳。但し幕末の人。【閲歴】未詳。但し黒川春村に就いて國語を學んだ人であるが、殊に漢字の音韻には敏る造詣が深かつた。その著「音韻假字用例」（別項）は、宣長の「字音假字用格」（別項）を徹底的に補增訂正したもので、「字音假名遣」は、本書に至つて大體完成したと言ふ事が出來る。又春村の「音韻考證」（別項）は、實蔭に依つて增補せられた所が甚だ多い。なほ東條義門の「於乎輕重義」の黒川本と言はれて一般に行はれてゐるものは、實蔭が義門自筆の草稿本を筆寫したのを春村が人をして寫さしめ、それから諸方に轉寫せられたものである。　〔橋田〕

弘賢（ひろかた）　國學者【姓名】屋代氏。名は初め詮虎、次に詮賢、次に弘賢、晩年詮丈に改めた。一般には弘賢を以て行はれてゐる。通稱初め太郎吉、後太郎。【號】輪池【生歿】寶曆八年江戸に生れ、天保十二年（一八四一）閏正月十八日、神田明神下の家に於て歿す。享年八十四。【法名】輪池院大義詮丈居士【墓所】本郷白山妙清寺【閲歴】弘賢の父は忠太夫詮房といひ、十五俵二人扶持の幕府の御家人であつた。弘賢は七歳にして幕府の右筆森尹祥に入門して筆道を學び、後また山本北山に漢學を、塙保己一に國學を學んだ。安永四年父の死によつて家を相續し、天明元年に西丸奥所に出仕したのを初めとし、本丸附の書役となり、柴野栗山の下に國書の編纂に從ひ、寛政四年にはまた栗山に從つて西上し、京都並に大和地方の古社寺の舊記を調査した。この時の紀行に「道の幸」がある。ついで五年には幕府の右筆に擢げられ、享和元年には永代御目見の列に加へられ、その祿も百五十俵を賜はる身となつた。そしてその間には、「落穗集」「續落穗集」「古今要覽稿」（別項）等の編纂にも當つた。「古今要覽稿」は未完成のまゝに終つたが、弘賢の畢生の大著述とされてをり、現在に於ても學者の益を受るところが少くない。その外にも、弘賢は塙保己一を輔けて正續群書類從の編纂刊行その他にも從事し、その方面に於ても功績の認むべきものが多い。【著書】代表的のものゝみを掲げる。○古今要覽稿（別項）○道の幸三卷（名所和歌書所收）○參考伊勢物語二卷（稗）○代氏傳家抄一卷（稗）○高野大師書訣注一卷（稗）。

弘賢筆蹟

屋代弘賢

【學風・性格】弘賢は姿性强記、その學問は該博を極め、「古今要覽稿」の如き類書の編纂には、最適任者であつた。人と爲り誠實謹勉、老いても孜々として倦むところがなく、長上からの信任も厚かつた。またよく後進を庇護し、平田篤胤の如きも弘賢を以て終生の恩人とした。弘賢の趣味は典籍から引いて古器具等にも及び、ことに典籍は蒐集五六萬卷に及び、當時に於ける藏書家の間一であつた。その不忍文庫（別項）の印記を有する書册は、今愛書家の間に重んぜられてゐる。

【參考】源弘賢翁の小傳　小杉榲邨（國書刊行會本古今要覽稿第六所收）○屋代弘賢　森銑三（歴史と國文學昭和八ノ一一二）　〔森〕

廣前（ひろまえ）　故實家【姓名】内藤氏。初名廣庭【號】實木園【生歿】寛政三年に生れ、慶應二年（一八六六）九月十九日歿す。享年七十六【閲歴】幕府に仕へ御先手同心であつたが、幼少から書を好み、最も國史・律令に通じた。人と爲り温和强記、壯年職を辭して志を好む所に專心することになつた。文政年中尾張侯の命に依つて裏松光世の大著「大内裏圖考證」（別項）の校訂をした。その著「大内裏圖」は、この時考證の圖が切圖のみなのを歎いて製作したものであつた。又紀州新宮の水野忠央が「丹鶴叢書」（別項）を編纂するに與つて、「八代集作者傳」「國史於遺」を著はした。又同家で以前に刊した「壁車分區」の訂正を爲さんとして、未だその功を終へないうちに歿した。伴信友・長澤伴雄・塙保己一・黒川春村等と親交があつた。【著書】大内裏圖九帖（天保十一年三月刊）。故實叢書第二編所收、大内裏圖・八省院圖・豐楽院圖・武德殿圖・神祇官圖・太政官圖・大學寮圖・園言院圖・京城略圖である。故實叢書の圖は、神祇官圖・園言院圖・太政官圖・武德殿圖を合せて一帖とし、那合六帖としてある。　〔石村〕

廣澤輯藻（ひろさわしゅうそう）　歌文集　四卷【著者】望月長好【刊行】享保十一年【成立】象山ひさゆきの序文によれば、この家集は長好の自撰で、その歿後、唯元これを傳へ、なほ遺を拾うて增補し、「廣澤輯藻」と名づけた。ついで序文の筆者の師生翁に傳はり、師より傳へられたのを、刊行したものであると云ふ。【内容】初三卷を歌集として、四季・戀・雜に分ち、終りの一卷は文集で、歌序・記・詞等があり、なほ雜の歌も集められてゐる。寛文三年九月下旬、或は萬治四年二月下旬等の作詞の年代を記したものもある。歌風は輕妙にして新味があり、地下派の歌風のよい方面を代表し、技倆に於ては當時の歌人を抜いてゐる。作例を次に擧げる。

春なれや霞ひさまにはなけれども雲山の端ぞまづ鶯さそふ夜半のあらしの山寺に川西さよふ月を見るかな

【附記】自筆本の家集も傳はり、「長好師家集」（一名、鶯泥）○（別項）とも云ふ。十八卷十册本、卷毎に跋出の年代を擧げた。又、桂雲集類題は、安永九年長好の百回忌に、有賀長敎等が「廣澤輯藻」や遺稿等より歌を類題としたもので、巻末に文章篇篇を附し、天明元年に上梓した。　〔佐佐木〕

廣足（ひろたり）　國學者【姓名】中島氏。初名惟清・春臣・廣川。通稱喜太郎、後、太郎【號】優岡・田鶴・蛙齋【生歿】寛政四年三月五日に生れ、元治元年（一八六四）正月二十一日歿す。享年七十三【法號】春峰院朝陽詠花居士【墓所】熊本縣鹿兒島郡春日村萬日山【閲歴】廣足は中島五郎平の子、家は肥後藩士、秩祿二百石を食んだ。十一の年父歿して家を嗣いだが、二十四五歳にして病氣のため隱居し、家を妹に讓つて專ら國學を研鑽し、長瀬眞幸に就いて學んだ。三十歳頃長崎に遊び、その地に留まること三十餘年、來り學ぶ者極めて多かつた。安政四年大阪に出でたが、文久元年薨命によつて、召されて國學師範となつた。眞幸の外、本居大平に書を通じて學を質した。伴信友・横井部・本居内遠・近藤芳樹等、交遊極めて廣い。【著作】優岡家集後編共六册（鹿兒島郡の序がある）○優岡長歌集二册○優岡文集二册○しのすだれ一册（歌集）○優岡隨筆二册（別項）○環浦集自初編至三編（歌文編、天保十一年より）○詞の玉緒補遺六册（安政六年）○詞八衢補遺二册（安政四年）○玉鬘窓の小篠五册（幕末七年）○增補雅言集覽五十七册○片糸一卷（別項）○土佐日記地理辨一册○檜垣嫗家集補註二册（天保六年歿）○かしのくちば一卷（後出）○水江物語一册（天保二年）○浦島の傳記を和文に記す○歴木辨一册（天保六年）○彼鎌一册（幕末四年）。その他數術に關するもの、蒐行記等著作等多い。　〔以上森〕

【歌風】これといふ特色も認められないが、温雅平明で、少しも晦澁のあとがない。それに文法家といふものは、語法に囚はれて案外情

屈した調子の歌を作るものであるが、彼のは流麗で、歌らしい歌といふ調點はあるが相當感味を持つてゐる。

却り花の咲きちる岸をとめくれひ川瀬のなみに小鮎きほしる（卯月ゆかり・鮎川のほとりにて）

千町田にうつる夕日の影きえてはるかになりぬさ音ごと聲（夕早蕨）

などは、多少感覚的の趣がないでもないが、概して自然味のあるものである。氣品もあつて卑しくない。時代的に見て水準を超えた作品といふことは出來よう。

〔以上田邊〕

【國語學上の業績】國語學は唱ど獨學であるが、その宗とするところは本居父子の學で、これを忠承して、不備を補ひ誤を訂正した。その學問は獨創的な點は少いが、本居父子の學を大成した點に於て、東條義門（別項）に次いで大なる功績を遺してゐる。廣足は手爾手波語格を說くに當つては、當時一部の國語學者の間に行はれた語源的研究に重きを置かず、多くの例證を熟知することを先とした。その著「詞の玉緒補遺」の中に、「氏爾手波語格は本の原意を說くことは暫くおきて、唯古人の使ひなしたる趣をよく味ひ知るに若かず。そをよく味ひ知るには、例を多く見渡すに如かず云々」と云つてゐる。これ廣足の學風を簡單に言ひ現はしたものである。その國語學上の著述には、「詞の玉緒」を增補訂正した「詞の玉緒補遺」六卷（一名手引草）。別項「詞の玉緒」參照）。「詞八衢」を增訂した「詞八衢補遺」二卷（一名「雅語考」別項「詞八衢」參照）。「玉あられ」を增訂した「玉霰窓過小錄」五卷（別項「玉あられ」參照）。「雅言集覽」を增補した「增補雅言集覽」五十七卷（別項「雅言集覽」參照）。「片糸」一卷（別項）及び「かしのくちば」一卷等がある。「かしのくちば」は、「ばかり」と云ふ語はホドの意、ノミの意、ヤクの意に通ふことがある事を、多くの用例に依つて論證したものである。これ等の書は何れも前記の如く、確實な例證に依つて歸納的に研究してゐて、頗る信賴するに足るものである。

〔以上田邊〕

中島廣足（鶴田卓次郎氏藏）

【參考】脫稿先哲像讚　武藤嘉男編

廣津和郎（ひろつ　かずを）

小說家・評論家【閥歷】明治二十四年十二月五日東京市牛込區矢來町三番地に、明治文壇の書生肌廣津柳浪（別項）の次男として生れた。父が顏に居をかへた爲め、牛込赤城小學校を振り出しに、赤坂小學校・南山小學校と轉々した。四十二年麻布中學を經て早稻田大學文科豫科に入學、同級に谷崎精二（別項）・國枝史郎等がゐた。その頃からチエホフの飜譯などを初め、大正元年の九月から舟木重雄・光用穆・相馬泰三（別項）と日高只一・峰岸宗作・萬內雲祿（別項）等と同人雜誌「奇蹟」を創刊した。大正二年四月、早稻田大學卒業、同時に「奇蹟」も廢刊された。翌三年四月、補充兵敎育召集のため、野砲兵第一聯隊に入營、除隊後、東京每夕新聞社に入社。四年、每夕新聞社を退社し、以後主として飜譯によつて衣食した。この年結婚したが、この頃より翌大年にかけて、茅原華山の主宰した旬刊雜誌「第三帝國」及び「洪水以後」などに文藝評論の筆を執り、爾來評論家として確乎たる地歩を占めた。この年十一月、父を迎へて相州片瀨に家を持ち、十二月鎌倉に移つた。六年十月、「中央公論」に「神經病時代」を發表。この文壇的處女作によつて作家的地位を確立した。八年、不幸な結婚による家庭生活は愈々面白からず、殆ど家庭に落ち着かず、半ば放浪的な生活に入つたが、翌九年、遂にこの結婚生活を破壞した。十二年藝術社を起して武者小路實篤全集の出版を企てて失敗し、九月の大震災に遭つた。十五年、松澤はまと東京馬込に一家を構へたが、この前後頃より時代思潮の流動に注視し、やゝ社會的に目醒め始めた。昭和三年には父柳浪を喪つた。【著作】〔長篇・短篇創作集〕神經病時代○二人の不幸者○握手○死兒を抱いて○お光と千鶴子○明るみへ○朝の影○少女○ひとりの部屋○秋の一夜○薄暮の都會○寒桐（未完）○女給等。〔戲曲集〕生きて行く〔評論・感想集〕作者の感想○ペンと鉛筆。〔飜譯〕女の一生（モウパッサン）○貧しき人々（ドストエフスキイ）○接吻外八篇（チエホフ）○六號室（同上）○コサック（トルストイ）○クロイツエル・ソナタ（同上）○サロメ（ワイルド）○マノンレスコオ（フレヴオオ）○蔦鬼の友（モオパッサン）等。〔選集〕現代日本文學全集（第四十八卷）○明治大正文學全集（第八卷）等。

【作風】素直で、敏感で、人生觀照と理解とに鋭く深く、如何にもヒユウメエンな感じに富み、物判りのよい作家ではあるが、指導的力に乏しい。殊に初期の作品には、鋭敏な神經からくる憂鬱と焦燥に彩られた悲劇的世界が描かれてゐる。兎に角、作家としては餘り優れた手腕を發揮しなかつたが、評論家としては、獨自な人生觀的要求もあり、ただ作品に追證するだけでなく、指導的名言說をなし、新現實主義評壇の雄を以て目されてゐた。

廣津柳浪

廣津柳浪（ひろつ　りうろう）

小說家【本名】直人（なほと）・幼名金次郎【別號】蒼々園【生歷】文久元年六月八日、久留米有馬藩士廣津俊藏（後に弘毅）の次男として長崎市材木町に生れ、昭和三年十月十五日東京大森木原山にて歿す。享年六十七【閥歷】明治二年、九歲の春、漢學修業のため肥前國田代在の酒井村へ行つて二年近くゐた。この間に「補勤功記」や「神稻水滸傳」を讀んだ。そのうち、父が外務省の官吏となつて上京したので、母と共に久留米に移り、明治六年、生地長崎に移つて最初の小學校尙明小學校に入學した。翌年十四歲で、東京へ出て麴町番町小學校に學んだ。成績優るよく常に主席だつたが、至極腕白で、今校の生徒を壓服してゐた。同窓には野口寧齋（別項）がゐた。この頃、馬琴の作などを讀んだが、殊に唐本の「三國志」を愛讀した。父が朝鮮經營に心を注めてゐた爲めに、家には軍人の出入が多く、野津大佐（後に大將）・大沼少佐（後に少將）等、特によく來り、勤めらるゝまゝに軍人たらんと、幼年學校入學を志望したが、病氣のため時機を失して了つた。明治十年番町小學校卒業、父の長崎時代の警業を嗣がうとして外國語學校獨語科に入り、やがて大學醫學部豫備門に入り、津雄吉博士等と同窓だつた。併し醫學には趣味を持たなかつたので、成績極めて惡く、加ふるに明治十一年に至り肺尖加多兒に罹り、病後の衰弱甚しく修學に堪へなかつたので廢學し、商人たらんとして五代友厚に從つて大阪に行つた。そして大阪商法會講所で書記のやうな事をしてゐたが、二年にして東京に歸り、翌春農商務省に入り、官吏生活を續けること五年に及んだが、笠翁の「十種曲」や「桜花扇傳奇」や「紅樓夢」等を讀んだのも、又相次いで父母を喪つたのも共にこの間の事に屬する。官吏を辭めてからは二年近くも地方を放浪した。明治二十年即ち二十七歲の六月に至り、友人山內愚仙の勸告に從つて、初めて小說を書いて東京檢人新聞紙上に連載した。「女子參政權」「壓中樓」が即ちこれで、文壇的生涯に入つた第一歩である。翌年、新興の書肆博文館に入社し、雜誌「大和錦」（別項）の編輯に從ひ、その初號には「ふたおもて」と云ふ言文一致體の小說を發表した。更にその翌二十二年には、尾崎紅葉と相識つて硯友社（別項）の同人に加はり、「我樂多文庫」（別項）に執筆した。間もなく博文館の方は館主と衝突して辭め、その後讀賣新聞社に入社して、雅號の變更を强ひられてただ一日で辭職したといふ逸話がある。二十八歲の年蒲池鶴厚の長女壽美子と結婚、翌年長男俊夫生れ、三十一歲の時次男和郎が生れた。明治二十二年紅葉の勸めに應じて「新著百種」（別項）の第六編に、小說「殘菊」（別項）を發表するや、世評喧騰、彼の名は盛んに喧傳さるゝに至つた。爾後、「五枚橋姿」「いとし子」「糸のみだれ」「蟲さん」「變目傳」（別項）等の作を經て、二十八年に「黑蜥蜴」（別項）を出すや、當時の批評家が求めてゐた深刻小說の代表作として文壇の讚辭を一身にあつめた。次いで、「今戸心中」（別項）出で、「河內屋」（別項）が出づるに及んで、文名は絕頂に達し、紅葉・露伴・一葉以外、彼に追隨する者なしと稱せられた。後、「奇生觀」（別項）「異りだね」「青大將」等の作があるが、その後の作品では「骨ぬすみ」「紫綾布」「二人やもめ」等が最も有名である。三十一年二月より二六新聞に長篇「心の火」を連載三百回餘に亙る。所謂通俗物ならぬ新聞小說の唯一のもので、後に「人」と改題して出版した。明治の末期に至つては、醫世的傾向次第に强く、創作的感興唱と消失して筆を執らなかつた。大正三年六月肺を病み、翌年初秋巢鴨のために名古屋に在る長男の許に行き、後、知多半島師崎町の海濱病院にて療養。その後、各地に轉々したが、昭和三年十月東京大森に於て歿した。門生に中村春雨（壽藏）・永井荷風等がゐる。

【批評】彼の作品は、多く柳浪叢書や現代日本文學全集第七卷に收められてゐる。柳浪は明治中期紅葉の寫實主義、露伴の浪漫主義以外に、確然たる自己の境地を開拓した。それが所謂「深刻小說・悲慘小說」である。彼は出世作「殘菊」以來、唱と例外なく陰慘な世界を描いてゐる。自然主義は人間の獸性を取扱ふことを目的の一つに數へてゐるが、彼は早く「蟲さん」を書いて、その先驅をなしてゐる。淫奔な妹の事を書いた「兄の煩悶」などは、後に起つた自然派の作品そのまゝと云つていゝ。文壇の風潮が未だ草雙紙臭味の淺薄な浮華な觀察描寫にある頃、すでに懷疑の目を人生に向けて、その暗黑面や醜惡な事物を摘出した。柳浪の作品を讀んで先づ目につくのは、白痴・不具者・醜惡等の多い事である。「蟲さん」は、心も體も不具で白痴であるし、「變目傳」の主人公も醜惡な上に一寸法師である。「黑蜥蜴」の女主人公は黑痘痕で且つ半目である。「今戸心中」の傳吉とても輕からぬ痘痕で、左の瞼に疵のある四十男である。また「者生觀」は、どうにもならない悲慘な運命に見舞はれた若い妻を描いてゐる。かくの如く十分悲劇的な、異常な人物と境遇ばかりを選み出してゐる。即ち在來の才子佳人の末は芽出度しの小說と違つて、あく迄も人生の悲慘な方面が取材されてゐる。その意味では確に「悲慘小說」といふ稱號が當つてゐる。又さういふ方面へ新に觀察眼を向け、さう云ふ人物や境遇を發見したことは、大なる功績と言はなければならない。併しその作品を幾篇も讀んで行くと少し鼻について來る事も確かである。といふのは白痴・不具・醜い人間等の特殊な生活或は人間性といふものの、新しい發見をしつつ後から後からと書いて行つたやうな、生きた變化を見出すことが出來ないからである。作者の性情から出た單なる趣味的反覆と感じられ、倦怠を覺える。各々の人物をもつと本當の性格の上に描き出して來たら、作品がもつと力ある生命を持ち得たらう。かくて本當の意味に於て「深刻小說」ともなり得たに違ひないが、前述の如く取材的には十分悲慘であり、深刻的ではあつても、內容的にはさまで深刻とは言ひ得ない。即ち悲慘な人物境遇が單に紹介されるに止つて、それ等獨特の生活が發展してゐない。その「深刻小說」に於てもつと生活に觸れた個性描寫・性格描寫のない點を、何と云つても根本的な不滿としなければならない。また悲慘ならしめんがために異常事を重ね結構をたくみ過ぎて、間々素直な同感を妨げることも、その病弊の一として數ふべきであらう。作風の特色としては、整然たる戲曲的な結構を有すると共に、主として對話を以て人物を描いてゐることである。この對話體とも言ふべき小說は異例な形式だつたが、苦心の末に試みた新手法だつた。それは初期の創作以來、彼は作品から主觀の色を沒したいと望んで、作者の說明を極力省くことに努めた。そして人物を現はすに會話と狀態描寫とを以てしようとしたのである。かゝる客觀的作風に一變するためには二三年何も書けなかつたが、その成就を俟つて生れて來たのが「變目傳」以下「今戸心中」「河內屋」等明治文壇の結晶となつた一聯の作だつた。彼はこの作風を極端まで押詰めて行つて、地の文はすべて作者の說明であるといふ考へから、會話だけで小說を書かうと企圖したが、それは實行に至らなかつた。かうまで會話に主力を置いただけあつて、彼の會話は常に洗練されて巧妙を極めてゐるが、會話に依つて描かれてゐるために、作品を冗漫にした嫌ひもあり、また一篇の均整が失はれるやうな場合も生じてゐる。併し小說內の會話が、彼の努力に依つて一段の進展を見るやうになつたことは忘れてはならない。柳浪は取材と手法と二方面に於て獨歩の領域を開拓し、後代に誇り得る傑作を殘してゐる。紅葉・露伴・一葉の盛名に蔽はれて、その名が大に世に現はれるに至らなかつたのを遺憾とするものである。明治年代の小說家としては、露伴よりも上にあるべき巨匠だと思はれる。晩年は文壇と交渉を絕つ

弘訓（ひろのり）　国学者【諱名】弘庵氏。幼名は[illegible]。通称は初め式部。後、兵庫大夫【異称】[illegible]【生没】天明四年十一月二十六日伊勢国[illegible]郡[illegible]村に生れ、安政三年三月二十一日没。享年[illegible]【経歴】[illegible]【著作】[illegible]【参考】[illegible]

弘前（ひろまえ）　[illegible]

弘法（こうぼう）　[illegible]

[illegible]（[illegible]）　[illegible]

[illegible]（[illegible]）　[illegible]

[illegible]（[illegible]

【琴瑟】琴瑟類は古代に盛んに用ひられたもので、古代琴瑟の中に琴と瑟とを合奏したことは、詩経の「琴瑟在御」の句によつて明らかである。琴は七絃琴で、瑟は二十五絃琴であつて、琴は瑟よりも古いものであつて、瑟は琴から出たものであ

ちえそ　【千曲】

ちくま　【筑摩】

ちくまがわ　【筑摩川】

ちくまがわ　【筑摩川】

ちくまがわ　【筑摩川

貞享書　じょうきょうしょ　貞享元年（一六八四）刊。

貞享暦　じょうきょうれき　貞享元年（一六八四）から用いられた暦。

貞享和歌集　じょうきょうわかしゅう　二十巻

【撰者】北原定俊が撰。【年代】未詳。【内容】貞享年間の歌を集めたもの。【特色】三代集が多くは人名・場の名を撰ぶのに反し、「貞享」と名づけられたのは、本書が初めて。【成立】貞享年間（一六八四―八八）。【写本】内閣文庫・東京大学・東京教育大・宮内庁書陵部・静嘉堂文庫・東京都立中央図書館・東京大学総合図書館・東京大学国語研究室・東京都立日比谷図書館

風刺小説（ふうしこせつ）【言語】風刺文学（ふうしぶんがく）とは、英語のサタイト（Satire）に当る、人間・社会・生活の中の不合理を特徴し、文章・文学を通じて、或は直接的に、或は間接的に、又は教訓的に、或は笑的に、又は嘲笑的に、又は諷刺的に、或は笑的に、又は嘲笑的に、或は諷刺的に、又は教訓

江戸・天保・弘化・嘉永・安政・文久・元治・慶応・明治・大正・昭和・平成・令和・皇紀・紀元・神武・人皇・天皇・年号・参考・人名・地名・書名・歴史・神話・伝説・説話・民俗・民族・民謡・民話・民間伝承・民間信仰・民間宗教・民間医療・民間薬・民間療法・民間説話・民間文芸・民間芸能・民間工芸・民間建築・民間住宅・民間暦・民間年中行事・民間年号・民間人名・民間地名・民間書名・民間歴史・民間神話・民間伝説・民間説話・民間民族・民間民俗・民間民謡・民間民話・民間民間伝承・民間民間信仰・民間民間宗教・民間民間医療・民間民間薬・民間民間療法・民間民間説話・民間民間民族・民間民間民俗・民間民間民謡・民間民間民話・民間民間民間伝承・民間民間民間信仰・民間民間民間宗教・民間民間民間医療・民間民間民間薬・民間民間民間療法・民間民間民間説話・民間民間民間民族・民間民間民間民俗・民間民間民間民謡・民間民間民間民話・民間民間民間民間伝承・民間民間民間民間信仰・民間民間民間民間宗教・民間民間民間民間医療・民間民間民間民間薬・民間民間民間民間療法・民間民間民間民間説話・民間民間民間民間民族・民間民間民間民間民俗・民間民間民間民間民謡・民間民間民間民間民話・民間民間民間民間民間伝承・民間民間民間民間民間信仰・民間民間民間民間民間宗教・民間民間民間民間民間医療・民間民間民間民間民間薬・民間民間民間民間民間療法・民間民間民間民間民間説話・民間民間民間民間民間民族・民間民間民間民間民間民俗・民間民間民間民間民間民謡・民間民間民間民間民間民話・民間民間民間民間民間民間伝承・民間民間民間民間民間民間信仰・民間民間民間民間民間民間宗教・民間民間民間民間民間民間医療・民間民間民間民間民間民間薬・民間民間民間民間民間民間療法・民間民間民間民間民間民間説話・民間民間民間民間民間民間民族・民間民間民間民間民間民間民俗・民間民間民間民間民間民間民謡・民間民間民間民間民間民間民話・民間民間民間民間民間民間民間伝承・民間民間民間民間民間民間民間信仰・民間民間民間民間民間民間民間宗教・民間民間民間民間民間民間民間医療・民間民間民間民間民間民間民間薬・民間民間民間民間民間民間民間療法・民間民間民間民間民間民間民間説話・民間民間民間民間民間民間民間民族・民間民間民間民間民間民間民間民俗・民間民間民間民間民間民間民間民謡・民間民間民間民間民間民間民間民話・民間民間民間民間民間民間民間民間伝承・民間民間民間民間民間民間民間民間信仰・民間民間民間民間民間民間民間民間宗教・民間民間民間民間民間民間民間民間医療・民間民間民間民間民間民間民間民間薬・民間民間民間民間民間民間民間民間療法・民間民間民間民間民間民間民間民間説話・民間民間民間民間民間民間民間民間民族・民間民間民間民間民間民間民間民間民俗・民間民間民間民間民間民間民間民間民謡・民間民間民間民間民間民間民間民間民話・民間民間民間民間民間民間民間民間民間伝承・民間民間民間民間民間民間民間民間民間信仰・民間民間民間民間民間民間民間民間民間宗教・民間民間民間民間民間民間民間民間民間医療・民間民間民間民間民間民間民間民間民間薬・民間民間民間民間民間民間民間民間民間療法・民間民間民間民間民間民間民間民間民間説話・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民族・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民俗・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民謡・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民話・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間伝承・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間信仰・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間宗教・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間医療・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間薬・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間療法・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間説話・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民族・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民俗・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民謡・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民話・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間伝承・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間信仰・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間宗教・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間医療・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間薬・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間療法・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間説話・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民族・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民俗・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民謡・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民話・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間伝承・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間信仰・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間宗教・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間医療・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間薬・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間療法・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間説話・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民族・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民俗・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民謡・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民話・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間伝承・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間信仰・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間宗教・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間医療・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間薬・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間療法・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間説話・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民族・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民俗・民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民間民謡・民間

所の妻となった。京は屋に寄られたお嬢は十歳で、花炭と云って全盛を誇めた。最近京は国ゝ子花炭と訓染が、妻炭となり、春水の左右に侍り、花炭は国ゝ子花炭と訓染が、妻炭となった。

【梗概】本書は家庭から人情本へ入る過渡期の作。京と同じく、京の情人国ゝ子花炭の情人国ゝ子の情人国ゝ子の情人国ゝ子

ずれにしても、「文字」の語は、「文字」の語は、「文字」の語は

風流一新男（ふうりゅうのいっしんのおとこ）　安藤広重・歌川国芳

三島　十二月四日【作者・書工】不明。但し倉田屋市郎兵衛版。【名所絵】歌麿・北斎を一目置く新の風流男。【別名】「新人物」の合名でもある。【用材】新興人物を山手版【題字】名所文字（後の山手）中に安藤広重で「新興人物」と題する。【図柄】「春雪今昔日記」

（同）

【参考】「春雪今昔日記」は、寛政三年十月刊行の「新人物」（歌麿・北斎・広重・国芳）を、「春雪今昔日記」（歌麿・北斎・広重・国芳）と題して、「新人物」の合名版

味とは、本書の一大特色である。〔三田〕

【参考】八文字屋本西鶴作品の多くは、本書を原本として出版されたものである。

風流京鹿子（ふうりゅうきょうかのこ）　浮世草子　五巻【作者】未詳【書工】未詳【刊行】貞享元年（一六八四）【書型】不明【備考】江戸時代の代表的遊廓案内記。

【内容】〔巻一〕「恋の道は命をかけて」、「恋の山は人の目を忍ぶ」、「恋の海は人を沈む」、「恋の川は人を流す」、「恋の野は人を迷はす」、「恋の里は人を捨てる」、「恋の都は人を焦がす」、「恋の国は人を滅ぼす」、「恋の世は人を苦しめる」、「恋の人は人を恨む」、「恋の心は人を思ふ」、「恋の命は人を惜む」、「恋の夢は人を覚ます」、「恋の月は人を照らす」、「恋の花は人を散らす」、「恋の雪は人を消す」、「恋の雨は人を濡す」、「恋の風は人を吹く」、「恋の雲は人を隠す」、「恋の雷は人を驚かす」、「恋の稲妻は人を光らす」、「恋の虹は人を惑はす」、「恋の霜は人を冷す」、「恋の霧は人を迷はす」、「恋の露は人を涙ぐませる

村岡とお雪は工夫の中の主だった者共と、井戸の水上とが、その日の夕方、お雪の家に集まって、相談をした。

村岡とお雪は、水上の家を出て、

「見出し」に十々年間を向けたとしても変ってゐる人物の性格の変化を考慮しつつ、その人物の性格の変化を考慮しつつ、その人物の性格の変化を考慮しつつ、その

言葉に言ひ、はた又はそれに属する中型のものを、いづれも今日の言葉で言へば、「ぶ」の音に属する。

花の巻　はなのまき　外戚の巻（第二十七巻の二）

【作者】未詳【年代】「源氏物語」の年代【成立】「源氏物語」の花の巻を記した一巻。いろいろ説の問題である。本文本巻のの巻巻では別に手若日蔭の「花の巻」があるが、それに関係の関係をそのの巻巻用してゐる巻巻である。それ、それ、それ、

[illegible]

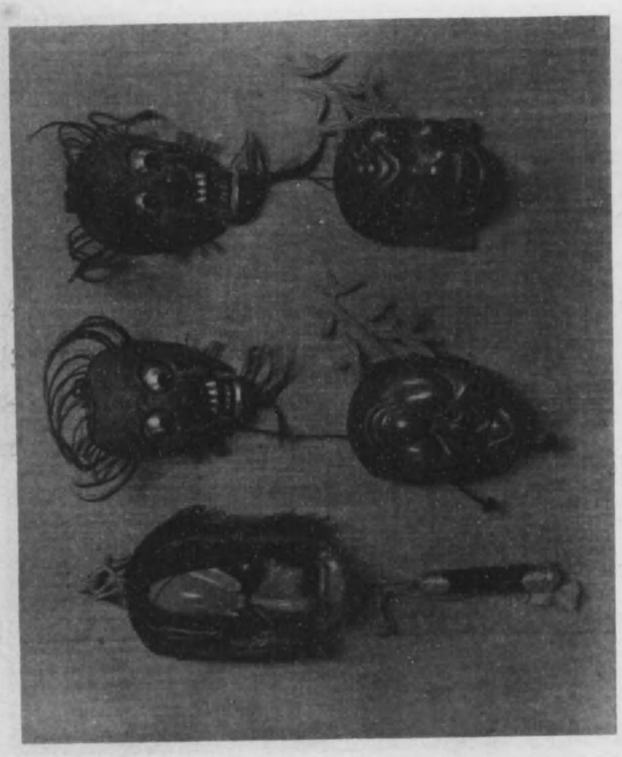
載（のる）【名詞】[illegible]

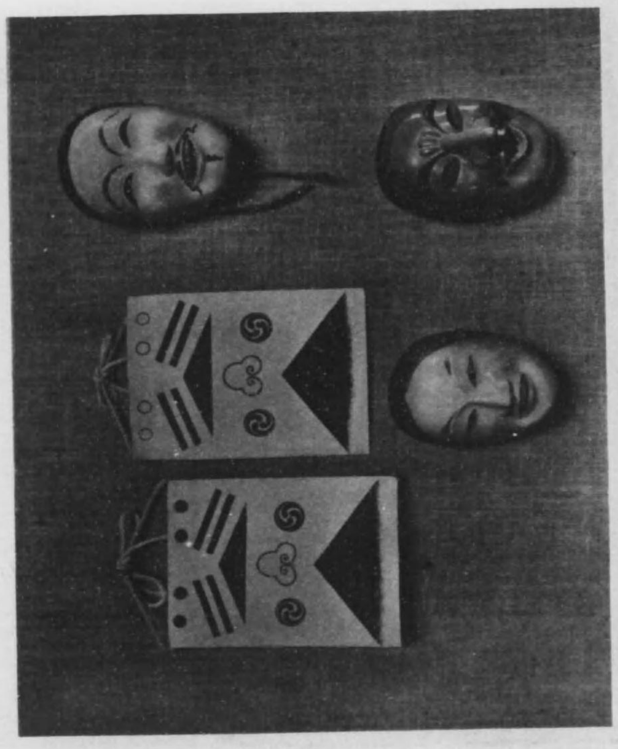
載（のる）【動詞】[illegible]

載（のる）【動詞】[illegible]

載（のる）【動

面樂舞





樂・青海波・蘇莫者・太平樂・蘭王・打毬樂・狛項・安語（舞楽や附し方曲はもの曲がゆ今はこびた）。

【御遊・管絃曲目】 鳥帽子・新鳥蘇・春鶯囀・賀殿・管和樂・蘭王三臺・萬歳樂・酒胡樂・甘州・鳥聲・敦手・胡蝶樂・皇王慶・還城樂・放鷹樂・蘇芳菲・喜春樂・政白柯・求布・越殿樂・河南浦・蘇合香・高砂樂・輪鼓・秋風樂・採桑老。

（二）右舞。樂器には高麗笛・篳篥・太鼓・鉦鼓・三ノ鼓を用ひる。舞樂の曲目は「樂家錄」に從へば、全三十五曲のうち、舞の全く傳はるもの二十七曲、全く斷絶したもの四曲、初めから舞の全く無かつたもの四曲であるといふ。即ち舞の傳はるものは左の通りである。

新鳥蘇・古鳥蘇・還宮樂・蘇莫者・皇仁・狛鼻・城壁・綾切・急手・鳳凰・造物・納大・新靺鞨・八仙・石川・胡飛・延喜樂・打毬・胡徳樂・仁和樂・長保樂・納利・林歌・綾志摩利・地久・賀殿樂・白鬼。

【大曲・中曲・小曲】 大機如管は、六人舞を大曲とし、四人舞を中曲とし、二人又は一人舞を小曲としたが、この區別は明かでなく、中曲にも六人舞があり、また二人或は一人舞がある。要するにこの區別は曲の格式から定められたものであつて、大曲は序・破・急揃つてゐるもので、中曲はその缺けたもの、小曲は小さな形式のものをいふのである。大曲は最もこれを重んじ、その傳を絶する場合が多く、管島にはこれを傳へない。中曲の中で、これに準ずる格式のものを準大曲といふ。大曲は（左舞）皇帝・閑鳳凰・春鶯囀・蘇合香（右舞）新鳥蘇・古鳥蘇・還宮樂・迦陵頻・地久・賀殿樂・皇仁・狛鼻・城壁・綾切・急手・鳳凰・造物・納大・新靺鞨・八仙・石川・胡飛・延喜樂・打毬・胡徳樂・仁和樂・長保樂・納利・林歌・綾志摩利・地久・賀殿樂・白鬼。

【大曲・中曲・小曲】 大機如管は、六人舞を大曲とし、四人舞を中曲とし、二人又は一人舞を小曲としたが、この區別は明かでなく、中曲にも六人舞があり、また二人或は一人舞がある。要するにこの區別は曲の格式から定められたものであつて、大曲は序・破・急揃つてゐるもので、中曲はその缺けたもの、小曲は小さな形式のものをいふのである。大曲は最もこれを重んじ、その傳を絶する場合が多く、管島にはこれを傳へない。中曲の中で、これに準ずる格式のものを準大曲といふ。大曲は（左舞）皇帝・閑鳳凰・春鶯囀・蘇合香（右舞）新鳥蘇・古鳥蘇・還宮樂・迦陵頻・地久・賀殿樂・皇仁・狛鼻・城壁・綾切・急手・鳳凰・造物・納大・新靺鞨・八仙・石川・胡飛・延喜樂・打毬・胡徳樂・仁和樂・長保樂・納利・林歌・綾志摩利・地久・賀殿樂・白鬼。

子の文なく、ただ大體に於て何拍といふ定めだけあつて、太鼓の數は定まつてゐる。「破」と「急」とは細分され、拍子の文があり、太鼓の間に鞨鼓を用ひてこの文を彩つてゐる。概して「破」には延拍子が多く、称かに緩やかなものであるが、「急」の方は早拍子で急速に奏され、舞も從つて速かである。舞樂の中には「序」を缺くものも多くあり、「太平樂」の如きは「序」の代りに遣行として「朝小子」といふ曲を用ひる。これは延拍子であつて、その形式は全く破である。

【番舞】 普通舞樂を行ふ場合に、左舞一つと右舞一つとを互に組合はせて行ひ、これを一番とす。かく左右を一組として見る時は、これを番舞といひ、後に行ふ右舞を初めに行ふ左舞の答舞といふ。普通には大曲は大曲同士、中曲は中曲同士、小曲は小曲同士番舞とする。それ許りでなく、組合はさるべき曲は大體に於て定まつてゐる。例へば「皇帝」と「新鳥蘇」、「萬秋樂」と「林歌」等の類である。又中には特殊なものは、左舞同士で組合はせて番舞とすることもある。併しその時は、多くは後の曲を右樂に直して行ふ。例へば「抜頭」と「還城樂」とを番舞とする時に、「還城樂」を右樂に直して行ふが如きその好例である。即即位禮に際して「萬歳樂」と「太平樂」とを共に左舞のまゝで組合はせて行ふ如きは、極めて特殊な例である。又中には番舞とせずに單獨に行ふところの舞もある。

【文舞と武舞】 舞人が鉾を持ち、又は太刀を帶びて舞ふものを武舞といふ（例、鳥帽子・蘭陵王・敦手・蘭陵王・信濃・蘭陵王・武昌太平樂）。何れも武の功を表はして作つたものである。これに對して、鉾をとらず、文の德を表はして舞ふものを文舞といふ（例、春鶯囀・玉樹後庭花・皇帝・赤白桃李花・喜春樂・萬歳樂・還城樂）。

【童舞】 特に幼童が舞ふ時は、これを童舞といふ。童舞は全く假面を用ひないで、その服裝の如きも特に兒童に相應しき美しき衣裳を用ひる。古來童舞として用ひられるものは、迦陵頻・五常樂・皇擊・清上樂・泛龍舟・胡蝶・登殿樂・東遊の八曲であつたが、「體源抄」に從へば、この外に、賀殿・萬歳樂・輪鼓・打毬樂・還城樂・蘇利古も童舞として行はれるといふ。又「樂家錄」によると、近代には陵王・納蘇利・抜頭・散手も童舞として行はれるといふ。

【女舞】 女舞とは、內教坊の妓女が舞ふものをいふ。平安朝に於て行はれた。その曲は春鶯囀・玉樹後庭花・赤白桃李花・喜春樂・萬歳樂・皇帝・萬秋樂等である。服裝も特に女服を用ひる。近代には全く亡びた。

【走物】 活潑に舞臺を飛び走る舞を走物といふ。「教訓抄」に「口傳云、走物は體を貴て、木を折樣がごとくに舞なり。延所は殊更に徐かに、早所をば殊に火急に舞べきなり」と言つてゐる。その曲は、例へば散手・陵王・抜頭・還城樂・貴德・納蘇利などである。

【舞樂裝束】 大別して、舞人裝束と唐裝束との二種とする。舞人裝束とは倭舞・東遊（各別項）の如く、我が國古來の樂舞に用ひるものであつて、倭舞は令人の文官の裝束をなし、東遊は衛府の武官の服裝をなす。唐裝束は、唐樂・高麗樂舞に用ひ、これに又常裝束と別裝束との二種がある。常裝束とは最も多くの舞樂に用ひるもので、鳥甲をかぶり、半臂・下襲・袴・表袴・赤大口・忘緒・石帶・襪・糸鞋・掛袴・末廣を用ひるものである。別裝束とはその舞に特に使用する服裝をいひ、その中で西域及び印度方面から來た舞には胡服を用ひる。これは捲袴と褐し、金襴緣と毛緣緣との二種がある。一幅の布の中央は孔を穿ち、頭を貫き出してこれを被るもので、胸と背とに當る。その緣を金襴で緣どつたものは、信濃・伯仲などに用ひ、その緣を白い絲毛で緣どつたものは陵王・納蘇利等に用ひる。常裝束でも特に褐袴とは縫物の轉訛で、俗に獅子丸といひ、獅子が二匹相向つて丸くなつてゐる模樣である。甲は別裝束では種々の形がある。別鳳凰・春鶯囀・賀殿・蘇合香・萬秋樂・輪鼓・新鳥蘇・皇仁・貴德・鳥蘇八仙・林歌・綾切・地久等は、特殊の形の甲を用ひてゐる。又太平樂等は軍陣の甲を用ひる。また安摩・甘州・五常樂・春庭樂・喜春樂・央宮樂・打毬樂・一鼓・古鳥蘇・蘇利古・散手・伯仲・埴破・仁和樂等は、發冠の冠を用ひる。これは衛府の武官などが舞つたから起つた名殘らしい。なほ陵王・胡飛酒・二ノ舞・採桑老・抜頭・還城樂・迦陵頻・胡徳樂・納蘇利・胡徳樂・八仙・蘇志摩利・綾切・地久等では布製の帽子をかぶる。迦陵頻・胡蝶は、特に童舞として天冠を用ひる。一般に裝束は、左舞では紅色を用ひ、右舞では綠色を用ひることになつてゐるが、稀に他の色を用ひることもある。

【舞樂面】 舞樂には、假面を用ひるものと用ひないものとがある。その假面を舞樂面といふ。これを大別して普通の假面と遺面（雜面・藏面とも書く）との二種とする。普通の假面は木製に彩色を施したもので、人面あり獸面あり獸面あり鳥面あり、人面でも男女老幼の別、或は笑ひ或は怒り或は奇異の容貌をなしてゐるものがある。これを普通に大面・中面・

舞樂裝束

八仙

青海波

貴德

太平樂

の中を和歌したるなり。而してこれらの古田家の事は、大方の書は家伝の「書類」なるものを見るに、「書類」は「書類」なるものの起原は、[illegible]。又、その古田家の作と称する「書類」は、[illegible]。

【記紀】歴史に於ける記紀の価値は、[illegible]。

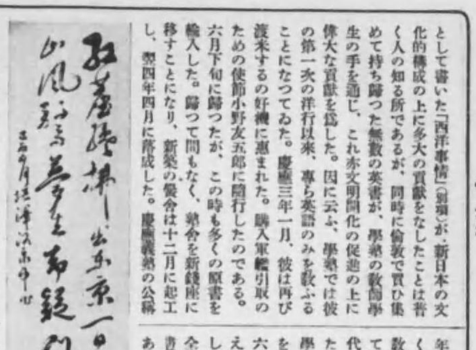
【歴史】歴史の研究は、[illegible]。

【歴史】歴史の研究は、[illegible]。

【歴史】歴史の研究

色を示したものもあるが、他に例のない手見出しの中に、「作者」の「作者」の「作者」の

として書いた「西洋事情」(別項)が、新日本の文化的構成の上に多大の貢獻をなしたことは吾く人の知る所であるが、同時に倫敦で買ひ集めて持ち歸つた無數の英書が、學塾の教師學生の手を通じ、これ亦文明開化の促進の上に偉大な貢獻を爲した。因に云ふ、學塾では彼の第一次の洋行以來、專ら英語のみを教ふることになつてゐた。慶應三年一月、彼は再び渡米するの好機に惠まれた。購入軍艦引取のための使節小野友五郎に隨行したのである。六月下旬に歸つたが、この時も多くの原書を輸入した。歸つて間もなく、塾舍を新錢座に移すことになり、新築の愛舍は十二月に起工し、翌四年四月に落成した。慶應義塾の公稱



編澤諭吉筆蹟

年時事新報を創刊。これより彼の述作は、多く同紙上に現はれた。後半生の彼は、後進を教へ、社會を導く熱意は衰へず、折に觸れて述作する所頗る多かつた。世間また彼を一代の師表と仰いで、事毎にその論述を謹聽したのであつた。就中、晩年公けにされた「女大學評論」「新女大學」の如きは、最も時人の耳目を驚動したものである。同三十一年九月二十六日、突如腦溢血に襲る。率にして程なく癒えたが、同三十四年一月二十六日、舊病再發し、二月三日逝去として逝つた。【著作】編澤全集五册(時事新報社版)・編澤全集十册(國民圖書株式會社版)・續編澤全集七册(岩波書店版)が ある。著作は單行本として出版せるもの六十部百十六册(その中初の木板數册であつたものを、後、活字版一册として飜刻したものもある)、新聞雜誌に發表した論文に至つては、その數を知らぬ。發表新聞雜誌の主なるものは、後半生には時事新報、前半生には「明六雜誌」「民間雜誌」等である。單行本の方は唯一部を除き、時事新報所載の主要論文と共に全部新版編澤全集に所收。全集に遺されたる唯一の單行本「兵士懷中便覽」は、明治文化全集軍事篇に收められ、又「明六雜誌」「民間雜誌」に寄稿の分は、同全集雜誌篇に收む。その著書中、有名なものとしては「學問のすゝめ」「西洋事情」「編倉百話」「文明論の概略」「世界國盡」「各別項」等がある。

【人物・批評】彼は一種の思想家だが、嚴格な意味に於て學者ではない(中村正直參照)。尤もあの時代の學者として彼を觀るとき、我々は彼の洋學者であることを忘れてはならぬ。その頃の洋學者とは、單に西洋の書物を讀み、西洋の學藝に通ずると云ふだけではない。從來の學的傳統を排し、寧ろ漢儒の流風を迂闊用ふるに足らずと爲し、正統學派に對する反逆兒たることを共通の特色とするものである。彼はこの點に於ても、最も徹底した洋學界の雄であつた。彼の自由思想は、一面に於てその生立にも據るが、自然科學の一端を學ぶに及んで大に熱成したものらしく、不合理・非常識・迷信を排するの態度は、大阪時代に於て可なり深く養はれた。自叙傳の中でも、彼は自然の原則に重きを置き、數と理との二つを基本として人間萬事有形の經營を割出すと言つてゐる。從つてその言ふところ一見奇拔なるが如くにして一として人性の自然に適合せざるはない。あの時代にあれほど徹底的に、古い習性から解放され切つてゐるのは驚くべき事實である。而して彼は一面に於て熱情に富む教育家であつた。日本國と日本人とを不合理非常識の梁脉の域より救ひ出さうと精を竭して努めたのである。維新開明と云ふは名ばかりで、未だに殘存する封建文化の殿堂、就中封建的組織に依頼する寄生生活を排撃した。議論するばかりでなく、實行に依つて人を驚かした事も屢々ある。例へば藩主奥平家より御紋附の紬袖の羽織を拜領して歸る途中、これを友達に一兩三分で賣り拂つたとか、又慶應義塾草創の際、當時としては甚だ聞えの惡い授業料を徴收したとか云ふの類である。詰り彼は數十年時勢に先んじた見識を有つてゐたのである。その見識で同胞を訓へ、少しも早くその水準を高めようと努めたのである。その目的のためには時には心にもない曲論强辯をもした。但し彼は何處までも科學的推理と合理的反省とで一貫し、どんなに曲論强辯はしても、單なる破壞論には墮ちない。自由自主を說く一面に於て、又あの時代に於ける獨立自尊主義の歴史的意義を解する所以ではない。彼が所謂實學を主張したに就いても同樣の事が云へる。就中彼が金錢を崇ぶに於ける人材の活躍を鼓舞し、以て一面封建本主義の謳歌者たるの嫌があると云ふ點は、屢々世人の問題とする所だが、個人としての經濟的獨立と共に、國としての富國强兵を說いた彼としては當然の事であらう。併しこれを以て彼の思想の到らざるを非難するは當らない。最後に我等は彼の人格全體が、その思想行動と共に、舊習への反逆兒であり、何等因へらるゝ所なき自然兒であつた事を力說して殷きたい。彼は決して世の常の謹厚嚴格なる君子人ではなかつた。素晴しい茶目であつた。

するに當つても、決して虛禮の衣は着けなかつた。接するほどの者は常に必ず人間味たつぷりの赤裸々の編澤諭吉を見せ付けられたに相違ない。これ彼が自ら多大の感化を周圍に及ぼして比倫稀なる教育家と呼ばるゝ所以である。殊に我等の彼に推服するのは、年を取つても常に清新の氣性を失はなかつたことである。死に至るまで國民の先端に立つて立派に指導者の任務を盡した。この點に於て彼は新日本の發言者として尊崇せらるゝに値するものである。

【參考】編澤全集○編澤自傳(全集別册)○編澤先生哀悼錄(慶應義塾學報第三十九號臨時增刊)○編澤諭吉田中王堂○編澤先生の手紙鈴木西四郎○町人諭吉 太田正孝 〔吉野〕

副詞 ふくし 文法 【解說】用言及び他の副詞を修飾して叙述性のない品詞。「靜かに流る」「飛る多し」の「靜かに」「飛る」の如く、用言の屬性を修飾するものもあり、「けだし有らざらむ」「かならず行ひ易し」などに於ける「けだし」「かならず」の如く、用言若しくはこれに助動詞の伴つたものの叙述の樣式を修飾するものもある。前者はまた他の副詞を以て修飾することがある。「いと靜かに」「やゝ平かに」などの「いと」「やゝ」などがそれである。副詞はまた「なり」「たり」「如し」の如き助動詞を修飾することがある。「けだし驚くべき惡事ならむ」「必ず大臣たらむ」「恰も雪の如し」などの「けだし」「必ず」「恰も」などがそれである。これは「なり」「たり」が叙述性のある助動詞であるからである。副詞はまた體言を修飾することがある。「かりそめの病」「大抵のこと」「やゝ南に」など。

【種類】上述により三種の副詞のあることを知る。これによつて山田孝雄氏は、第二項の如き用言の屬性を修飾するものを情態副詞、第二項の如き叙述の樣式を修飾するものを陳述副詞、第三項の如き屬性の程度を示すものを程度副詞と名づけた。又氏は、接續詞・感動詞を品詞とせずして副詞の中に入れ、これをそれぞれ接續副詞・感動副詞とした。

【說說】副詞といふ名稱は、中野柳圃がこれを用ひたことがあるが、國語の品詞としてこれを說いたものの最初は、中金正衡の「大倭語學手引草」である。今日の如き副詞を立てたのは田中義廉の「小學日本文典」に始まる。元來副詞は語形變化がない故、舊時代の學者の間には體言の一類として見られたもので、その副詞の一類を立てるやうになつたのは、「西洋文典の影響である。抑々副詞は、既慶已ではアリストテレスの體言・用言・助辭の三別を嗣ぎ、ストア派の學者が助辭より冠詞を抽き出し、外に第五類を立てたものが、ラテン文典に副詞の名を與へられたのに始まり、遂に今日廣く各國の文典に採用されたもので、我が國では主として品詞研究の基礎を語の形態に置いたから、職能上より他の體言と分つべき副詞の如きものは、おのづから觀察の視界に入ることが遲かつた樣ひがある。しかのみならず、一般に副詞といふものを立てるに至つた今日も、副詞といふ品詞の本質が明かでなく、なほ副詞の一品目を立てることを躊躇するものもあり、その反對に廣く副詞の中に接續詞や感動詞を入れんとするものもあり、或は又副詞が「に」「と」を伴つて活動するものが多いのを見て、「靜かに」「さら〳〵と」の如く「に」「と」を伴つた全體を副詞とし、「に」「と」を接尾語と見るものもあり、「に」「と」は助詞で、これを除いた「靜か」「さら〳〵」等のものこそ副詞であると認するものもあるやうに、副詞に關する說は、衆議紛々として未だに一定する所がない。

【參考】日本文法論 山田孝雄

編士幸次郎 ふくしこうじらう 詩人 【閱歷】明治二十二年十一月五日青森縣弘前市に生る。開成中學・國民英學會等に學び、後、佛語を修した。同四十二年、人見東明等の自由詩社に入りて同人となる。當時實用と號した。「自然と印象」に詩を發表したのが最初である。【作品・作風】彼の詩は、官能的なフランス象徵詩派の影響をうけつつ、その中に人間的な感情を盛り、客智的な理性をもつてゐた。處女詩集は「太陽の子」(大正三年)である。同年彼の雜誌「ラテール」に於て特別號を出し、彼の詩集號となした。それが「憑まれない靈」である。この二集を合はせ、更に新作を加へたものが「展望」(大正九年)である。「太陽の子」の或るものには著しく自我主義的な詩がある。文壇に人道主義の唱へられてゐた時代の詩である。彼の人道主義は說教的でなく、個人的な親しさを以て人間の魂に觸れようとするものである。が、その詩的內容に於て最も人間的な、詩としての本道を保つてゐる抒情詩として、その詞句表現に多少の調譜臭はあるにせよ貴重なものをもつてゐる。 〔川路〕

復讐奇話天橋立 ふくしうきでたてはしだて 讀本 五編五册 【作者】十返舍一九 【畫工】一陽齋豐國 【名稱】復讐奇話は角書。內題には「敵討天橋立」とある。【刊行】文化三年(六編二卷)、文化四年(後編一卷)、文化五年(續編一卷)。【諸本】榮潤堂草三浦源助出版の再摺本がある。一九全集(帝國文庫)所收。

【梗概】丹州岩谷の家臣日下部藤彌太は、中禪寺に於て同國元伊勢山の家臣大谷木九郎兵衛の助太刀を得て、惡黨なる同國長尾の家臣大貝崎直藏・飯貝丹下の兩人を討ち取つた。併しその後藤彌太は、直藏の兄豪右衛門のために暗殺され、九郎兵衛は豪右衛門並に丹下の弟仙之丞に暗夜袖放で襲はれ、却つて逆襲するが父を討たれてしまふ。然るに彼等はその卑怯な振舞が主君の勘氣に觸れて追放され、九郎兵衛は父の仇豪右衛門等を探ねて旅に出る。また藤彌太の女おみなは、從弟である小瀧辨五郎を助太刀として敵討に出るが、辨五郎が單身岡山に向つた後、娘およねを殘して病死し、およねは薄摩の傳六實は仙之丞のために室津に到り、國らずも初浪と二世を契り、遂に仙之丞を討つたが、病に犯され、善八郎實は豪右衛門は初浪を慕ひ、辨五郎のあるを知つて初浪を身請けしようとするが、初浪はこれを愛へて親里の親合に走つた。そこで善八郎はあとに殘つた吉彌を引取つて、巧みに初浪の行方を明かさうと、善八郎の義父が慘殺されてゐたのを知らせようと、その家に行くと國らずも吉彌を救はんがために來た辨五郎と會し、善八郎が兩人の仇豪右衛門なるを知り、手を携へて親合に向ひ、親合與兵衛の冥助の下にめでたく本懷を遂げた。

【解說】作者は、「丹後國」といふ作者不明の寫本を得て、摸作したものだと言つてゐる。又勝は失の本、負るは得の本と言つた超然たる作意に筆を起してはゐるが、善は惡を倒し、西

は十四歳時代から俳句を作って一度しか出句しなかったが、それも不調所であった。それも第一中心とした句であった。【参考】

【参考】「高今比奈子句集」（昭和三十年）

横澤右談雀根沼（よこさわうだんじゃくねぬま）

【参考】田中冬二「青い海」（昭和十年）

【参考】横澤右談雀根沼（よこさわうだんじゃくねぬま）は、明治三十年代から大正初期にかけて、俳壇に活躍した人物である。

集で、以後詩壇を騒れ、幾度に渡って新聞記者となり、日ごろ愛の詩人と同行に交流してゆく。「春の春」は、明るく可憐な交感をもつ抒情詩である。（川路）

譜利樂振（ふりらくぶ）　小説家・戯曲作者・新聞記者【本名】勝（まさる）【筆名】天涯十川（てんがいじゅうせん）　明治三十九年三月二十三日、京都新石町に生れ、明治三十九年一月四日没。享年六十六【図書】父は新潟山陰にその才を知られた書道家若勝（若竹）で、幼時は、父の文学の才能の遺産を受け継いだ。彼は十歳で酒に親しんでから十三歳の頃、まで、父に教学の会話を教えられ、十六歳の時、幼少八十行を父のもと原一郎と云ったが、その後年、和歌大学専門部（文学）に就いて国語を学び、新潟新聞に入社、十七歳で和歌山県下に共産運動を図った。その名産今城中毒事件に知られ、明治三十年、中毒に罹行して流来、新潟を離れ、文学を志し、「詩の文学」を刊行した。

新潟県中蒲原郡村人名簿帳（写真）

花園の今に出来た。彼は明治六年夏で、文学に走いた。彼は明治六年夏で、文学に走いた。彼は明治六年夏で、文学に走いた

ゥをもらうが、ふ、ふ、ふ

【参考】[illegible]

古事類聚抄

[illegible]

古事類聚抄

[illegible]

古事類聚抄

に、早く座席を手に入れて、座元御贔屓として以来の力を尽して来た矢張十一年四月「芝居詩歌記」で、出雲ひで雪の役の名手をツキ古今の大役ぶりであった。来の十二年二月には「源氏物語」の「夕顔」「葵」「若紫」「末摘花」「紅葉賀」「花宴」「賢木」「須磨」「明石」「澪標」「蓬生」「関屋」「絵合」「松風」「朝顔」「乙女」「玉鬘」「初音」「胡蝶」「蛍」「常夏」「篝火」「野分」「行幸」「藤袴」「真木柱」の切、書写の役で、小三郎の王朝人物の人物の口調が、五節が出雲が、日を閉ぢることの出来たのが、大詞翔と

春見る穴人の土器

書籍 「西氏説の書籍」を見よ。

富士樹 【作者】山崎直方 【発行者】東京地学協会 【刊行】明治三十年刊、十七年の調査に基づき出版された。【内容】大和朝廷は富士山を「不二」と呼んだ。「不二」は「不死」の意味で、不老不死の仙境の象徴。「不二」の字は「二人の男が一人の女を争う」の意味。「不二」は「二人の男が一人の女を争う」の意味。「不二」は「二人の男が一人の女を争う」の意味。「不二」